富樫館跡 Ⅲ

2003年

石川県野々市町教育委員会

富 樫 館 跡 Ⅲ

2003年

石川県野々市町教育委員会

例　　言

1　本書は富樫館跡、山川館跡の発掘調査報告書である。富樫館跡発掘調査報告書について、野々市町教育委員会はこれまで「冨」の字を使用していたが、本書より「富」に改め、今後はそれに統一する。

2　富樫館跡の所在地は、石川県石川郡野々市町住吉町及び扇が丘地内、山川館跡の所在地は、野々市町高橋町地内である。

3　富樫館跡の発掘調査は、都市計画道路工事、町道工事、住宅・店舗建設に伴うもので、昭和61年度～平成８年度まで12箇所実施した。山川館跡は、平成５年度に住宅建設に伴う発掘調査であった。上記遺跡の調査は、野々市町教育委員会が実施した。個別調査の期間や面積は、「第２章　調査に至る経緯」の発掘調査区一覧表に掲載した。

4　現地調査は、調査区①、調査区⑥、調査区⑦－Bを吉田淳、調査区⑦－Cを横山貴広と田村昌宏、調査区②、調査区④、調査区⑧、山川館跡を田村、調査区③、調査区⑤、調査区⑦－Aを徳野裕子が担当した。

5　出土品の整理は、平成15年度に田村が担当した。

6　本書の執筆編集は第３章第７節が吉田、その他は田村が担当した。

7　出土品の写真撮影は田村が担当し、徳野が補佐した。

8　発掘調査及び本書の執筆にあたっては、下記の方々から御教示・指導を得た。記して感謝申し上げたい。（敬称略）
岡本恭一、垣内光次郎、滝川重徳、布尾和史、藤澤良祐、藤田邦夫

9　本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
(1)　本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示する。
(2)　水平基準は海抜高であり、(m) で表示する。
(3)　各図の縮尺は以下のとおりである。
遺構：１/200、１/100　、１/80、１/60、１/40、１/20
遺物：１/３、１/２、１/１
(4)　出土遺物実測図の番号は、遺物一覧表・写真図版中の番号に対応する。
(5)　遺構名の略号は以下のとおりである。
掘立柱建物 (SB)、竪穴状遺構 (SI)、溝 (SD)、井戸 (SE)、土坑 (SK)、小穴 (P)
不明遺構 (SX)

10　本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会で一括保管している。

目　　次

第１章　位置と環境
第１節　地理的環境と遺跡の位置 …… 1
第２節　周辺の遺跡 …… 1

第２章　調査に至る経緯 …… 4

第３章　遺構と遺物
第１節　調査区①（ジョウカク地区） …… 7
第２節　調査区②―A、②―B（ジョウカク地区） …… 16
第３節　調査区②－C（ジョウカク地区） …… 42
第４節　調査区②－D（ジョウカク地区） …… 42
第５節　調査区③（鬼ヶ窪地区） …… 43
第６節　調査区④（ナガドイ地区） …… 45
第７節　調査区⑤（ナガドイ地区） …… 50
第８節　調査区⑥（ノダ地区） …… 54
第９節　調査区⑦－A（1995年度調査　ミヤジ地区） …… 60
第10節　調査区⑦－B（1989年度調査　ミヤジ地区） …… 60
第11節　調査区⑦－C（1990年度調査区　ミヤジ地区） …… 64
第12節　調査区⑧（アラタ地区） …… 67
第13節　調査区⑨（山川館跡） …… 70

遺物観察表 …… 73

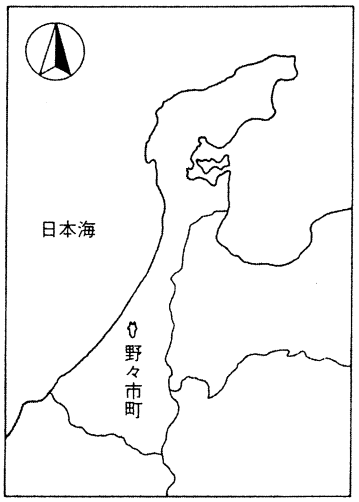
第４章　まとめ
第１節　館の位置と範囲 …… 91
第２節　館周辺部の状況 …… 93
第３節　出土土器・陶磁器類の組成 …… 93

写真図版 …… 97

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境と遺跡の位置

野々市町は、石川県のほぼ中央にあたる石川郡の北部に位置する。町の大きさは南北約6.7km、東西約4.5km、面積約13.56km²で、北と東は金沢市、西は松任市、南は鶴来町に接する。町域は、霊峰白山を源とする県下第１級河川手取川によって形成された手取川扇状地の東部にあたり、扇央部から扇端部にまたがる。当町の最も高い地点は50m、最も低い地点は10mで、平坦な地形が続いている。地形上の影響もあってか、稲作農業が主産業で、この他に施設園芸なども多くみられる。近年は、県庁所在地金沢市の隣町という地理的条件から、商工業の立地や住宅化の進展が著しい。特に北の御経塚地区や南の新庄地区は大型スーパーの立地が相次ぎ、金沢市郊外の小売業の中心地となっている。また、県立農業短期大学、金沢工業大学などの教育機関も多く、学園町としての性格ももっている。



第１図　野々市町位置図
(S＝１/3,000,000)

現在の野々市町は平坦な地形であるが、中世以前は、微高地と微低地が混在する凸凹の激しい地形であった。これは、手取川から派生する無数の小河川が洪水や氾濫を繰り返すことで、島状の微高地をつくり出したからである。富樫館跡を含む遺跡の多くは、この低地間の微高地上に存在している。

富樫館跡は、野々市町東部の住吉町、扇が丘地内に所在する。本遺跡は、近世に宿駅として栄えた本町地区（旧野々市村）の南約300mに位置し、遺跡を分断するように北陸鉄道石川線が南北間を走る。遺跡周辺は、大正時代に実施された耕地整理で整備された水田が広がっていたが、最近は宅地開発が増加し、その風景も大きく変わろうとしている。

第２節　周辺の遺跡

本遺跡の所在する金沢平野東部は遺跡が集中する地域で知られ、縄文時代から中近世にかけて注目すべき遺跡が大変多い。

縄文～古墳時代にかけては、手取川扇状地扇端部に集中する。これは、手取川から流出し地下に潜る伏流水が扇端部で地上に吹き上がり、この水の育みが遺跡に大きく関係するからである。

縄文時代の最も古い時期としては中期中葉に古府遺跡(01078)、時期が少し下って後期前葉に押野大塚遺跡(16038)が存在する。後期中葉以降は遺跡が徐々に増加し、馬替遺跡(01400)、米泉遺跡(01125)、御経塚遺跡（16027)、新保本町チカモリ遺跡（01064)、長竹遺跡（08044）など標識遺跡をはじめとする遺跡が集中する。

弥生時代では前述した御経塚遺跡から前期の弥生土器が出土し、中期になるとII様式の良好な資料がみられる矢木ジワリ遺跡（01059）が存在するが、散発的な様相である。ところが後期に入ると、安定した稲作を背景とする人口の増加とともに集落の形成が活発化し、横江古屋敷遺跡（08142)、御経塚シンデン遺跡（16030)、御経塚遺跡（ツカダ、デト地区)、長池ニシタンボ遺跡（16026)、押野大塚遺跡、押野タチナカ遺跡（16036)、押野ウマワタリ遺跡（16037)、高橋セボネ遺跡（16041）額谷ドウシンダ遺跡（01105）など遺跡が急激に増加する。

古墳時代に入ると、御経塚シンデン古墳群（16031）や横江古屋敷遺跡から地域の統合を物語る初期の前方後方墳を含む古墳群が出現する。また、前期の集落遺跡として上荒屋遺跡（01053）が存在するが、これ以降、集落の拡散により７世紀後半以降まで目立った遺跡はみられない。

奈良・平安時代には、手取川扇状地扇央部で政治勢力を背景とした開発が着手される。７世紀には

扇央部にあたる野々市町末松地内で末松廃寺（16013）が建立され、その後、末松A遺跡（16009）、清金アガトウ遺跡（16022）、粟田遺跡（16008）などの集落遺跡が展開していく。また、扇状地扇端部では、初期荘園の横江荘々家跡（08134）と上荒屋遺跡が出現する。

中世に入ると、手取川扇状地の再開発に乗り出す在地領主の林氏と富樫氏が台頭してくる。林氏は野々市町南部から鶴来町にかけて、富樫氏は高橋川から伏見川中流域一帯にかけて地盤を築いていった。承久の乱（1221）で朝廷側についた林氏に対し、幕府側についた富樫氏は守護北条一門の下で勢力を発展させていった。建武２年（1335）足利尊氏は富樫高家を守護職に任じ、この頃から野々市に館を構え、そこに守護所を置いたとされている。長享２年（1488）加賀の一向一揆で富樫政親が自刀してから急速に富樫氏の権力が落ちていき、天文15年（1546）金沢御堂建立後は金沢が国内の政治・経済・文化の中心地となっていった。

守護所となる富樫館跡（16039）より北へ1.5kmには、富樫氏の庶流押野氏の屋敷とされる押野館跡（16035）が存在する。なお、近隣には富樫氏の菩堤寺である大乗寺があったといわれているが、確認するまでは至っていない。富樫館跡から東方２kmには富樫氏の詰城高尾城跡（01008）が所在する。城は昭和45年の土砂採取の工事によって破壊をうけてしまったが、一部は残存していることが最近の調査で明らかとなっている。14～15世紀には、各地で横江館跡（08137）、三林館跡（16023）、野々市町堀内の堀内館跡（遺跡番号なし）などの館跡や長池キタノハシ遺跡（16025）、二日市イシバチ遺跡（16024）、御経塚遺跡（デト地区）、扇が丘ゴショ遺跡（16042）などの集落遺跡が散在する。

近世にはいると、野々市周辺は金沢城下町の近郊地として、各地に農村が点在するようになる。富樫館跡の北隣にある旧野々市村も稲作を主体とした農村のひとつであるが、金沢から京都へと向かう北国街道の一番目の宿駅にもなっている。

明治９年（1876）、富樫館付近には農事社と呼ばれる農業学校が設立され、この地で耕地整理の実験がおこなわれた。この耕地整理によってこれまで残っていた館の土塁や堀は悉くなくなり、その後、館の所在地がわからなくなってしまった。

昭和42年（1967）、館から北へ約200m離れた所の北陸鉄道石川線金沢工大前駅の横に「富樫館跡」の石碑が立てられた。この石碑によって、現状で確認ができない富樫館の存在を一般の人に認知することができた。

遺跡番号	遺 跡 名	時　　代	遺跡番号	遺 跡 名	時　　代
01008	高尾城跡	室町	16008	粟田遺跡	縄文・奈良・平安
01052	中屋サワ遺跡	縄文・中世	16009	末松A遺跡	縄文・平安
01053	上荒屋遺跡	縄文～平安	16013	末松廃寺跡	奈良・平安
01059	矢木ジワリ遺跡	弥生・古墳	16022	清金アガトウ遺跡	平安～中世
01064	新保本町チカモリ遺跡	縄文	16023	三林館跡	安土桃山
01078	古府遺跡	縄文	16024	二日市イシバチ遺跡	中世
01080	黒田町遺跡	平安	16025	長池キタノハシ遺跡	中世
01105	額谷ドウシンダ遺跡	縄文～平安	16026	長池ニシタンボ遺跡	縄文・弥生
01121	扇台遺跡	弥生・平安	16027	御経塚遺跡	縄文・弥生・奈良～中世
01125	米泉遺跡	縄文・弥生・平安	16031	御経塚シンデン古墳群	古墳
01129	有松A遺跡	縄文	16033	能代遺跡	縄文
01400	馬替遺跡	縄文	16035	押野館跡	室町
08041	橋爪ガンノアナ遺跡	奈良・平安	16036	押野タチナカ遺跡	弥生・古墳
08044	長竹遺跡	縄文～古墳・中世	16037	押野ウマワタリ遺跡	弥生
08045	乾町遺跡	縄文～近世	16038	押野大塚遺跡	縄文・弥生
08134	横江荘々家跡	平安	**16039**	**富樫館跡**	**縄文・中世**
08137	横江館跡	中世	16040	高橋ウバガタ遺跡	弥生
08142	横江古屋敷遺跡	弥生	16041	高橋セボネ遺跡	弥生・奈良
16004	上林新庄遺跡	縄文・古墳～平安	16042	扇が丘ゴショ遺跡	弥生～中世
16006	下新庄アラチ遺跡	奈良	16043	扇が丘ハワイゴク遺跡	縄文～中世

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝１/30,000）

第２章　調査に至る経緯

野々市町は、昭和40年代以降水田から宅地化への変貌が著しくなったところである。富樫館跡が存在する住吉町、扇が丘地内も早くから開発が進展したところで、発掘調査が開始された昭和60年代には、すでに住宅やアパートが建ち並んだ状態となっていた。本報告の発掘調査原因も民間宅地などの開発によるものが多い。また、各調査区は宅地にはさまれた狭い場所が多く、遺跡全体の中で虫食い状態のようになっている。

各調査区の経緯については以下のとおりである。

調査区①ジョウカク

昭和61年12月、野々市町住吉町74・75・76番地において店舗建築の計画が浮上した。同年12月10日、本建設予定地の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて開発者より照会があり、同年12月16・17日に小型掘削機による試掘調査を実施した。そのの結果、本開発区域には埋蔵文化財が存在することが判明し、直ちに開発者と野々市町教育委員会と協議した。その結果、翌62年１月から発掘調査を実施することで合意した。

調査面積は約650㎡、調査期間は、昭和62年１月５日から開始した。発掘調査は降雪などで難航したが、同年１月26日に終了した。

調査区②ジョウカク

都市計画道路八日市・額新保線は、富樫館跡の遺跡範囲内にかかることから、埋蔵文化財の取り扱いについては早くから野々市町都市計画課と野々市町教育委員会との間で協議を重ねてきた。平成４年度には住吉町98-１（②－D区）で側溝工事を施行することとなり、同年５月27日に発掘調査について同町都市計画課と同町教育委員会との間で協議した。同年６月１日より調査を開始し、同月12日に完了した。調査面積は約35㎡である。

平成６年より本格的な道路工事の計画が進んでいった。同年４月から具体的な調整を同町都市計画課と同町教育委員会で詰め、平成６年度は道路西側車線分（②－A・C区　約1,200㎡）を、翌７年度は東側車線分（②－B区　約700㎡）を調査することで合意した。調査期間は、平成６年度は９月７日～12月27日、平成７年度は５月23日～７月28日である。

調査区③鬼ヶ窪

平成７年11月、野々市町土木課から埋蔵文化財包蔵地内の農道の道路改良工事計画が入ってきた。これを受けた同町教育委員会は同町土木課と協議を行い、工事前に対象地約300㎡の発掘調査を緊急に実施することとなった。発掘調査の期間は、同年12月11日～12月19日の約１週間である。

調査区④ナガドイ

平成６年２月４日、住吉町235-２番地において共同住宅建設の計画が上がってきた。開発予定地は埋蔵文化財包蔵地内であることから、同年４月試掘調査を実施し遺跡が存在することを確認した。この結果を基に開発者と野々市町教育委員会で協議を重ね、開発地全域の約600㎡の発掘調査を行うことで合意した。同年４月19日より発掘調査を開始。４月22日には堀跡を確認し、初めて富樫館跡の場所を明らかにした。同年６月５日には現地説明会を実施し、約70人の参加者が現地を見学した。発掘調査は７月８日に完了した。その後、調査地における遺跡の保存の話しがもちあがり、開発者と同町教育委員会との間で再度協議を行い、公園化することが決定した。平成８年３月15日～３月29日調査地の公園化工事が行われ、現在は一般の人に開放している。

調査区⑤ナガドイ

平成７年12月、個人住宅建設の計画が野々市町教育委員会にあった。開発予定地は、住吉町239、240-１番地で、富樫館推定地の南隣である。開発者と同町教育委員会はこの対応策について協議を重ね、当該地の約960㎡の発掘調査を行うことで合意した。翌平成８年、国庫補助申請・認可うけて同

年10月14日～翌９年１月20日にかけて緊急発掘調査を実施した。

調査区⑥ノダ

昭和63年５月、住吉町281番地で共同住宅建設の計画が上がった。当地は埋蔵文化財包蔵地に当たることから、開発者と野々市町教育委員会で協議を行い、約140㎡を発掘調査することで合意した。調査は７月11日から始まり、７月31日に完了した。

調査区⑦―Aミヤジ

平成７年９月11日、扇が丘46番地で共同住宅建設を原因とした農地転用に伴う埋蔵文化財調査の依頼が野々市町教育委員会にあった。平成元年度に開発対象地の隣地で発掘調査を実施していることもあり、(調査区⑦－B) 同町教育委員会は至急試掘調査を実施した。その結果、開発対象地に埋蔵文化財が存在することがわかり、緊急に開発者と協議に入った。この協議で共同住宅建設予定地約300㎡分を発掘調査おこなうことで合意し、同年10月９日～11月４日にかけて実施した。

調査区⑦－Bミヤジ

平成元年３月、扇が丘47－２番地において分譲住宅建設を原因とした埋蔵文化財調査依頼が野々市町教育委員会にあった。同町教育委員会は試掘調査を実施したところ、開発予定地に埋蔵文化財が存在することが判明した。この結果を受けて開発者と同町教育委員会は協議を行い、約600㎡発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は、同年４月４日から開始し４月26日に完了した。

調査区⑦－Cミヤジ

平成３年２月14日、扇が丘35-３番地において個人住宅建設を原因とした農地転用に伴う埋蔵文化財調査依頼が野々市町教育委員会にあった。同町教育委員会は直ちに試掘調査を行ったところ開発予定地全般に埋蔵文化財が包蔵していることがわかった。開発者と同町教育委員会は協議を行い、約90㎡発掘調査を実施することとなった。同年２月21日発掘調査を開始。発掘期間中、降雪などの悪条件もあったが、同年３月７日に完了した。

調査区⑧アラタ

平成３年２月13日、扇が丘106番地において個人住宅建設を原因とした農地転用に伴う埋蔵文化財調査依頼が野々市町教育委員会にあった。同町教育委員会は、小型掘削機による試掘調査を行い、その結果、開発予定地に埋蔵文化財が包蔵していることが判明した。直ちに開発者と同町教育委員会は協議をし、開発予定地の発掘調査を実施することで合意した。また、野々市町土木課からは、開発予定地の前を通る公道の側溝工事を同時期に行いたいとの話しがあり、この箇所についても発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、住宅予定地と道路側溝合わせて約200㎡で、調査期間は、同年10月22日～10月30日であった。

調査区⑨山川館

平成５年９月７日、高橋町10番地において個人住宅建設を原因とした農地転用に伴う埋蔵文化財調査依頼が野々市町教育委員会にあった。本地一帯は、富樫氏の家臣山川氏の屋敷地という伝承が残っており、これらをふまえて小型掘削機による試掘調査を実施した。試掘調査の結果、開発予定地のほぼ中央で南北にのびる遺跡を確認した。ちなみに西方は荒地となり、東方は近世以降の大きな自然河道であった。この結果を踏まえて開発者と同町教育委員会は協議をし、遺跡の範囲内約200㎡を発掘調査することで合意した。期間は、同年10月19日～11月９日であった。

第３図　調査区位置図（S＝１/5,000）

調査区	俗称名	面積（㎡）	調　査　期　間	参　考　文　献
①	ジョウカク	650	昭和62年（1987）１月５日～１月26日	
②－A・C	ジョウカク	1,200	平成６年（1994）９月７日～12月27日	
②－B	ジョウカク	700	平成７年（1995）５月23日～７月28日	
②－D	ジョウカク	35	平成４年（1992）６月１日～６月12日	
③	鬼ヶ窪	300	平成７年（1995）12月11日～12月19日	
④	ナガドイ	600	平成６年（1994）４月19日～７月８日	
⑤	ナガドイ	960	平成８年（1996）10月14日～平成９年１月20日	
⑥	ノダ	140	昭和63年（1988）７月11日～７月31日	
⑦－A	ミヤジ	300	平成７年（1995）10月９日～11月４日	
⑦－B	ミヤジ	600	平成元年（1989）４月４日～４月26日	
⑦－C	ミヤジ	90	平成３年（1991）２月21日～３月７日	
⑧	アラタ	200	平成３年（1991）10月22日～10月30日	
⑨	山川館跡	200	平成５年（1993）10月19日～11月９日	
ア		220	平成９年（1997）６月４日～６月18日	冨樫館跡Ⅰ1998
イ		300	平成10年（1998）５月８日～５月29日	冨樫館跡Ⅱ1999
ウ	鬼ヶ窪	2,300	平成８年（1996）５月29日～９月４日	冨樫館跡蝮土居地区　鬼ヶ窪地区　2001
エ	蝮土居	3,570	平成10年（1998）５月11日～10月14日	冨樫館跡蝮土居地区　鬼ヶ窪地区　2001

第１表　発掘調査区一覧表

第３章　遺構と遺物

第１節　調査区①（ジョウカク地区）

調査区は大きく北と南に分かれ、北側をA区、南側をB区と呼称する。

第１項　遺構

SK１

A区北西隅に位置し、SD３と切り合う。一辺約180cm四方の隅丸方形プランで、約40cmの深さをもつ。埋土からは、土師器皿、越前焼甕など土器・陶器のほかに鉄釘、鉄滓、鞴羽口、鳴滝産仕上げ砥石、越前焼の溝持ち砥石が発見されている。また、穴の中央付近には直径10～15cmほどの多くの自然石が大量に埋まっている。時期は14世紀代に位置付けられる。

SK２

A区北西端に位置する。南北約650cm、東西約220cmの楕円形の形状をしている。中央部からやや南寄りにかけてくびれをもち、そのくびれ部の東西幅は約170cmを測る。遺物は図示していないが、15世紀前半～中頃の瀬戸焼灰釉平碗、瓦質風炉、火鉢、珠洲焼壺、青磁盤などが出土している。

SK３

B区の北端にある土坑である。西隣にある南北溝SD８や南隣のSK４と切り合うが、前後関係は不明である。各遺構の切り合いから、土坑自身の形状は不明確であるが、南西隅では直角に近い掘方ラインをみせていることから方形プランの可能性が高い。規模は東西約320cm、南北270cm以上、深さ約40cmで、北側は調査区外にのびている。遺物は青磁碗１、青磁坏２、土師器皿が出土している。

SK４

B区中央のやや北寄りに位置する土坑である。北側ではSK３と切り合い、南側では幅90cm、深さ30cmと幅100cm前後、深さ約20cmの２条の南北溝が接している。東と西側の掘方のラインが明瞭であることから、東西約290cm、南北270cm前後、深さ約30cmの方形土坑と推定する。遺物は出土していない。

SK５

B区東端に位置し、南北に長い歪な隅丸方形をしている。南側の幅長は北側よりも約40cm長い。南北約300cm、東西約200cm、深さ約30cmの大きさを呈している。遺物は14世紀後半～15世紀前半の瀬戸美濃埦形鉢３、瓦質風炉４、珠洲焼擂鉢５などが出土している。なお、４の風炉はSK２から出土したものと同一個体である。

SK６

B区のほぼ中央に位置する。SK７、SD７、SD８、SD11など他の遺構と切り合い、SK６自身も掘削し直しており、形状は大きく錯綜している。土坑のコーナーは鋭角に屈曲する箇所があることから方形プランであることが想定される。東西の最大長は約690cm、南北の最大長は約460cm、深さ20cmを測る。遺物は６を初めとする土師器皿10数点、石臼30、埦型滓、刀子状鉄製品などがある。

SK７

B区SK６の南東隅に接し、東西に長い方形プランをもつ。西側の掘方は鉤型になっており、一度掘削し直したと考えられる。規模は東西最大長約260cm、南北約230cm、深さ約20cmである。西隣にあるSK８とは切り合っており、接する箇所には人頭大の自然石による２段の石積が存在する。遺物は出土

していない。

SK 8

B区SK７とSK９の間に位置し、SK７とは切り合い関係をもつ。東西に長い楕円形を呈している。規模は東西約290cm、南北約130cm、深さ15cm前後で、中央部は若干くびれ気味となる。土坑内は、中央から東方にかけて拳大の自然石が密集する。東端はSK７の石積遺構があり、土の堆積状況等からSK８が埋まって後にSK７が掘削されたようである。遺物は、加賀焼や越前焼甕の小片が出土している。

SK 9

B区SK８の西隣に位置する。東西約150cm、南北約125cm、深さ約15cmの隅丸方形プランである。拳大の自然石が大量に埋まっており、遺物は皆無である。灰色粘質土をした覆土から時期的には近代以降と思われる。本調査区より北方約1.3kmにある押野ウマワタリ遺跡には、近世以降に掘られた石の詰まった穴が存在する。この穴は水田耕作の際、不要な石を埋めた穴と考えられており、SK９もこれに該当するかもしれない。(野々市町教委1992)

SK10

B区西端にある土坑である。鉤型をした形状をしており、２基の土坑が切り合ったと思われる。東西最大長約280cm、南北最大長約220cm、深さ約10cmを測る。土中から拳大の自然石はみられるが、遺物は出土していない。

SD 1

A区中央を南北に走る溝で、東西を走るSD４とは南端で連結し、L字状に曲がる構造をとる。全長13.2m、幅40～50cm、深さ６～８cmで、方向は真北に近い。遺物は出土していない。

SD 2

A区中央を走り、SD１と切り合う。前後関係はSD２の方がSD１よりも新しく、方向はSD１と同様、南北ラインをとる。全長約13m、幅は60～90cm、深さ20cm前後で、中央部には、240cm×100cmの楕円形をした撹乱穴がみられる。

SD 3

A区の中央から西寄りに位置する溝である。SD１やSD２と同様ほぼ真北に近い方向をとっている。全長約13.8m、幅85～140cm、深さ約30cmで、SK１やSD４と切り合っている。この溝は調査区北端で西方に向きを変えており、区画溝になる可能性をもつ。遺物はSD４と交叉する地点で多く見つかっており、この周辺一帯には拳大の自然石が集中している。出土した遺物は、土師器皿７・８、青磁碗９、青磁小碗10、珠洲焼擂鉢11、瀬戸焼灰釉鉢、越前焼甕・壺・擂鉢、炉縁石31、砥石32、行火などが挙げられる。

SD 4

A区中央を東西に走る溝である。SD３と切り合い、SD１とは直交する状態で連結する。SD３と交差する地点の東隣からは拳大の自然石が大量に埋まっていた。その中には被熱を受けた炉縁石の残欠も見受けられる。溝の全長は約9.8m、幅は60～140cm、深さは10cm程である。深さについては、自然石が大量に埋まっている地点からSD１に向かって少しずつ浅くなる。SD３との前後関係は、SD４が古くSD３が新しい様相をもつ。遺物は白磁台付皿12・13、瀬戸焼灰釉盤14、越前焼壺15・甕16、珠洲焼壺・擂鉢、信楽焼壺、鉄釘がみつかっている。

SD 5

A区SD４から南へ２mのところに位置する。SD４と同一方向をとる東西溝で、東端では南北溝SD８に切られている。全長約３m、幅40～50cm、深さ５～10cmで、中から土師器皿17、瀬戸焼灰釉瓶18が出土している。

SD 6

A区南側を東西に走る溝で、SD７やSD８と交差する。A区東から西方へ進行するに連れ、次第に幅が広くなり、調査区中央のSD７とSD８の間では、他の遺構と錯綜しあうようになり、形状がわからなくなる。全長約12m、幅70～160cm、深さ10cm前後で、遺物は出土していない。

SD 7

A区南東側のSD６と交差する所からB区へ向かって走る南北溝である。方向はN10°Eで、SD１やSD２とは方向がやや異なる。全長約13m、幅80～90cm、深さ約25cmで、覆土には拳大の自然石が大量に入っている。B区中央のSK６とは切り合っており、SD７よりもSK６の方が新しいと考えられる。遺物は白磁碗19、珠洲焼擂鉢20などが出土している。

SD 8

A区とB区を跨ぐ南北ラインの溝である。A区SD３のすぐ南隣に存在することから、SD３とは同一の機能をもっていたかもしれない。B区SK３の西側をかすめ、SK６と交差するところが南限となる。全長約11.5m、幅約80cm、深さ約20cmで、方向は真北からやや東に傾く。遺物は砥石33が出土している。

SD 9

SD８の西隣に位置する南北溝で、A区とB区を跨っている。全長約8.6m、幅140～170cm、深さ約20cmで、南方へ向かうに従って徐々に浅くなって途切れていく。

SD10

B区中央からやや南寄りでみられる東西溝で、SD11がその横を並行して走る。SD10は、全長約6.2m、幅50cm以上、深さ15cm前後で、SD11に切られているため細かい様相は分からない。遺物は出土していない。この溝の東端には、東西125cm、南北120cm以上、深さ約20cmの方形土坑が存在する。なお、この土坑の北西隅には別の穴が存在する。穴は、一辺約80cmの隅丸方形で、全体に拳大の自然石が詰まっていた。これは北隣にあるSK９と同様、近世以降、農地で不要な石を溜める集積場と考えられる。

SD11

B区SD10の南隣に位置する東西溝である。SD10とは切り合いながら平行に走っており、前後関係はSD11の方が新しい。全長約12mで、東端で北に向きを変えてSK６と切り合う。SK４とSK６の間にみられる南北溝と繋がる可能性もある。遺物は土師器皿21～23、越前焼甕24、珠洲焼擂鉢、砥石34、鉄釘35・36がみつかっている。

SD12

B区南端で確認した東西溝である。西側半分は全面掘削できず、詳細は不明である。全長12m以上、幅は240cm～390cm、深さ約60cmで、西に向かうほど幅が広がっていく。遺物は土師器皿25、加賀焼甕、珠洲焼甕、14世紀後半～15世紀初頭の瀬戸焼平碗、15世紀前半の多角型白磁台付坏がみつかっている。

P１

A区東側に存在する。長辺約130cm、短辺約110cmの楕円形をした穴で、深さは約10cmを測る。中からB区SK５出土の瓦質風炉の同一個体を発見した。

第２項　遺物

土器・陶磁器

１は、青磁碗底部、２は青磁坏の口縁部で、いずれも15世紀に充てられる。３は14世紀終りから15世紀前半の瀬戸焼灰釉碗形鉢である。４は15世紀半ばの瓦質風炉である。SK２とP１からは同一個体が出土している。５はV期の珠洲焼擂鉢である。10は14～15世紀半ばの小型青磁碗である。内面に細連弁文がみられる。11は14世紀後半の珠洲焼擂鉢口縁部である。12と13は全面施釉の白磁台付皿で、14世紀半ば以降の所産である。14は瀬戸焼灰釉盤の底部にあたる。15は越前焼の大振りな壺底部である。16は15世紀中頃の越前焼大甕である。焼き締めが甘く軟質に見える。18は14世紀後半の瀬戸焼灰釉瓶で、頚部と体部の接点できれいに割れており、意図的に割ったものと思われる。19は14世紀半ば～後半の白磁碗である。沖縄県石垣島のビロースク遺跡でみられる碗と同型である。20は、V～Ⅵ期の珠洲焼擂鉢底部である。21～23は土師器皿で、23は口縁部全体に灯心油痕がみられる。16世紀前半～半ばのものである。24は14世紀後半～15世紀前半の越前焼甕の口縁部である。同一遺構から越前焼甕体部片がみつかっているが、同一個体になるかはわからない。29は17世紀前半の越中瀬戸焼の皿である。内面には２本の釉止めがある。外面体部下半には墨書が２文字みられるが、崩れているため判読できない。底部高台は外側に向かって磨り減っている。また、図示はしていないが、包含層や試掘坑から信楽焼陶片や志野焼皿、鞴羽口を確認している。

石製品

１は、粉挽き臼の上臼である。14世紀半ば～後半のもので、石質は凝灰岩である。使用頻度が高いため、目は明確にみることができない。２は棒状炉縁石である。全般的にもろく一部被熱を受けている。なお図示はしていないが、SD４からは炉縁石の破片を大量に確認している。３は、山城国鳴滝産の仕上げ砥石で、全般的に被熱を受けた形跡をもち２次焼成があったようである。４は肥後国備水産と思われる中砥石で、研ぎ面は４面である。石は上下ともに途中で割れており、その割れ口でも研ぎに使用していた形跡が認められる。５は鳴滝産の仕上げ砥石である。

第３項　まとめ

本調査区は土坑と溝が錯綜しており、各遺構の出土遺物や覆土の切り合いから14世紀半ば～15世紀初頭、15世紀前半～後半、16世紀前半～半ばの３時期に分かれる。

14世紀半ば～15世紀初頭の遺構は、A区SK１、SD１、SD４、A・B区SD７である。

SK１から出土した遺物は、鉄釘、鉄滓、鞴羽口、砥石など鍛鉧に関連するものが多い。この土坑は、鉄製品の製作に深い関係をもつ穴と理解したい。SD１とSD４は、前述したように同一の溝となり、L字状に曲がる構造をしている。この溝は、SK１を含むA区北西側を囲む区画溝と想定できる。SD７はSD１・２と同様、区画溝の可能性が高い。SK３やSK４は、SD７による区画域内の遺構になるかもしれない。

15世紀前半～後半の遺構は、A区SK２、SD２、SD３、P１、A・B区SD８、B区SK５、SD10である。

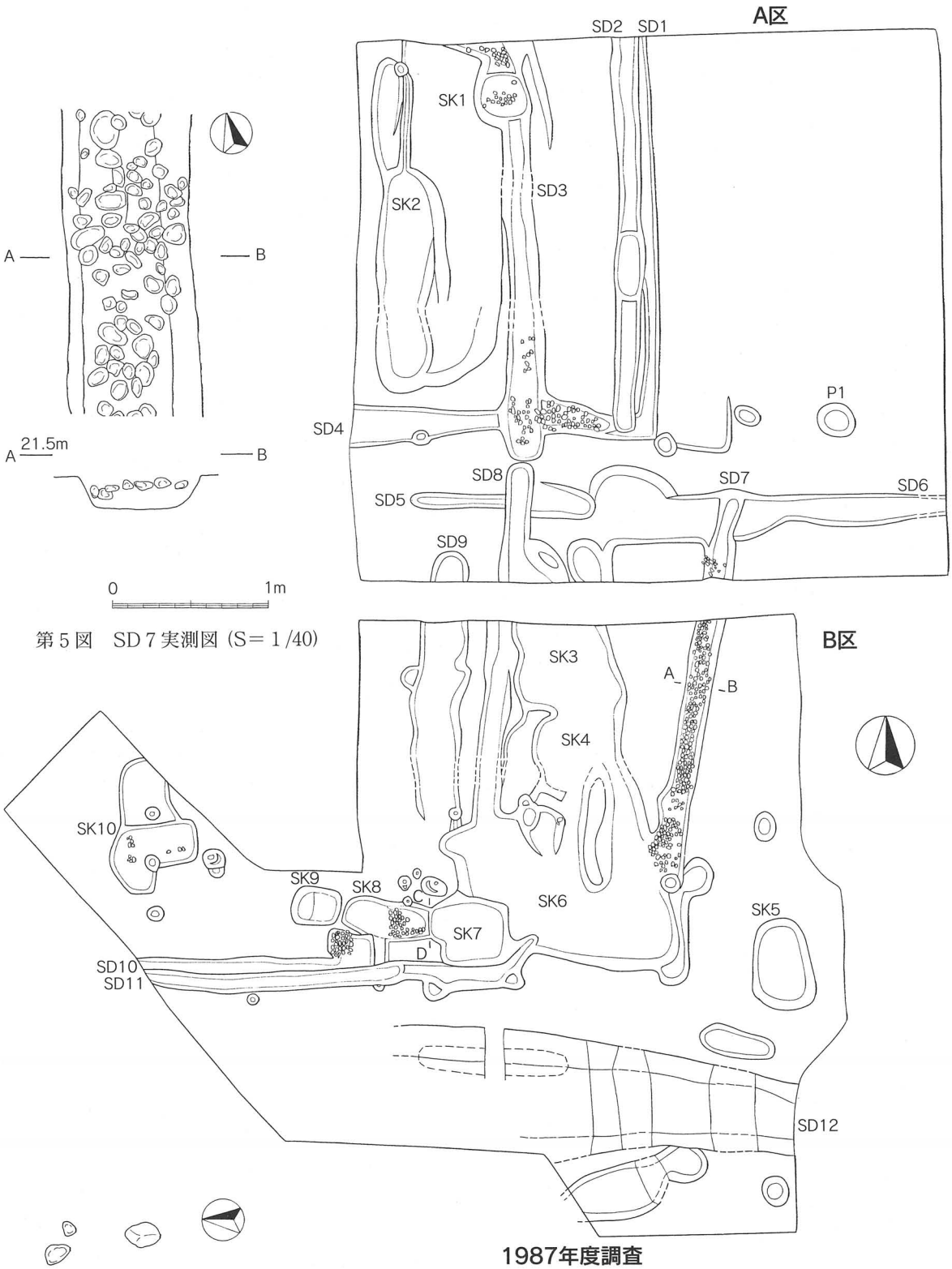
SD３とSD８は、前述したとおり同じ性格を有する溝と想定される。これらの溝も区画が目的と考えられ、東西ラインのSD10と連結する可能性がある。SD３とSD８の南北間の距離は約30mを測る。SD３の北端では西方に向きを変えており、これらの溝とB区SD10までの間がひとつの宅地の区割りになると思われる。SK２はこの推定屋敷地の中に存在し、その居住エリアに関連する遺構と理解したい。また、SD２は、SD３と平行に走る溝である。この両溝の間は約2.5mを測り、この区間は道路状

遺構の可能性をもつ。

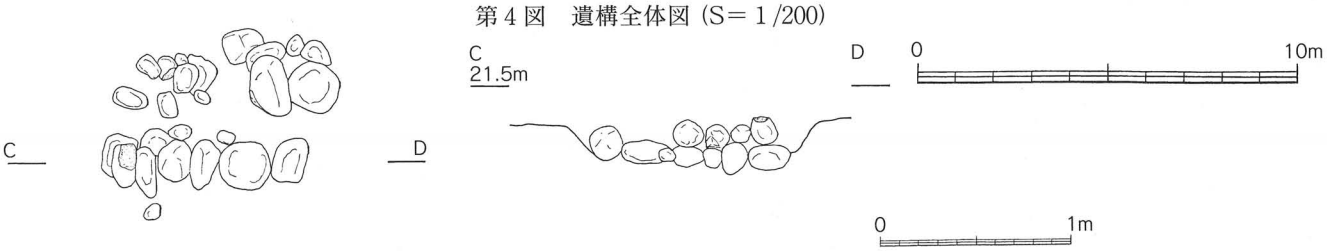
16世紀前半～半ばの遺構は、B区SD11である。ほかに目立った遺構がないため検証は困難であるが、この溝も東から北へクランクするようで、宅地を区画する溝と認識したい。

今回確認したそれぞれの区画溝は、南東方向にコーナーをもっていることから、本調査区から北西側に居住空間が存在したと推定できる。また、最南端のSD12は他の溝と異なり、幅が広くかつ深い。この溝は、宅地の区画溝にあたるSD10やSD11の南隣に位置し、同一方向で走っている。このことから、SD12は北方へ広がる居住エリアの境界溝にあたると位置付けたい。

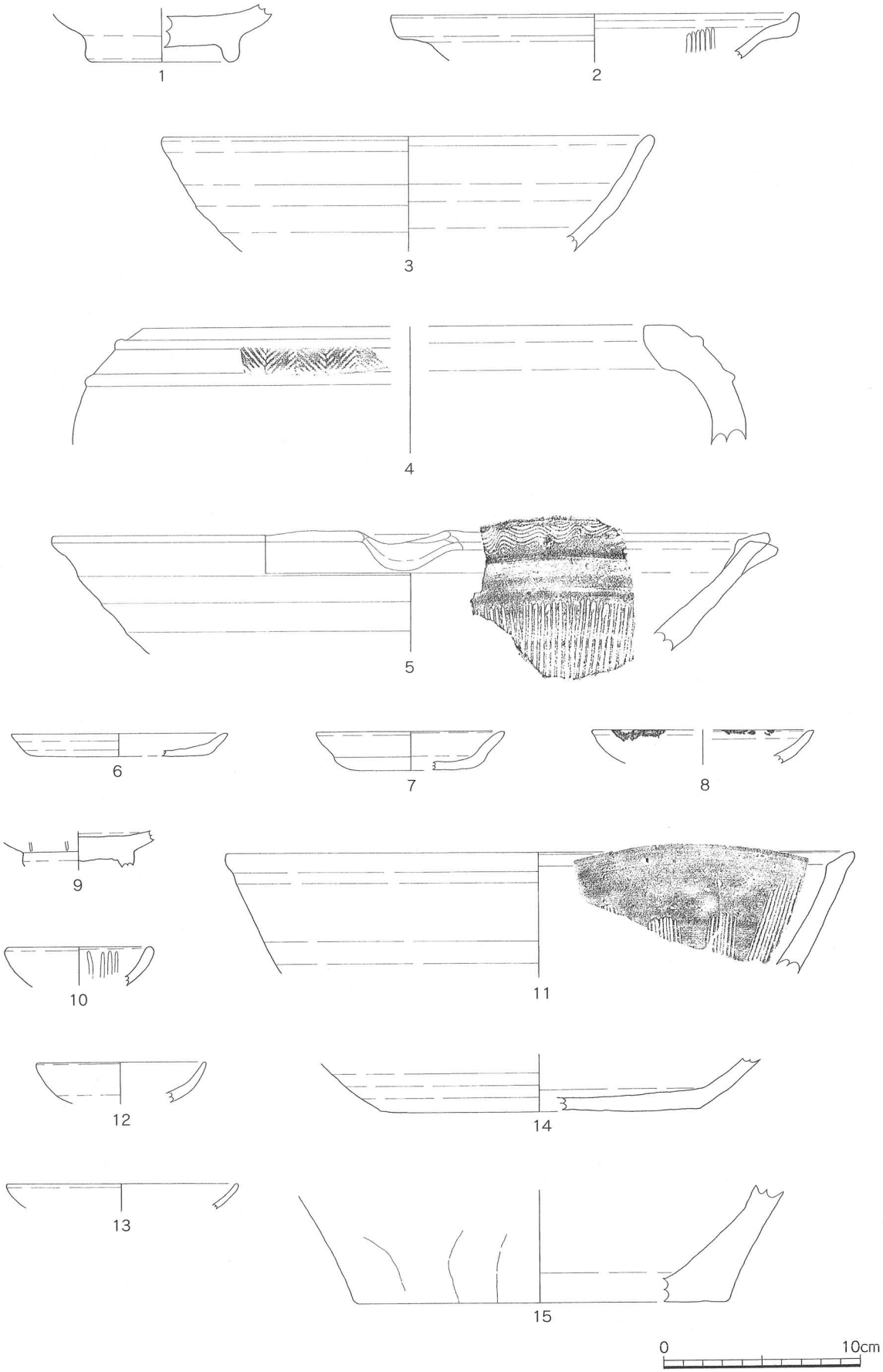
第５図　SD７実測図（S＝１/40）



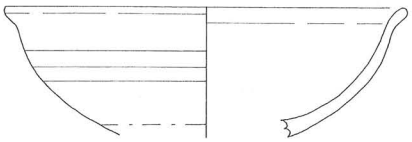
第４図　遺構全体図（S＝１/200）

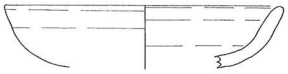


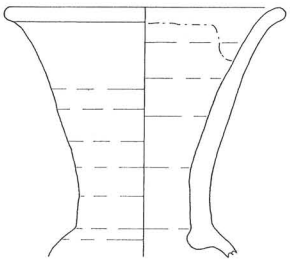
第６図　SK７石積実測図（S＝１/40）

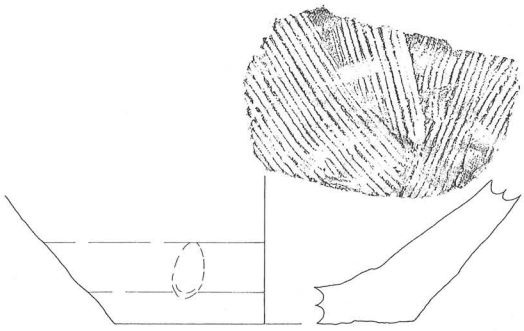


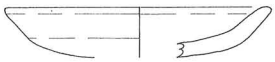
第７図　土器・陶磁器実測図（S＝１/３）

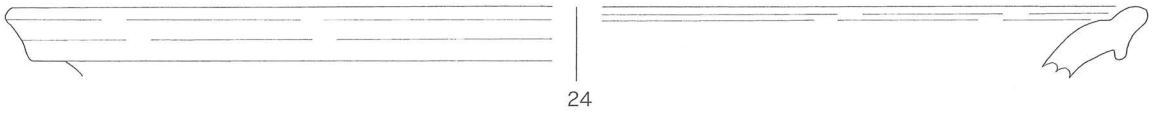




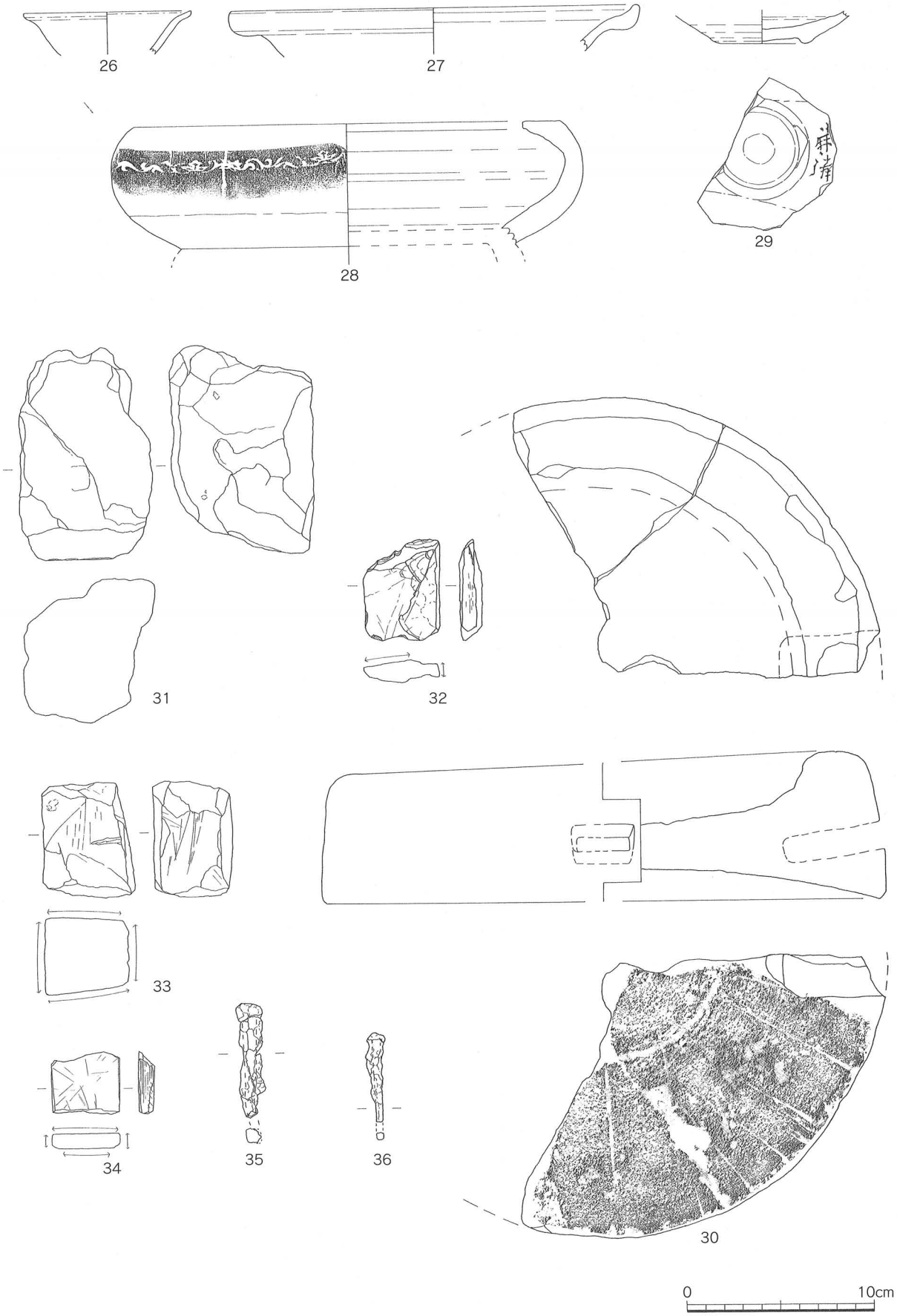








第８図　土器・陶磁器実測図（S＝１/３）



第９図　土器・陶磁器・石製品・鉄製品実測図（S＝１/３）

第２節　調査区②―A、②―B（ジョウカク地区）

調査区は南北に細長く、平成６年度（1994）に実施した調査区をA区、翌７年度（1995）におこなわれた調査区をB区、A・B区から南へ約100m離れた調査区をC区と呼称した。

第１項　遺構

SE１

B区中央に位置する。クランクする溝SD26と切り合っており、土層断面からSE１が埋まった後にSD26が掘られていることが判明している。長辺200cm、短辺178cmの楕円形をした素掘りの構造である。下場は直径110cm、深さ140cm、北西隅にはテラスを有している。覆土２から９や10の白磁皿が出土したほか、瀬戸焼卸皿や天目茶碗、加賀焼・越前焼の甕などがみつかった。これらの遺物は全て上層から発見されたもので、第11図土層断面図の覆土４や５からは全く出土していない。遺物の中には、SD26と混在しているものがあるかもしれない。

SK１

A区SD８の南西に存在する。歪な瓢箪形をした形状をしており、北東―南西間が長辺となる。北東―南西間の最大長270cm、北西―南東間の長さ130cm、深さは12cm。中から珠洲焼陶片、土師器皿が出土している。

SK２

A区SX６の東方にある土坑である。歪な楕円形の形状をもち、長辺180cm、短辺100cm、深さ24cmを測る。12の土師器皿や炭化物が出土している。

SK３

A区SX８内にある土坑群の中のひとつである。形状は楕円形で、SK４によって西側の一部が失っている。長辺160cm、短辺140cm、深さ26cm。遺物は出土していない。

SK４

A区SK３の西隣にある。東西に長い瓢箪形をしており、西端は調査区外へとのびる。大きさは長辺220cm以上、南北間の最も短い箇所で95cm、深さは45cm前後を測る。本来は２基の穴が存在し、切り合って瓢箪のような形状に見えているのかもしれない。

SK５

A区SK３の東隣に位置する。隅丸方形の形状をしており、一辺約160cm、深さ約45cmを測る。遺物は出土していない。

SK６

A区SK５の南西横にある土坑で、楕円形をしている。長辺135cm、短辺90cm、深さ35cmである。遺物は出土していない。

SK７

A区SK６の西隣に位置する。長方形の形状をしており、SK４とは切り合うが前後関係は不明である。西端は調査区外にのびる。長辺（東西）180cm以上、短辺（南北）160cm、深さ70cmを測る。遺物は出土していない。

SK 8

A区SK５から南東方へ進んだ所にある。南北365cm、東西154cm以上の不定形な形をしており、東半分は調査区外となる。深さは約10cmで、遺物は加賀焼甕、土師器皿を確認している。

SK 9

A区SK８の西隣にある土坑で、南北に長い楕円形を呈している。規模は南北245cm、東西95cm、深さ約20cmである。遺物は出土していない。

SK10

A区SK９の西隣に位置する。北側にあるSK７と同様東西に長い長方形をした形状をしているが、西側半分はSK11が掘削しており、構造はよくわからない。東西262cm以上、南北230cm、深さ約30cmで、遺物は出土していない。

SK11

A区SK10内にある土坑で、南北に長い長方形をしている。南北197cm、東西103cm以上、深さ約40cmで、西側の一部は調査区外となる。遺物は出土していない。

SK12

A区SK８の南に位置する。南北に長い楕円形をし、東側は調査区外となる。規模は南北が172cm、東西95cm以上で、深さ85cmとこれまでに報告した周辺の土坑よりも深めである。遺物は確認していない。

SK13

A区SK12のすぐ南隣にあり、この土坑とは切り合い関係をもつ。南北に長い楕円形を呈しており、東側は調査区外のため詳細は不明である。南北145cm以上、東西98cm以上の大きさで、深さは約55cmである。遺物は出土していない。

SK14

A区SK９の南隣にある。不定形な形状をしており、南北220cm、東西172cm、深さ40cm前後を測る。中には南北107cm、東西75cm、深さ10cmの楕円形をした穴が存在する。遺物は出土していない。

SK15

A区SK13の南隣に位置する方形土坑である。東と南側は調査区外にのび、北側はSK13に切られており構造は分からない。南北233cm以上、東西226cm以上、深さ約60cmを測り、土師器皿、珠洲焼、越前焼、瀬戸焼、青磁、白磁など土器・陶磁器が大量に出土している。また、火葬骨と思われる骨片も２点確認している。

SK16

A区SK15の南側に位置する。北と東側は調査区外にのびるため形状はわからない。南北62cm以上、東西140cm以上、深さ62cmである。遺物は確認していない。

SK17

A区SK16の南隣にある。この土坑はSK16に北側、SK18に南側を切られ、東側は調査区外にのびる。形状は不明で、南北110cm以上、東西70cm以上、25cmの深さをもつ。遺物は確認していない。

SK18

A区SK17の南隣にある。南北に長い隅丸長方形をしており、東側は調査区外となる。南北110cm、東西67cm以上、深さ43cmを測る。遺物は確認していない。

SK19

A区SK18の南隣に存在する。SK18同様南北に長い隅丸長方形をしており、東側は調査区外にのびる。大きさは南北148cm、東西69cm以上、深さ50cmである。遺物は出土していない。

SK20

A区SK15の西側に位置する。南北に長い楕円形をしており、南端は調査区の外にのびている。南北110cm以上、東西75cm、深さ26cmを測る。覆土は黒色粘質土の１層で、中から木片と中国銭（熙寧元寶など）６枚が重なって出土した。この土坑は墓坑で、中国銭は六道銭と思われる。

SK21

A区SK20の南方にある土坑である。形状は南北に長い長方形をしており、規模は南北153cm、東西125cm、深さ約40cmを測る。覆土は黒色粘質土で、中から青銅製錫杖の完形品１点、土師器皿２点、鉄釘８点がみつかった。うち２点の鉄釘からは木片が付着していた。SK20とSK21は他の遺構よりも上層の茶褐色粘質土からの検出で、出土遺物の内容から墓坑の可能性が極めて高い。特にSK21は、木板を釘で打ちつけた木棺墓が存在していたようである。

SK22

B区SE１の南側にある土坑である。形状は不定形で、西側は調査区外にのびる。規模は南北200cm、東西101cm以上、深さ約30cmである。遺物は出土していない。

SK23

B区SK22の南東方に存在する。南北に長い瓢箪形をしており、南北185cm、東西85cm、深さ約50cmである。SD26とは切り合っており、覆土からSK23の後にSD26が掘削されたようである。中から土師器皿、越前焼甕、信楽焼壺、瀬戸焼天目茶碗・花瓶、中国青磁碗などが出土している。

SK24

B区SD28の北側にある土坑である。北東―南西に長い楕円形をしており、西側の一部は調査区外となる。長辺190cm、短辺103cm以上、深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。

SK25

B区南端に位置する。東と南と西側は調査区外にのびるため形状は不明である。南北153cm以上、東西110cm以上、深さ約40cmを測る。中から土師器片や中国染付碗を確認している。

SD１

A区北端にある東西溝である。長さ約７m、幅60～100cm、深さ38～43cmの規模をもち、東から西へ向かって少しずつ低くなる。溝の両側には、幅20～40cm、深さ10cmのテラスが存在し、２段掘り構造を呈する。遺物は35の土師器皿、36の瀬戸焼灰釉平碗などを確認している。

SD２

A区SD１から南方２m離れたところに位置する東西溝である。長さ7.15m、幅135～150cm、深さ８～10cmで、土師器皿、青磁碗片が出土している。

SD 3

A区SD２から南へ２m向かったところに存在する東西溝である。長さは7.2m、幅118～135cm、深さ８～13cmを測る。SD２とは幅や深さが似ている。38の中国染付皿を確認している。

SD 4

A区SD１とSD２の間を走る南北溝である。幅約30～45cm、深さ８cm前後を測る。39の土師器皿が出土している。

SD 5

A区SD３から南へ6.5m進んだところにある溝である。北側半分は調査区の外になるため、全体の様相はわからない。長さ6.93m、幅180cm以上、深さ50cm前後の規模で、２段掘り構造となっている。テラスになる部分は幅55～140cm、深さ10～23cmで、SD１と酷似する。40～42の土師器皿や越前・珠洲焼の陶片、瀬戸焼小坏・卸皿、青磁碗などが見つかった。

SD 6

A区SD５から南へ1.5m離れたところに位置する。全長5.18m、幅40～75cm、深さ５～23cmを測り、内部全般に直径20～40cmの大小ピットが散在する。遺物は確認していない。

SD 7

A区SD６から派生するようにのびる南北溝である。長さ5.8m、幅30～55cm、深さ８cm前後で、切り合いからSD６よりも古いことがわかっている。遺物は出土していない。

SD 8

A区SD７の西隣にある南北溝である。SD７と同様、この溝もSD６に切られている。規模は長さ5.86m、幅45～130cm、深さ５～８cmを測る。溝幅が途中で突然２倍近くに広がっている。溝中央と南端にはそれぞれピットがみられる。遺物は確認していない。

SD 9

A区ほぼ中央に位置し、周囲には不定形な穴の群集がみられる。方向は北東―南西ラインをとり、緩い蛇行をしながら走っている。全長3.75m、幅15～42cm、深さ３～５cmを測る。遺物は確認していない。

SD10

A区SD９の南方に位置する東西ラインの溝で、B区SD25に連結する可能性をもつ。規模は、長さ6.43m、幅45～86cm、深さ５～10cmで、覆土から鉄滓がみつかっている。

SD11

A区SD10から南へ1.8mのところに位置する。長さ3.05m、幅27～39cm、深さ10cm前後を測る。同じ東西溝であるSD12とは若干方向が異となる。遺物は出土していない。

SD12

SD11より南方１mに位置し、長さ6.35m、幅90～100cm、深さ30cm前後を測る東西溝である。遺物の出土量が他の溝と比較して大変多く、45～51の土師器皿や52の加賀焼壺、53の陶器鉢、54～56の青磁・白磁のほかに、図示していないが珠洲焼甕・擂鉢などがみつかっている。B区SD26とは連結する。

SD13

A区SD12の南隣に位置し、SD11とほぼ同一方向の東西溝である。長さ1.58m、幅10～18cm、深さ5cm前後で、遺物は出土していない。

SD14

A区SD13の南隣にある東西溝である。長さ2.62m、幅38～50cm、深さ5cm前後で、土師器片が出土している。西端はSX3によって切られている。

SD15

A区SK21の南方約30mのところに位置する溝である。方向はN68°Wの傾きで北西―南東ラインである。長さ4.58m、幅45～93cm、深さ5cmで、緩やかに湾曲している。遺物は出土していない。

SD16

A区SD15から南へ1.6m進んだところに位置し、2条の溝が切りあっている。北側にある一方は長さ4.85m、幅66～96cm、深さ32～43cm、方向N67°Wのもの、南側のもう一方は、長さ5.02m、幅126～160cm、深さ5～9cm、方向N73°Wである。切り合いから前者の底の深い溝の方が後者の底の浅い溝よりも時期は新しい。遺物は出土していない。

SD17

A区SD16から南方3m進んだところに位置する。長さ4.38m、幅60～100cm、深さ13～20cmの規模をもち、西から東へゆるやかに下っている。遺物は出土していない。南隣には、長さ4.1m、幅28～35cm、深さ5～11cmの小さい溝が蛇行しながら併走する。

SD21

B区北端を走る南北溝である。方向はN4°Eで、全長7.75m、幅51～75cm、深さ10cm前後の大きさをもつ。溝は北方に向かうに連れ徐々に浅くなり、最後は途切れてしまう。遺物は瀬戸焼花瓶がみつかっている。

SD22

B区SD21の東方2mに位置する。東半分は調査区外となるため全容はわからない。方向はN6°Eの南北方向で、全長27.1m、幅65cm以上、深さ12～23cmである。覆土からは54の青磁碗、55の白磁坏、56の白磁皿、図示していないが土師器皿や越前焼甕などが出土しているほか、自然石が散在する。

SD23

B区SD21から南方6.7m離れたところにある南北溝である。方向は、東隣で併走するSD22とほぼ同じである。全長10.78m、幅35～56cm、深さ6～27cmを測り、南端では幅が85cmと急に大きくなる。遺物は土師器皿や青磁片が出土している。

SD24

B区SD23の南西隣に位置する南北ラインの溝である。全長14.2m、深さ15cm前後で、幅は北方で40cmを測るが、中央から南方にかけては110cm前後と大きな広がりをみせる。南端では溝が2条に分かれていることから、溝幅の広がりは切り合いによるものと考えられる。ただし、前後関係は不明である。方向はN5°Eで、遺物は57の珠洲焼壺、58の瀬戸美濃天目茶碗、59の青磁碗の他、越前焼陶片、土師器皿を確認している。

SD25

B区SD24の西隣にある南北溝で、方向はN５°Eである。西側半分は調査区外となり、全容は明らかでない。全長17.36m、幅30cm以上、深さ３～13cmを測る。溝の南端とA区SD10の東西ラインとは直線上に合致することから、両溝は同一になる可能性をもつ。遺物は、土師器皿、越前焼陶片、青磁片、白磁皿、坩堝、砥石などが発見された。

SD26

B区SD24から３m南に離れたところに位置する。N５°Eの南北溝で、SE１の東南で直角にクランクし、A区SD10と合致する。長さは南北が14.55m、東西が2.7m、幅90～105cm、深さ13～20cmを測る。南端はSX９の掘削によってよくわからない。遺物は、60の土師器皿、61の瀬戸美濃灰釉平碗、越前焼・珠洲焼甕を確認している。

SD27

B区SX９の東隣にある南北溝である。方向はN５°Eで、全長4.78m、幅39～59cm、深さ19～24cmを測る。溝の規模はそれほど大きくないが、62の瀬戸焼灰釉平碗、63の珠洲焼擂鉢、土師器皿、越前焼甕、白磁碗、鳴滝産砥石など遺物は多く出土している。

SD28

B区SK24の南方1.7m進んだところにある。方向は北西―南東ラインで、S字に蛇行している。北西側は調査区外にのび、南東側はSX10に合流する。長さは約5.5m、幅90～110cm、深さ28～38cmである。この溝は、周囲の地山面より約30cm低くなったところから掘られており、A区の土坑群やB区SX10と関係すると思われる。遺物は出土していない。

SD29

B区SX10の南側に存在する溝である。方向はN５°Eで、長さが11.2m、幅70～98cm、深さ27～47cmを測る。北側はSX10に切られ、南側は調査区外にのびている。北方では溝幅が狭くなり、弱い蛇行をしているが、基本的には直線ラインと捉え、SD26と合致すると想定される。66珠洲焼擂鉢、67･69の瀬戸焼天目茶碗、68の白磁皿が出土している。

P１

B区SD21とSD23の間に位置する。長辺127cm、短辺60cm、深さ28cmで、周りに存在する不定形な穴が埋まった後に掘り直している。中には人頭大の自然石が密に入っている。遺物は、越前焼甕片が出土している。

SX１

A区北端に位置する。東西方向に長くのびる遺構で、南北長124～182cm、東西長457cm、深さ６～10cmを測る。SD２やSD３と大きさや深さが似ているのため、溝になる可能性もある。

SX２

A区SD７の東隣に存在する。掘方が蛇行を繰り返す不定形な穴で、東側の一部は調査区外にのびる。規模は南北長が593cm、東西長が100cm以上、深さ５cm前後である。複数の穴が切り合って現状の形となった可能性があるが、全体に底が浅く詳細はよくわからない。

SX３

A区SD12の南側1.5m進んだところに位置する。３基程度の土坑が切り合ってできたような形状をし

ている。

南北長347cm、東西長は北から73cm、90cm、57cmの大きさをもつ。深さは全体的に10cm前後と均一する。遺物は、土師器片、珠洲焼陶片、青磁碗、炭化物がみつかっている。

SX 4

A区SX 3 の西隣に位置する。歪ながらも南北を長辺とする長方形のような形状をしている。南北長280cm、東西長135cm前後、深さ 5 cm前後である。瀬戸焼平碗 1 点を確認している。

SX 5

A区SX 3 、SX 4 の南隣に位置する落ち込み状遺構である。地山から10cm程低くなり、その範囲は東西が調査区の幅いっぱいの610cm以上、南北が580cmを測る。B区でもその掘方の一部を確認することができる。SX 5 内には、後述するSX 6 やSX 7 など不定形で大きな穴をみることができる。覆土は暗茶褐色粘質土で、中から71･72の土師器皿、青磁碗･鉢、瀬戸焼天目茶碗、鉄釘、鉄滓などが発見されている。

SX 6

A区SX 5 内に存在する大きな土坑状遺構である。東西にのびる形状をしており、西側調査区外にそのまま続く。規模は南北が150～200cm、東西が372cm以上、深さ約30cmである。西側内部には、不定形なピットが 4 基みられる。遺物は土師器片を確認している。

SX 7

A区SX 6 の南隣に存在する。形状はSX 6 と酷似し、東西に長い大穴である。大きさは、南北148cm、東西364cm以上となる。深さは 7 ～16cmと浅く、遺物は確認していない。

SX 8

A区SX 5 の南隣にある落ち込み状遺構で、SK 3 ～SK19を囲い込む形状をしている。SX 5 とSK 3 ･ 4 との間には、幅100～200cm、深さ20cmのテラスが設けられている。B区SX10とは同一遺構になるかもしれない。全体の規模は南北 8 ～18m、東西 6 m以上で、深さ約45cmを測る。覆土は褐色粘質土が厚く堆積し、そこから土師器皿、珠洲・越前焼陶片、青磁・白磁、中国染付、瓦器、フイゴ羽口、坩堝、鉄釘、鉄滓、砥石など大量の遺物を確認している。これらの遺物は15～16世紀前半と時期幅が広く、そのほとんどは小片ばかりである。大量の遺物を含んだこの堆積土は土坑群埋没後、整地を目的に意図的に埋めたものと思われる。

SX 9

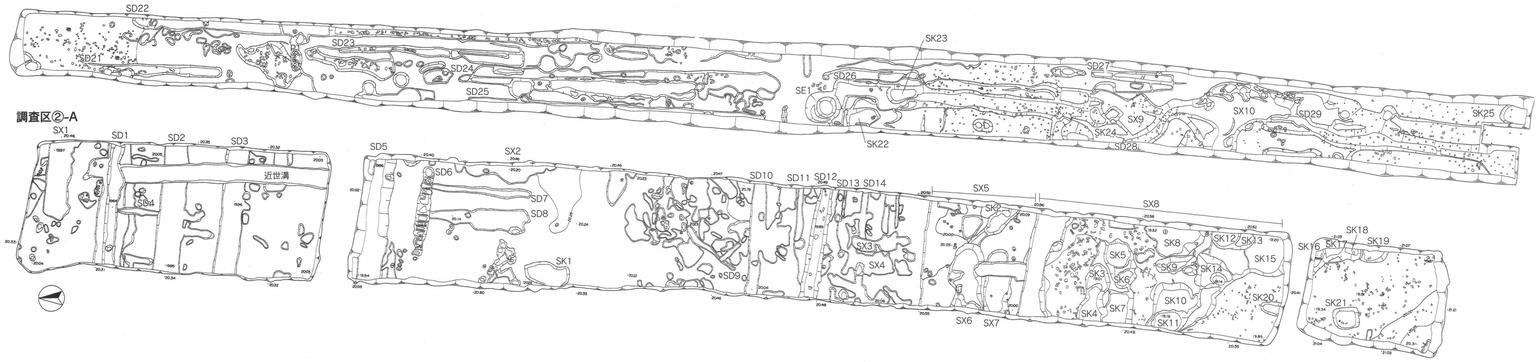
B区SD28の北東隣にある方形のテラス状遺構である。大きさは北東―南西間の長さが152～190cm、北西―南東間の長さが219cmとなる。北東側の掘方の壁は大きくえぐられており、元来横穴状の遺構であったものが途中崩れ、その残欠が残ったものと考えられる。

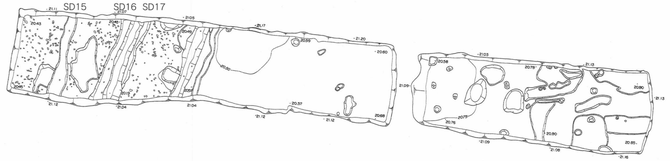
SX10

B区SD28の南方に位置する。南北長570cm、東西長270cm、深さ50cm前後を測る不成形の大きな穴である。東側掘方付近には、直径30～60cmのピット群があり、西側掘方には、A区にのびていく幅190cmの溝状遺構が存在する。遺物は、土師器皿を確認している。遺構の性格はよくわからないが、A区のSX 8 や土坑群と大きく関連すると考えられる。

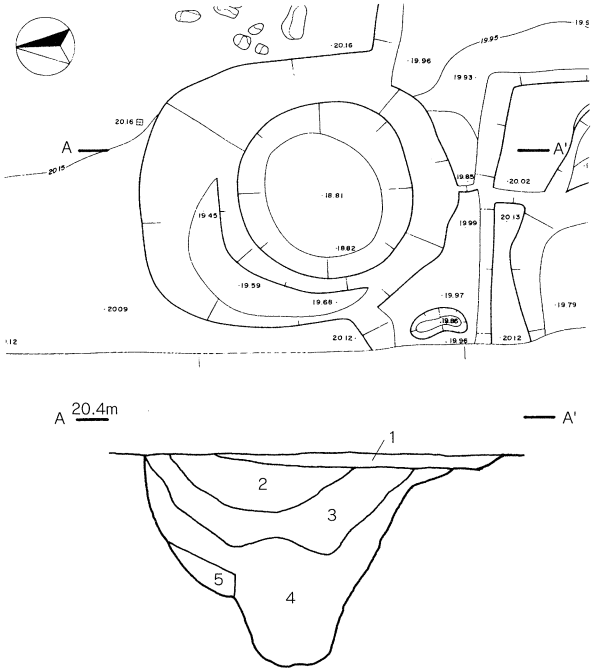
調査区②-B

調査区②-A



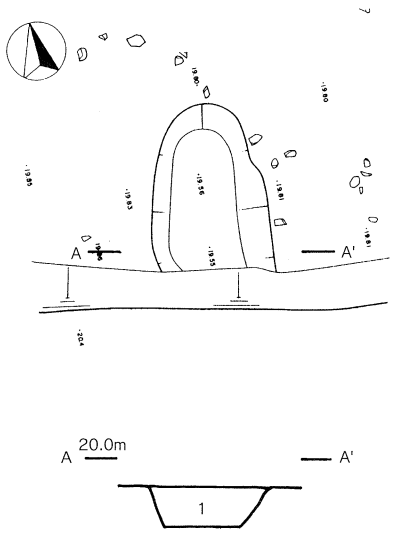


第10図　遺構全体図（S＝1/200）



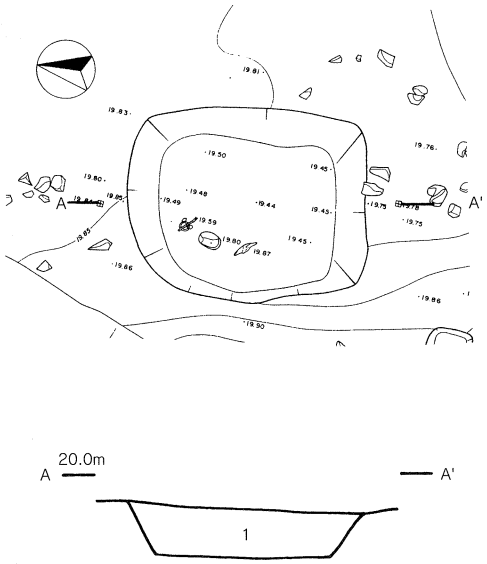
1　暗灰褐色粘質土
2　灰褐色粘質土(小礫混じる)
3　暗褐色粘質土
4　暗灰褐色粘質土(小礫混じる)
5　灰黄褐色礫土

第11図　B区　SE１実測図（S＝１/50）



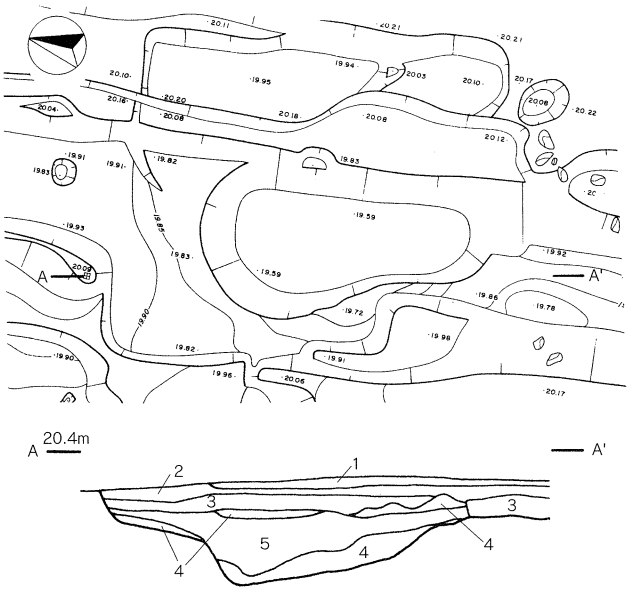
1　黒色粘質土

第12図　A区　SK20実測図（S＝１/50）



1　黒色粘質土

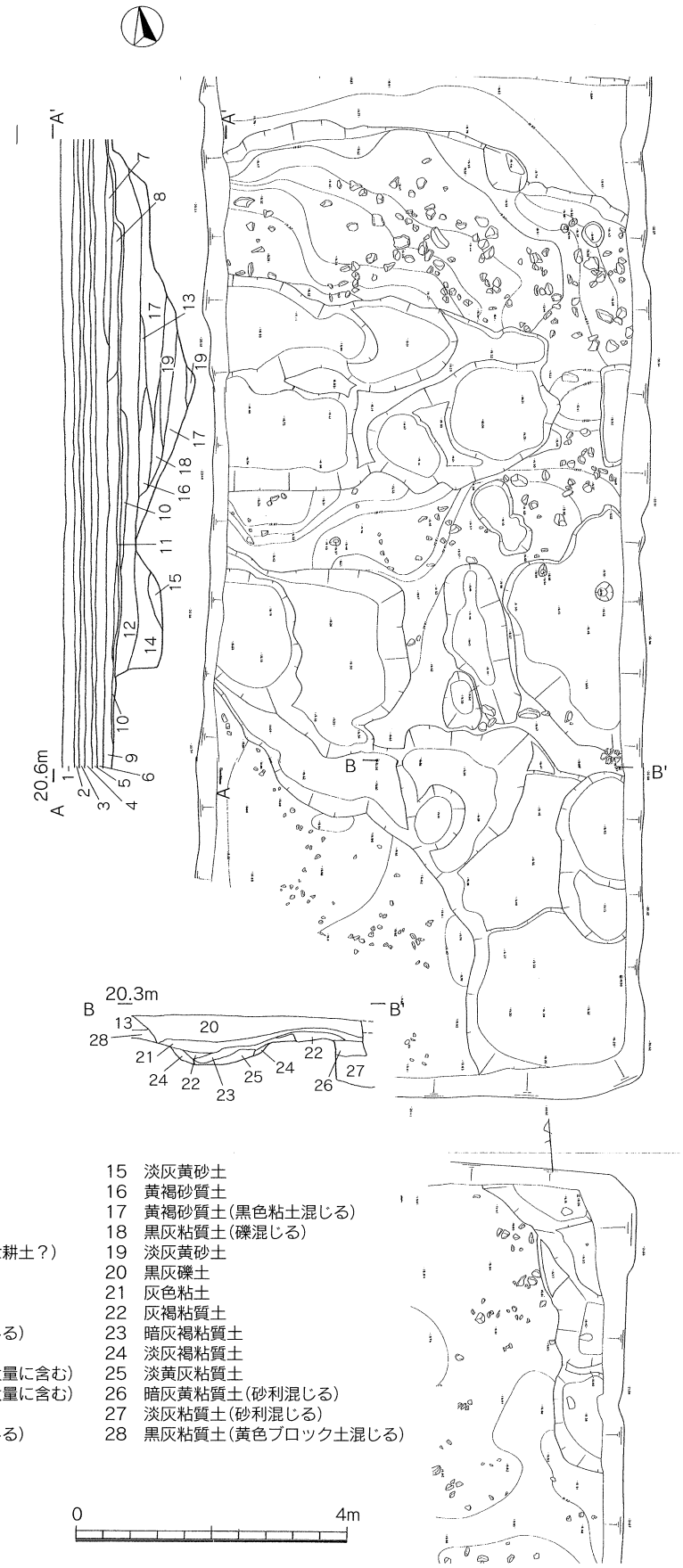
第13図　A区　SK21実測図（S＝１/50）



1　青灰色粘質土
2　暗灰褐色粘質土
3　茶褐色粘質土
4　暗灰色粘質土(黄色ブロック土混じる)
5　暗褐色粘質土(小礫混じる)

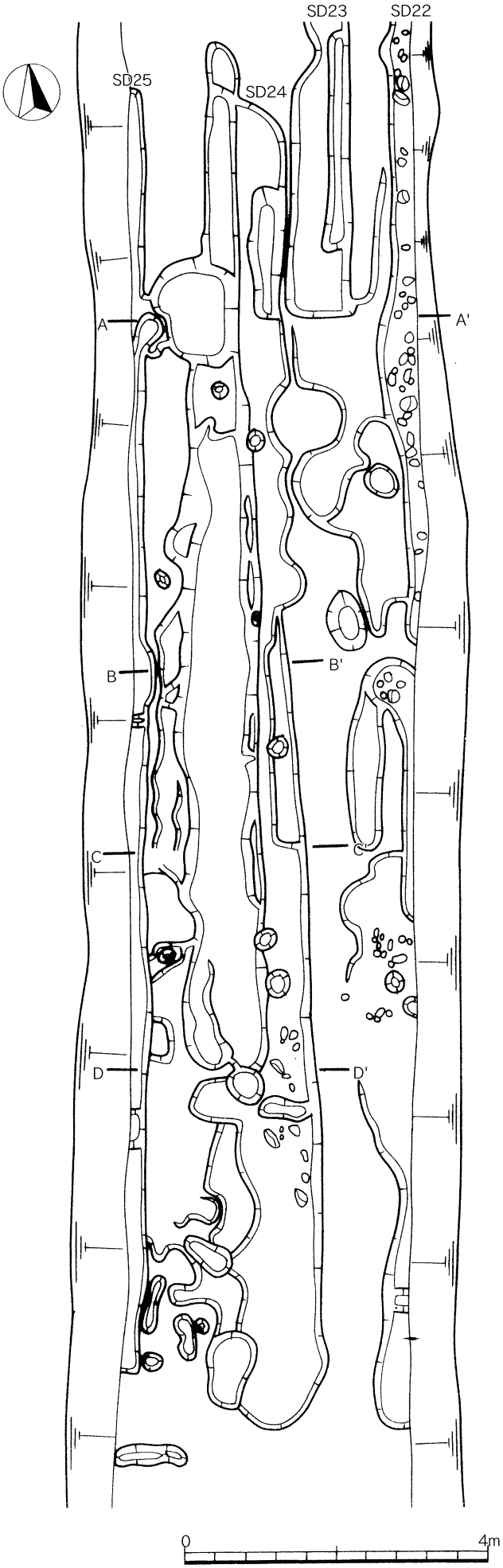
0　2m

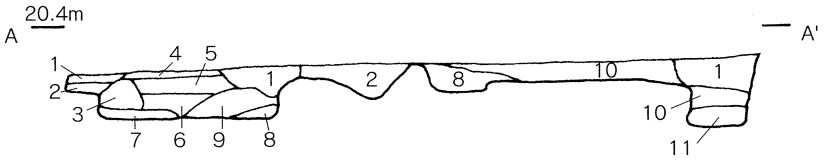
第14図　B区　SK23実測図（S＝１/50）



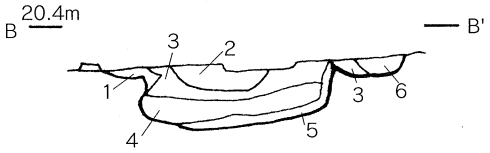
1　青灰粘質土(耕土)
2　橙色粘質土(床土)
3　暗橙褐粘質土
4　灰橙褐粘質土
5　暗青灰粘質土(近世耕土？)
6　暗茶褐粘質土
7　灰黄褐粘質土
8　暗灰粘質土
9　灰褐粘質土(礫混じる)
10　灰褐粘土
11　橙褐粘質土(鉄分大量に含む)
12　褐色粘質土(遺物大量に含む)
13　黒灰粘質土
14　褐黄砂質土(礫混じる)
15　淡灰黄砂土
16　黄褐砂質土
17　黄褐砂質土(黒色粘土混じる)
18　黒灰粘質土(礫混じる)
19　淡灰黄砂土
20　黒灰礫土
21　灰色粘土
22　灰褐粘質土
23　暗灰褐粘質土
24　淡灰褐粘質土
25　淡黄灰粘質土
26　暗灰黄粘質土(砂利混じる)
27　淡灰粘質土(砂利混じる)
28　黒灰粘質土(黄色ブロック土混じる)

第15図　A区　SK３～SK19実測図 (S＝１/100)

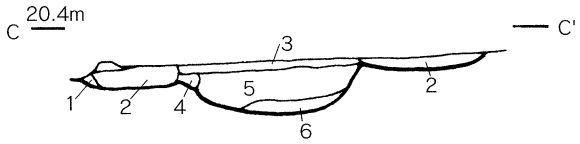




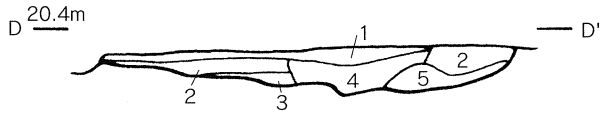
1　灰褐黄粘質土
2　黄灰褐粘質土
3　灰黄色粘質土
4　明灰橙粘質土
5　灰橙粘質土
6　暗灰褐粘質土
7　暗黄灰粘質土
8　淡黄灰粘質土
9　灰褐粘質土
10　淡灰黄粘質土
11　灰色粘質土



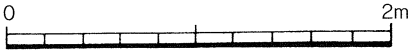
1　黄灰褐粘質土
2　暗褐粘質土
3　灰黄褐粘質土
4　灰褐黄粘質土
5　暗黄灰粘質土
6　淡灰黄粘質土



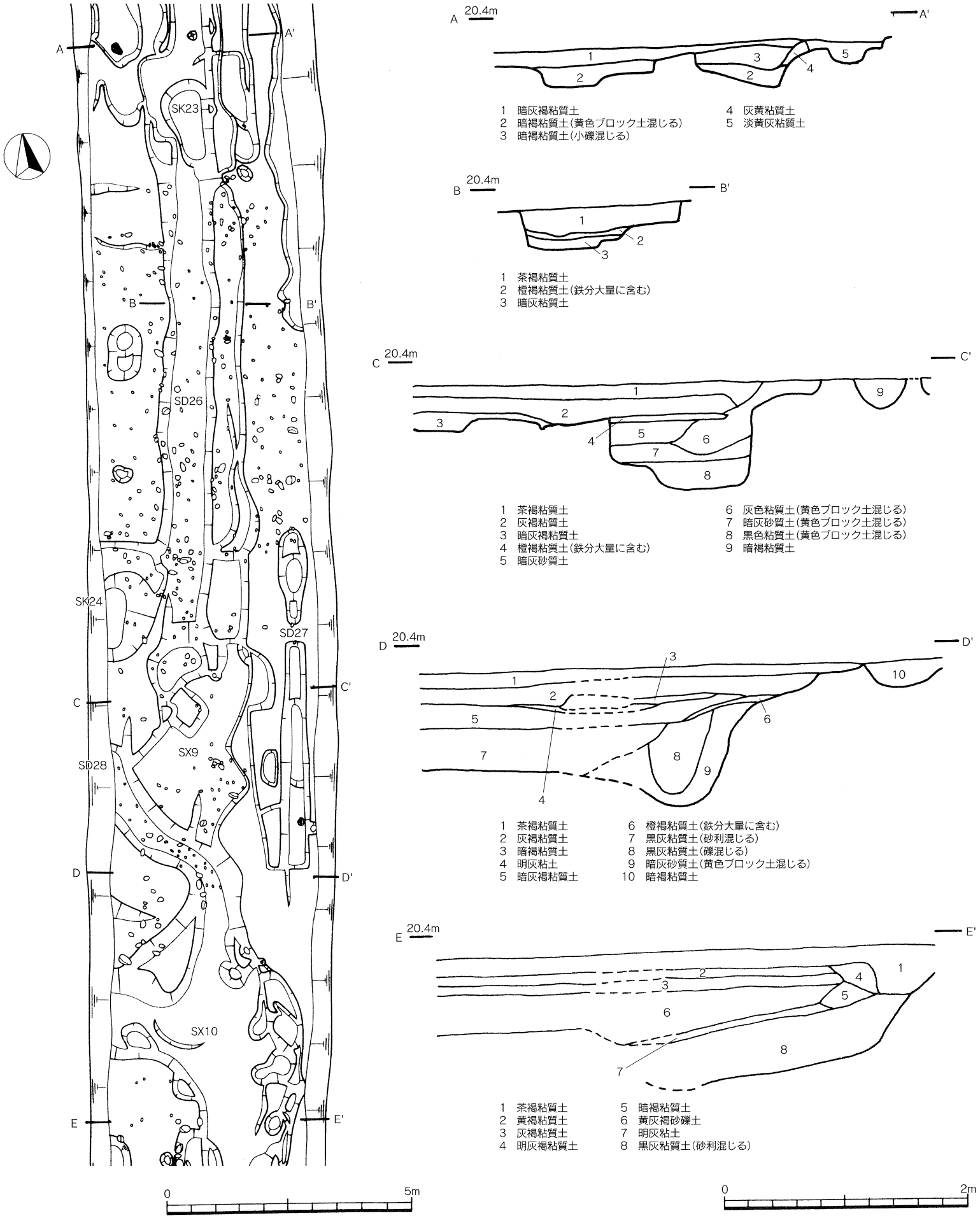
1　黄褐粘質土
2　灰褐黄粘質土
3　明灰褐粘質土
4　灰黄褐粘質土
5　暗灰褐粘質土
6　淡灰黄粘質土



1　灰黄褐粘質土
2　灰褐黄粘質土
3　暗黄灰粘質土
4　暗灰褐粘質土
6　暗灰粘質土



第16図　B区　SD24実測図（S＝1/80・1/40）



第17図　B区　SD26・SX 9 実測図 (S＝1/100・S＝1/40)

近世溝

A区SD１～SD３を横断する南北方向の溝である。覆土は灰色粘質土で、長さ約12m、幅100～120cm、深さ18～20cmの規模をもち、17～18世紀の肥前陶磁器や瓦、鉄釘などが出土した。

第２項　遺物

土器・陶磁器

１～５は縄文土器である。１は後晩期の深鉢で、外面にススが付着している。２は中屋式の深鉢で、口縁端部に刺突文、口縁部に１条の沈線が入る。３は原体方向RLの斜位縄文が認められる。器種は不明である。４は下野式と思われる深鉢胴部で、外面縦横に条痕が入る。５も外面に条痕が入る深鉢で、一部に穿孔した穴が認められる。土器の補修のために開けたものと思われる。

６以降は、中世の土器・陶磁器である。９と10は14世紀後半の白磁皿底部である。９は蛇の目釉剥ぎ、10は印花文が施してある。12は口縁部に一段のヨコナデをもち、口縁端部に大きな変化がみられない土師器皿である。

13は14世紀代の加賀焼甕で、斜格子の押印がみられる。14は、瓦質方形火鉢の口縁部である。外面に１条の凸帯が巡り、その下には菱格子文の押印がみられる。15～18は土師器皿である。15は剥離が著しい。17は口縁端部が外反気味に立ち上がり、灯芯油痕が腐着している。19と20は越前焼擂鉢の口縁部で、20は一部で卸目がみられる。21は大窯段階の瀬戸美濃鉄釉小型壺である。22は青磁盤であるが、焼き締めがあまく、くすんだ灰白色をしている。23は口縁内部が剥げた白磁碗で、14世紀前半にあたる。24は15世紀前半の白磁皿で、外面の高台部は無釉である。25、26はSK21からみつかった土師器皿で、外来系（京都系）タイプのものである。調整は丁寧で、平坦な底部から斜め上方へ開いて立ち上がる。京都系で多くみられる口縁端部内面の窪みや内面底部の稜は明瞭ではない。時期は両方とも16世紀前半にあたる。31は瀬戸灰釉小壺底部で、古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期の所産である。32は瀬戸灰釉行平で、古瀬戸中Ⅱ～Ⅲ期のものである。33は瀬戸鉄釉花瓶の頸部で、古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期にあたる。35は16世紀前半の土師器皿である。36は古瀬戸後Ⅱ期の瀬戸美濃灰釉平碗の口縁部である。37は瀬戸灰釉尊式花瓶の頸部にあたる。大窯Ⅰ期の所産である。38は15世紀後半の中国染付皿である。41は16世紀前半、45は15世紀半ば～後半、47は15世紀前半の土師器皿である。53は外面に叩き痕がみられる鉢の底部で、産地は不明である。58は、古瀬戸後Ⅳ期の新段階にあたる瀬戸美濃天目茶碗である。59は玉縁口縁をした青磁碗で、15世紀前半のものである。61は、瀬戸美濃灰釉平碗の口縁部で、古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古期の時期である。62は古瀬戸後Ⅳ期の古段階にあたる瀬戸美濃灰釉平碗底部である。高台に削痕がみられる。64は外面に花文をもった火鉢である。67は瀬戸美濃天目茶碗で、大窯Ⅰ期の底部にあたる。68は15世紀前半の白磁高台無釉皿である。67と68の陶磁器は、意図的に打ち欠いて体部と切り離している。69は大窯Ⅳ期の口縁部にあたる瀬戸美濃天目茶碗である。72は15世紀終わり頃京都系の土師器皿である。143は瀬戸卸目大皿で、古瀬戸後Ⅳ期古段階、144は瀬戸灰釉盤で古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期古段階にあたる。146は古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の瀬戸灰釉大型筒型容器である。147は古瀬戸前Ⅲ～中Ⅱ期の入子である。148は古瀬戸後Ⅰ期の瀬戸美濃灰釉卸皿である。149も瀬戸灰釉卸皿の底部で、釉薬は顕著ではない。古瀬戸中期頃と思われる。150は古瀬戸後期の瀬戸灰釉卸皿底部である。152は古瀬戸後期の鉄釉茶壷である。153と154は大窯Ⅰ期の瀬戸美濃天目茶碗底部である。158は丹波焼と思われる壺の口縁部で、表面の釉薬は剥げかかっている。162は15世紀代の青磁碗、166は16世紀中頃の青磁碗で、蓮弁文は細線で幅が狭くなっている。167は大窯Ⅰ期の瀬戸灰釉丸碗で、外面には線描連弁文がみられる。168は13世紀後半～14世紀前半の青磁碗底部で、鎬連弁を有するタイプのものである。169～171は白磁碗で、外底の釉は輪状に削られている。170と171は内面見込みには花文スタンプが施されており、時期は14世紀代である。172は14世紀前半の青磁花瓶である。173は青磁筒型香炉の破片で、15世紀前半に属する。178は15世紀後半の白磁皿である。180は調整があまい白磁皿で、オリーブ灰色をしている。181は輪状高台をもった白磁皿である。外底面には赤色の墨書が書かれているが判読はできない。15世紀前半～半ばの所産である。184～190は中国染付磁器である。184～188は端反皿

で、184～187には草花文が描かれている。185は15世紀後半～16世紀前半、186は16世紀末に位置付けられる。189は染付碗底部で、内面に「福」という文字がみられる。190は16世紀以降の染付碗で、外面には２本の蔓の線が絡み合う唐草文が施されている。197は、古瀬戸後Ⅲ期の瀬戸灰釉平碗底部である。200は在地産の方形火鉢である。

尚、図示していないが、包含層からは、中国製褐釉壺の破片を確認している。

土製品・陶製品

203～206は円盤状陶製品である。203は直径２㎝前後の大きさで、信楽焼壺を再利用したものである。204～206は直径５㎝程の越前焼陶片で、割れ口はすべて磨がれている。207～209は溝もち砥石である。いずれも越前焼陶片を利用している。金属製品の曲面体を磨くのに使用したようである。210～216はフイゴの羽口である。直径６～８㎝、孔径約３㎝で、すべて砕紛化している。217～220は坩堝である。218～220の口縁端部は面取りをしている。217と218は口径約7.5㎝の小型、219と220の口径は約９㎝の大型と大小２タイプ存在するようである。221と222は二次的加熱を受けた方形状土製品で、片面のみに布目の痕跡を有している。鋳型の可能性がある。

鉄製品・銅製品

232～235は鉄釘である。232と233は木製質の付着物が被っている。236は、鎧の部品である小札（こざね）である。直径２㎜前後の縅穴（おどしあな）が２穴存在する。穴は左右対象ではなく、若干偏っている。

銅製品は、銅銭と錫杖を確認している。237の錫杖はSK21の埋土から完存して出土した。総高13.7㎝、輪は宝珠形の様式をしており、輪頂には1.4㎝の宝瓶を安置する。輪の左右２箇所には簡略化した唐草葉芽がみられる。輪の左右下より巻き込んで広がったところには高さ１㎝の宝瓶が飾ってあり、輪中央花先の上には層塔が装飾している。穂袋の下部には蓮華座があり、内部は柄を差し込むための穴が開いている。柄には、先端は鋭く尖った長さ３㎝の木棒がはめ込んでいる。遊鐶は断面菱形で、内径2.7～2.9㎝のものが左右２箇所ずつ残っている。238～243の銅銭はSK20から６枚重なった状態でみつかった。238と241と242は景祐元寶、239は皇宋通寶、240は熙寧元寶、243は判読不明である。244はB区整地層から確認された寛永通宝で、下半分は欠損している。

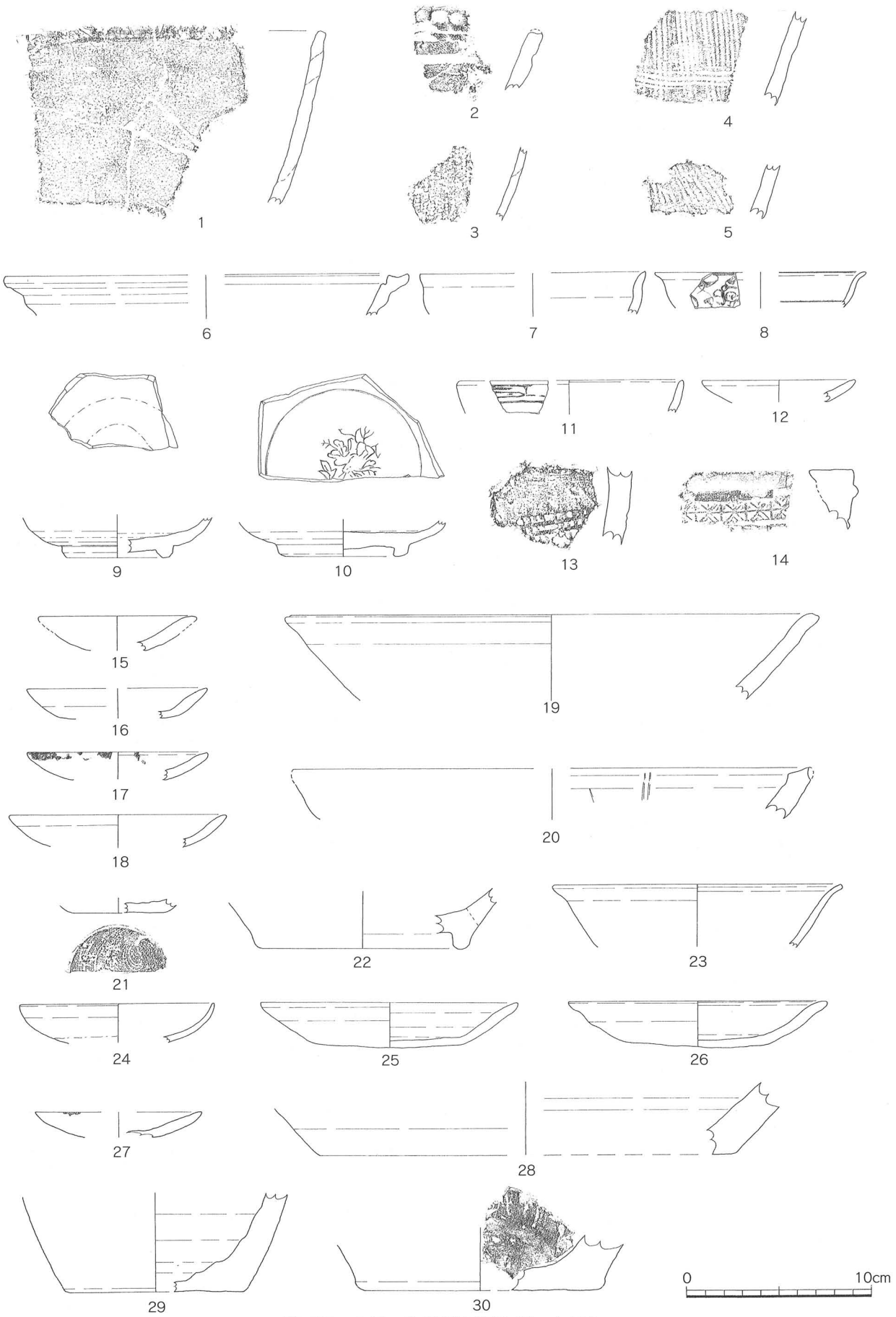
また、図示していないが、整地層からは、パンケース２箱分にわたる大量の銅・鉄滓や鉄釘約20点がみつかっている。

第３項まとめ

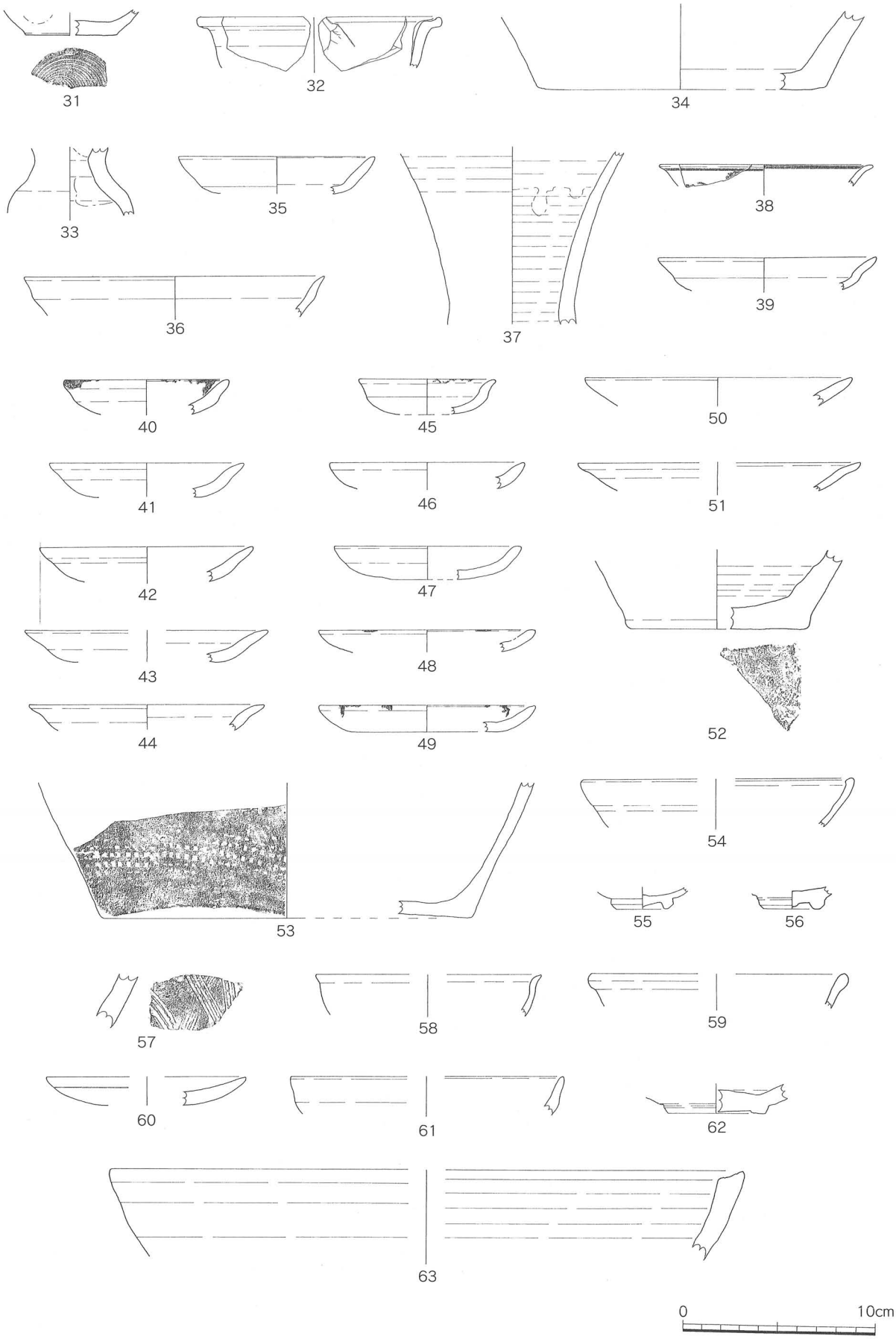
本調査区は、南北200mの細長い区域をもつ。調査区の北から約50mの範囲で複数の溝が確認されている。溝の方向はA区が東西方、B区が南北方と向きが異なる。A区東西溝については、幅約１m以内、深さ約30㎝の幅が狭く深いもの（SD１、SD５、SD10、SD12）と幅約1.5m、深さ約10㎝の幅が広く浅いもの（SD２、SD３）の２タイプ存在する。A・B両区の溝からの出土遺物は15世紀代のものが主体である。これらの東西溝、南北溝は宅地を区画するための溝と考えられる。A区SD12とB区SD26は同一の溝で、B区内で東西方向から直角にクランクし南北方向へと変わる。また、SD26の北隣にある南北溝SD24やSD25はA区SD10と同一の溝になる可能性もつ。このSD10とSD12との間や、B区SD22とSD24・25との間の空間地は道路状遺構として機能していたようである。

A区SX５やSX８及びB区SX９から南方30mまでの範囲からは、土坑群をはじめとする遺構の上層に灰褐粘質土、褐色粘質土の整地土と思われる土砂が約20㎝堆積している。この埋土からは14世紀後半～16世紀前半までの大量の土器・陶磁器やフイゴ羽口、坩堝、砥石、鉄滓などが出土した。整地土からみつかったフイゴ羽口、坩堝、砥石、鉄滓などは鉄や銅製品の生産に大きく関与する遺物である。このことから、整地土が堆積する一帯の土坑群やSX10などは金属製品の生産に関わる遺構と推察される。

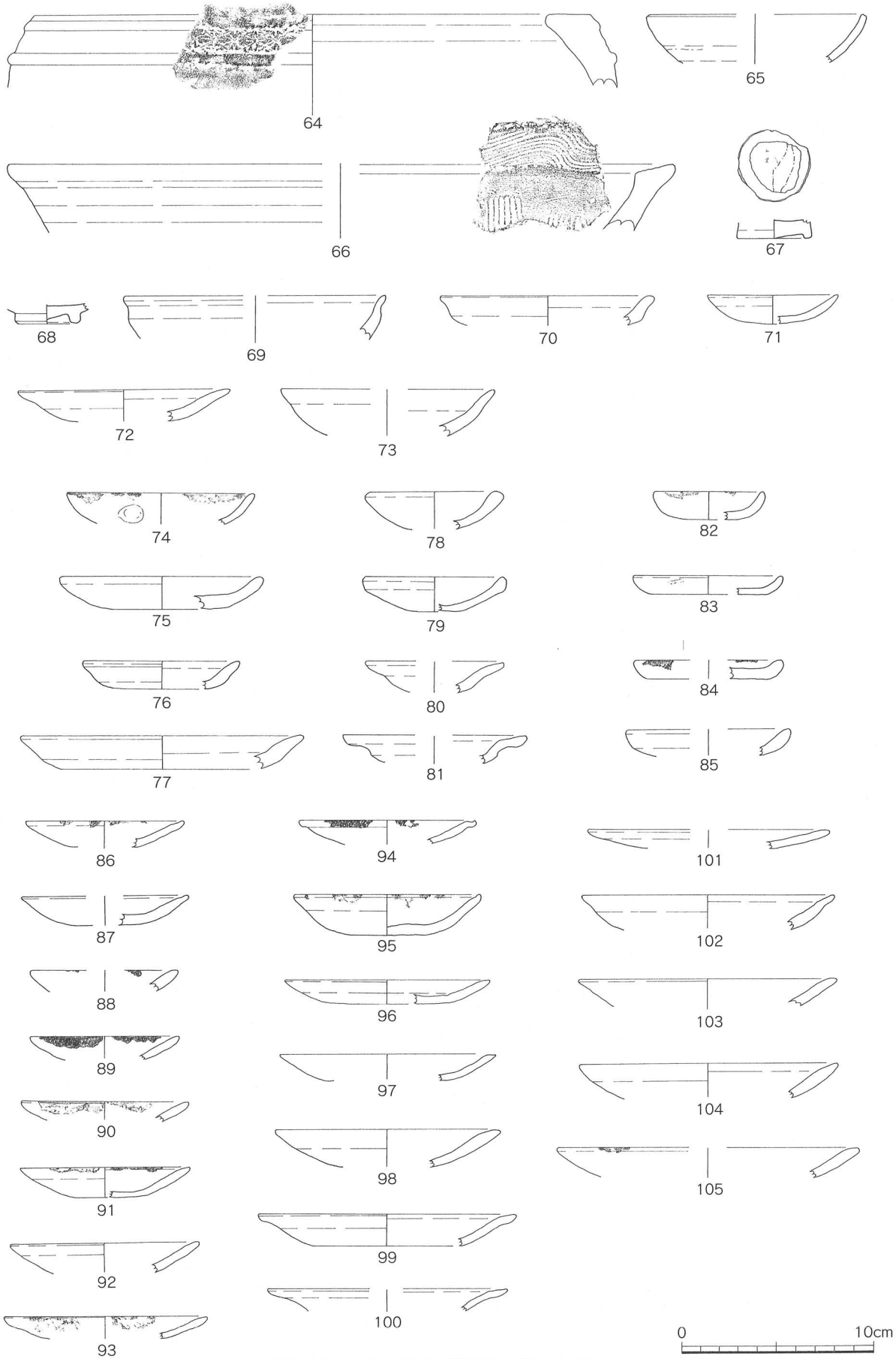
A区土坑群の南側に位置するSK20とSK21は整地後に掘削された土坑である。SK20からは６枚の中



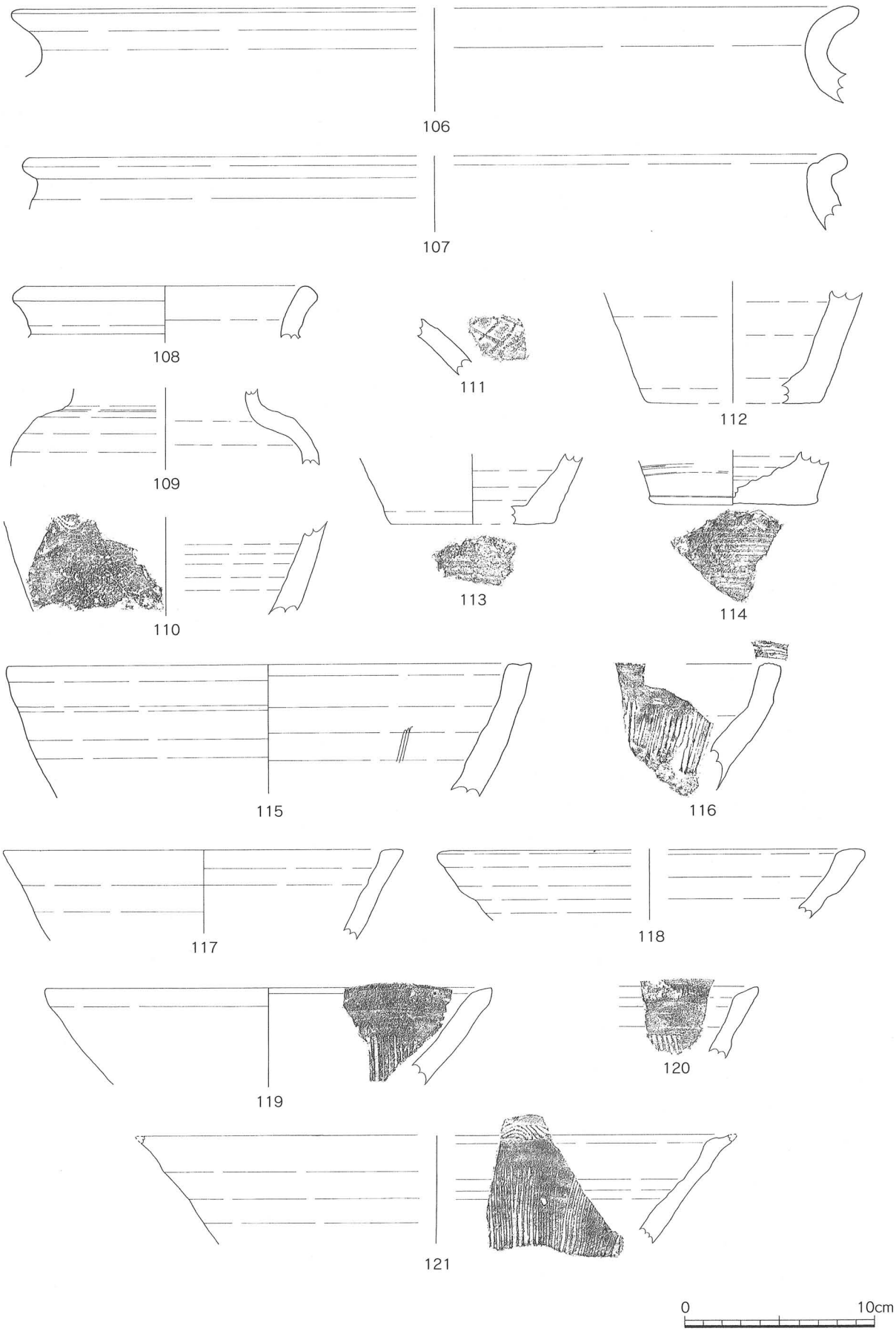
第18図　土器・陶磁器実測図（S＝1/3）



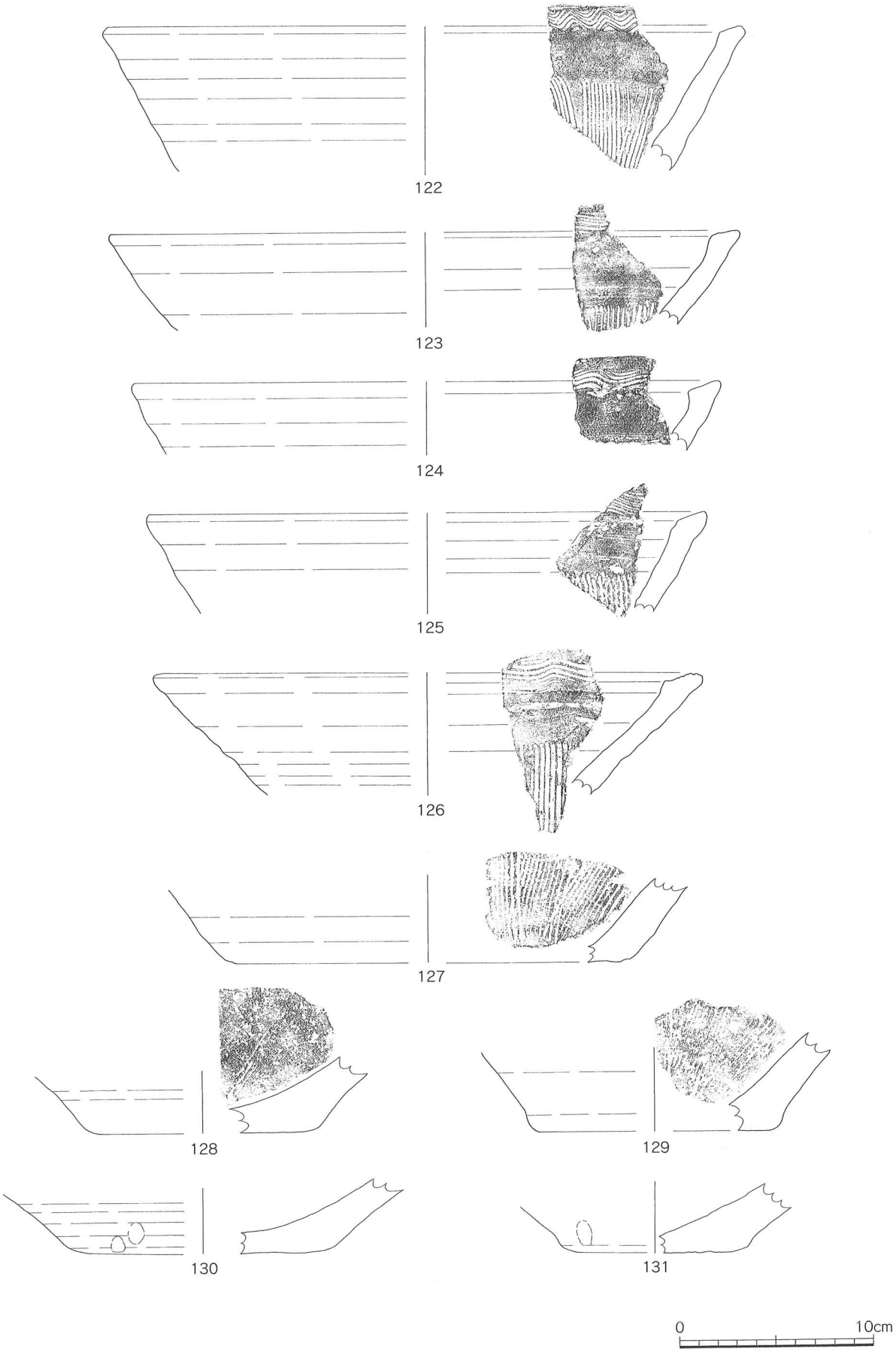
第19図　土器・陶磁器実測図（S＝1/3）



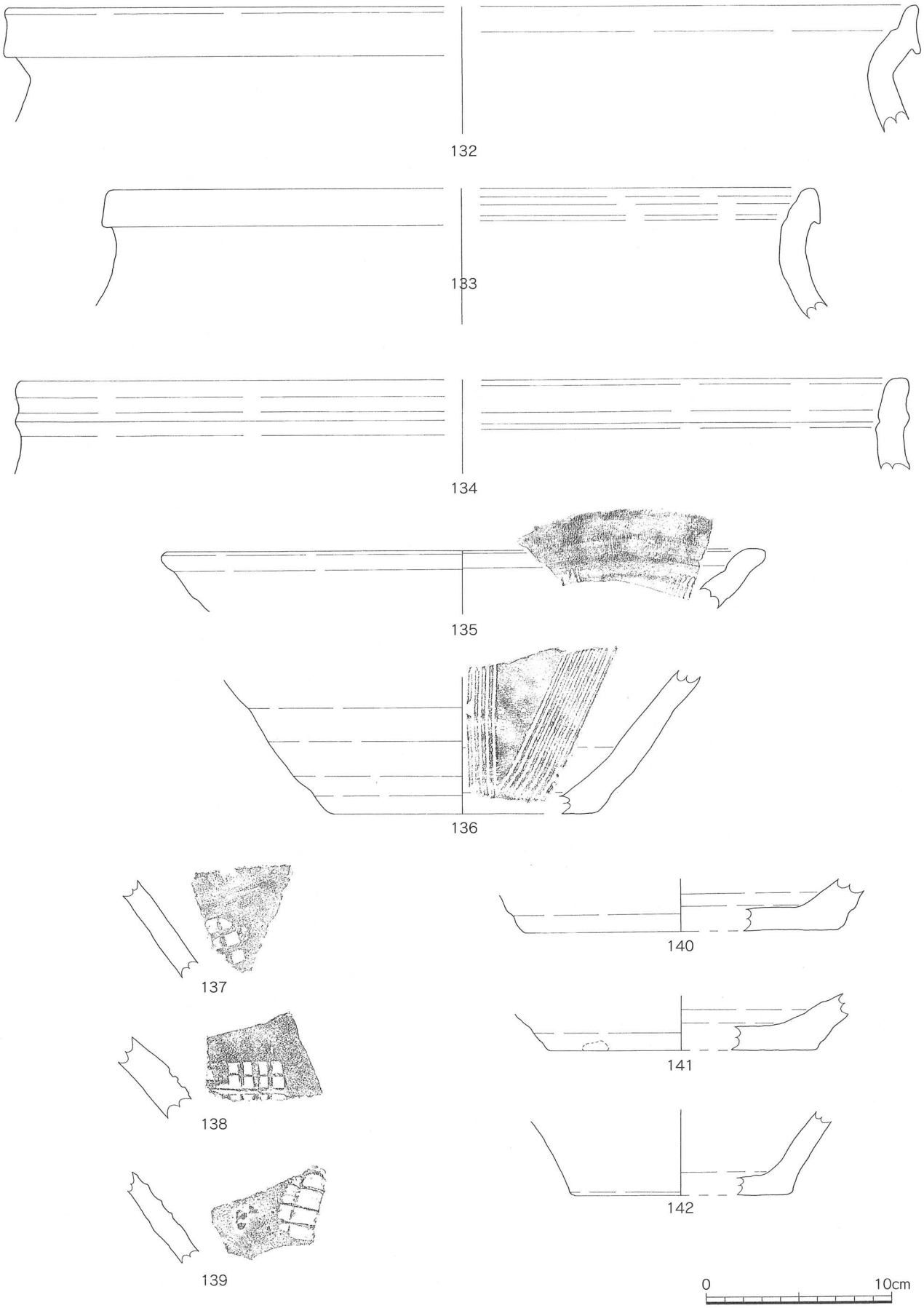
第20図　土器・陶磁器実測図（S＝1/3）



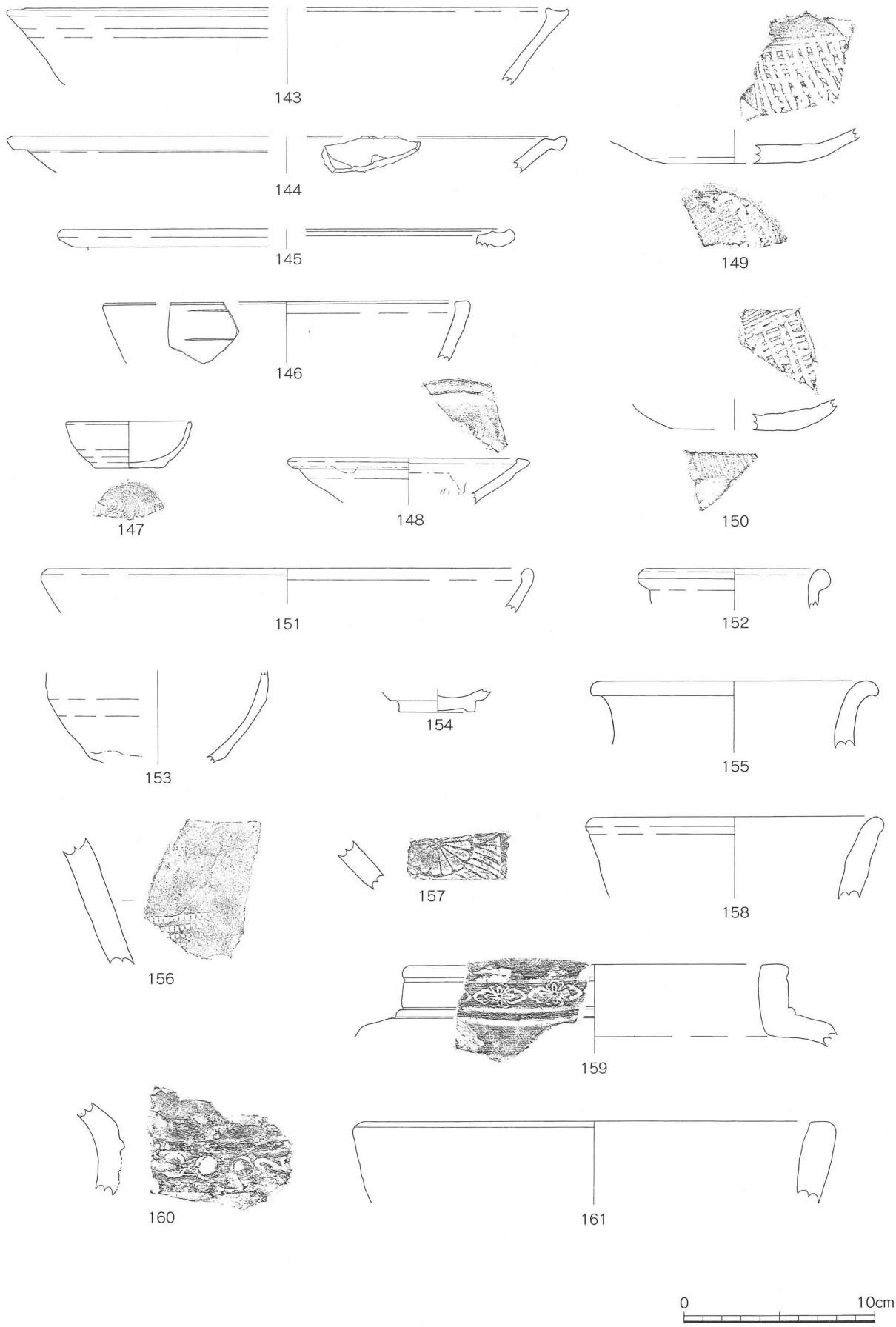
第21図　陶磁器実測図（S＝1/3）



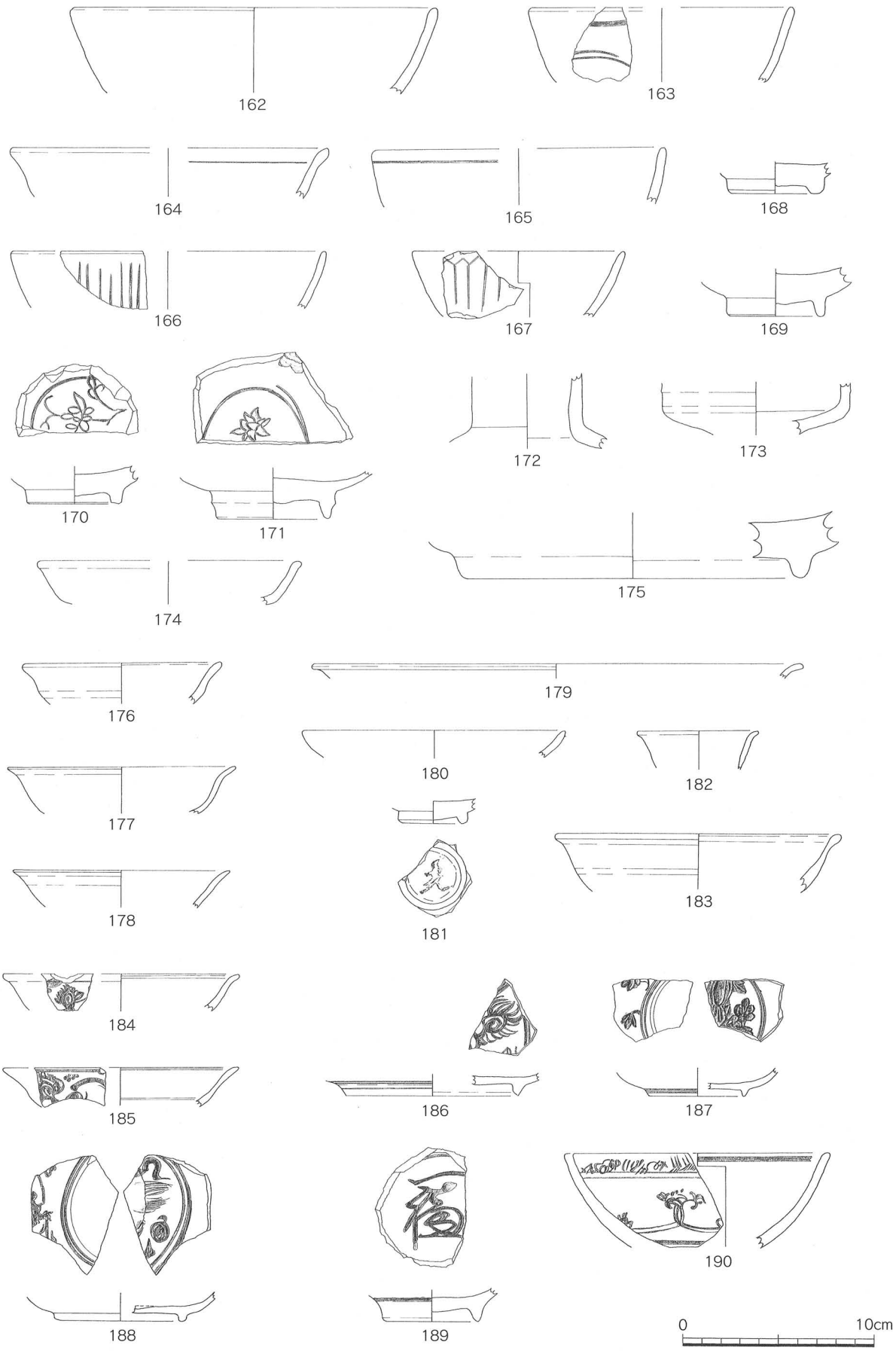
第22図　陶磁器実測図（S＝1/3）



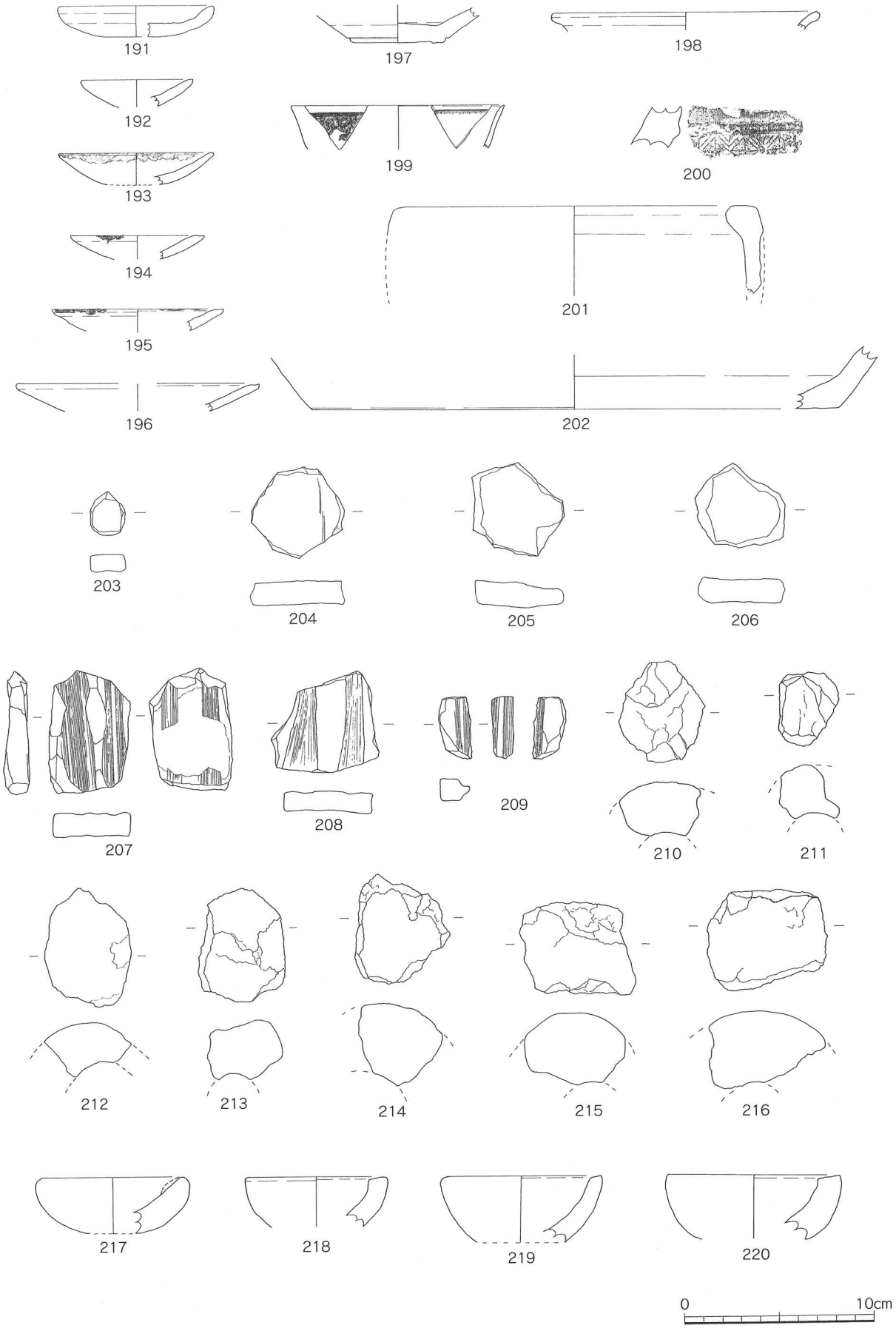
第23図　陶磁器実測図（S＝1/3）



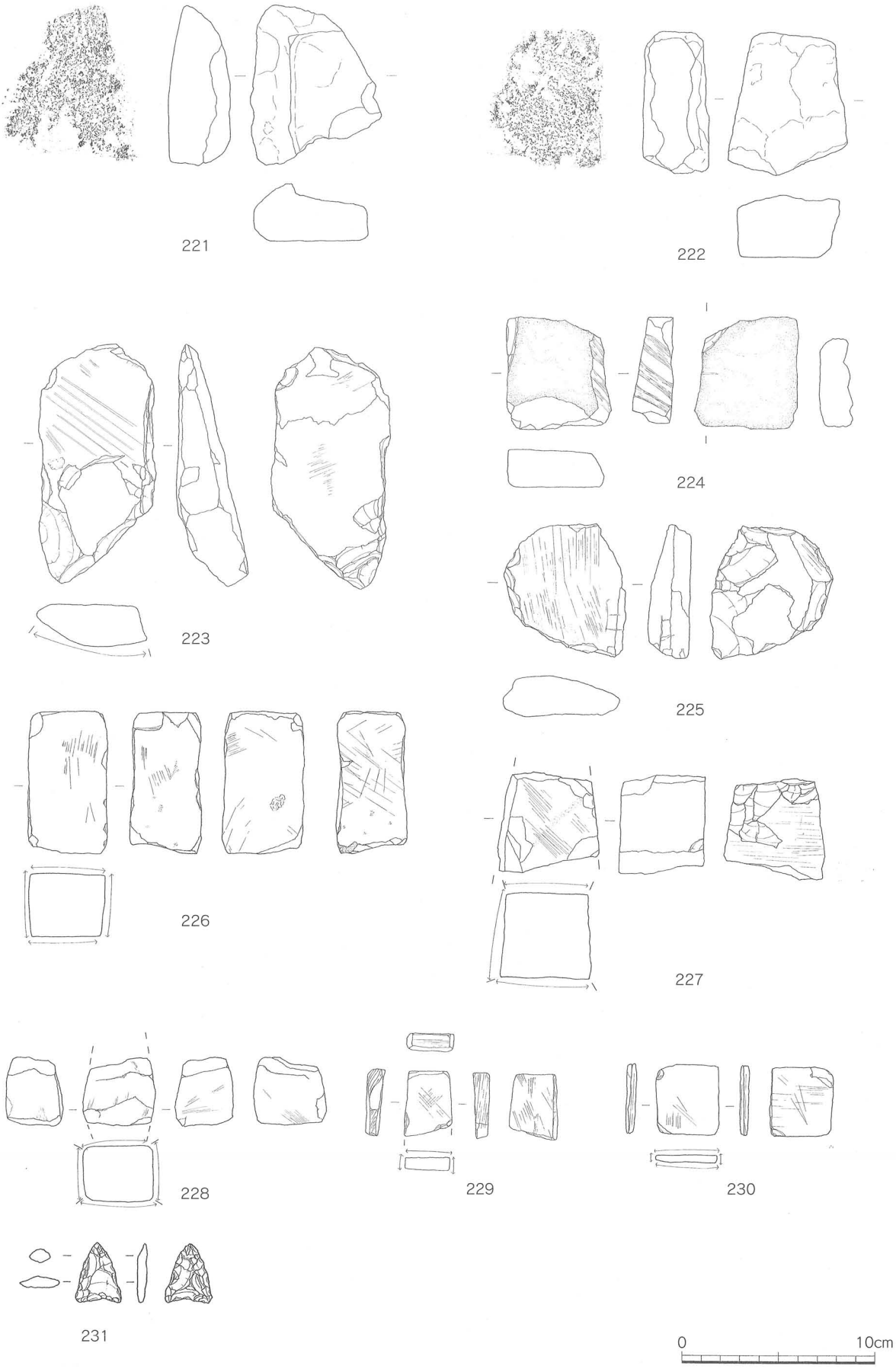
第24図　土器・陶磁器実測図（S＝1/3）



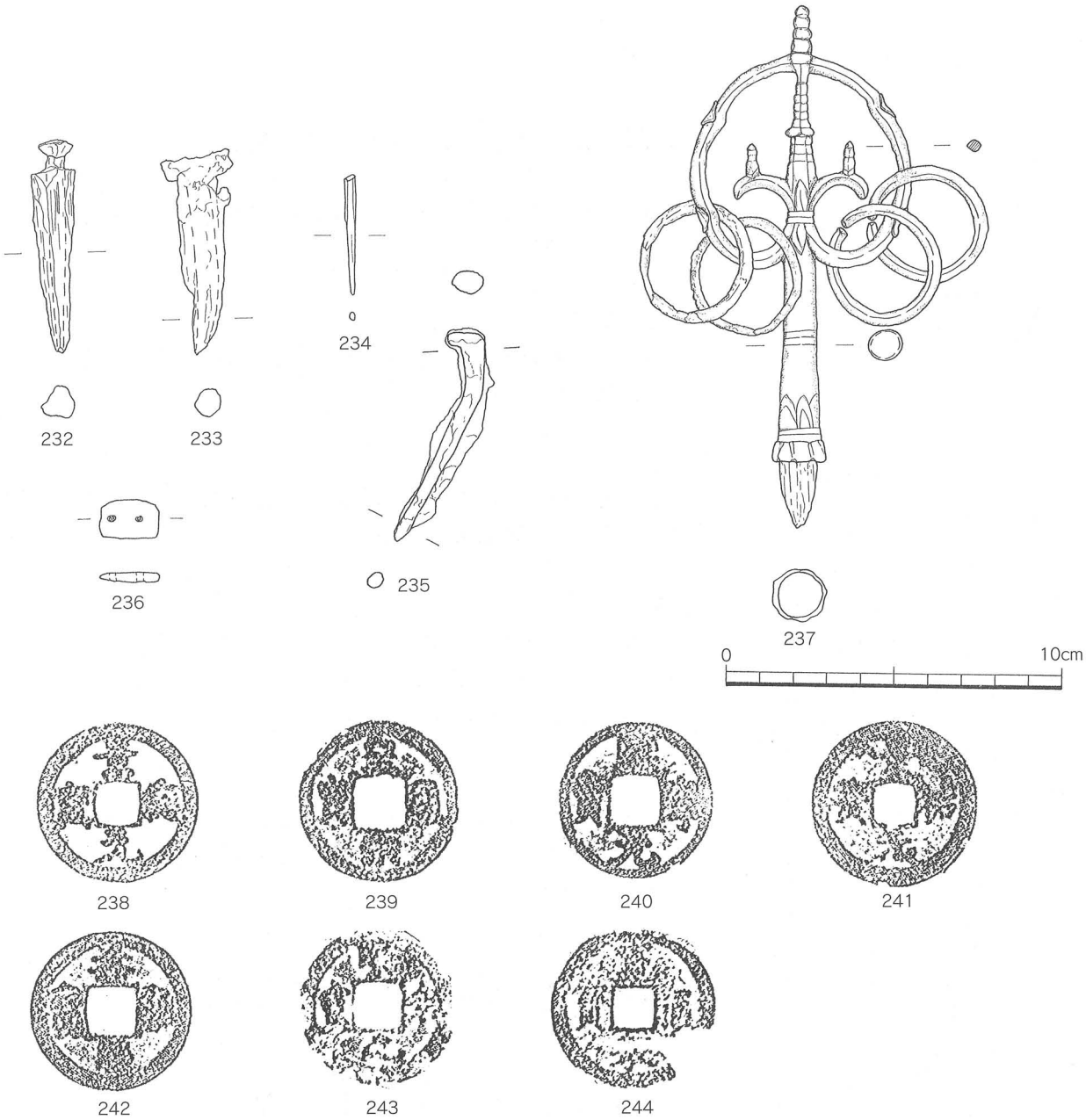
第25図　陶磁器実測図（S＝1／3）



第26図　土器・陶磁器・土製品・陶製品実測図（S＝1/3）



第27図　土製品・石製品実測図（231のみS＝1/2、その他はS＝1/3）



第28図　鉄製品・銅製品実測図（S＝1/2）238～244はS＝1/1

国銭、SK21からは銅製錫杖、土師器皿、鉄釘が出土している。この2基の土坑は、規模や出土遺物から土坑墓と考えられる。また、出土した釘には木質物が付着していたことから木棺墓であった可能性が高い。なお、人骨は確認できなかった。SK20、21から近いB区SX9の横穴状遺構なども遺物が出土していないため断定はできないが、墓坑であった可能性をもつ。

SK21より南側には東西溝SD15・16・17が走り、それより南方は遺構・遺物ともに希薄となる。

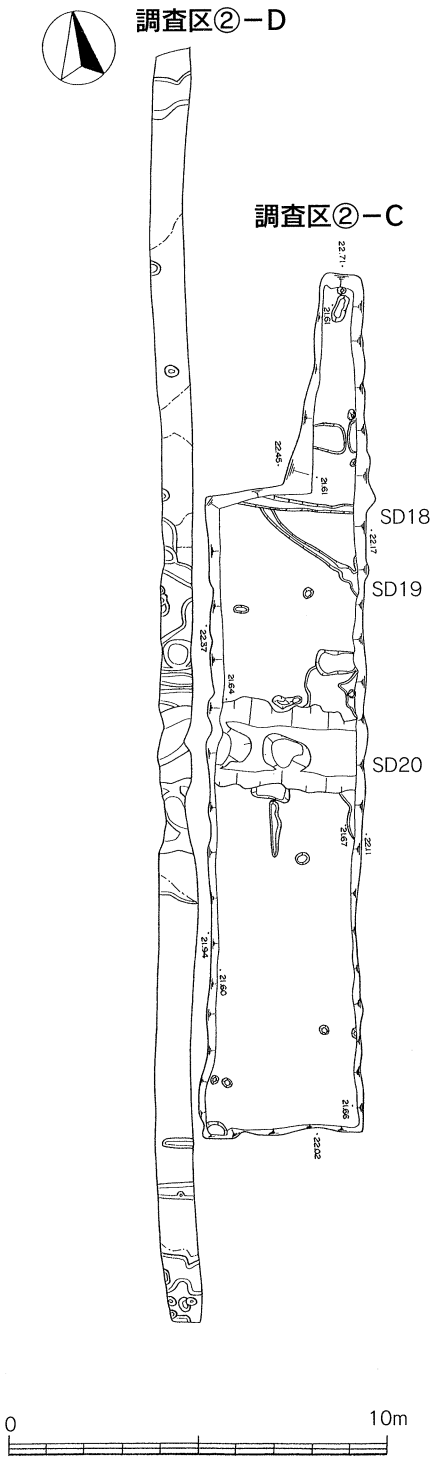
以上を踏まえて、本調査区の遺構の性格について概観する。

調査区中央でみられたSK3～SK19の土坑群は出土遺物などから鍛冶に関連した遺構と考えられ、この場所周辺では鍛冶師が居住していたと想定される。土坑群を含む調査区の北側一帯は方形の区画溝で囲った宅地が存在する。区画溝と区画溝の間は東西・南北ラインの道路が走り、この地一帯では計画的な区画割りが施されていたようである。この区画一帯は、館に近接した商工業者の生活の場があって、市が形成されていたと考えられる。市の存続時期は14世紀後半～15世紀後半までで、16世紀前半には大規模な土木工事によって整地がなされ、その上に墓地がつくられていく。この大規模な再整備によって、市は近世の宿駅地であった現本町地区あたりに移動していったと推定される。

なお、墓の被葬者については副葬品に錫状が納められていることから、地位の高い人物と想定される。

第３節　調査区②－Ｃ（ジョウカク地区）

本調査区は、調査区②－Ａ、②－Ｂの南方の延長上に設定した調査区である。



第29図　調査区②－Ｃ、②－Ｄ
遺構図全体図（S＝１/200）

第１項　遺構

調査区の中央から北側は、溝やピットなどが多いが、南側からはほとんど遺構がみられない。

SD18

調査区北側を東西に走る溝である。幅は20～35cm、深さ５cm前後の大きさをもつ。遺物は出土していない。

SD19

SD18の南側に存在する溝で、北西―南東ラインをもつ。N47°Eの方角をとり、北端にあるSD18によって切られている。幅は12～23cm、深さ５～６cmを測る。遺物は出土していない。

SD20

調査区中央部、SD19の南方に位置する東西溝である。幅200cm前後、深さ約50cmを測る。後述する調査区②－Ｄからも検出された。現代のカクランによる溝である。

第２項　遺物

遺物は包含層から土師器片がみつかっているが、図示できるものはなかった。数量も数点と少ない。

第４節　調査区②－Ｄ（ジョウカク地区）

本調査区は都市計画道路建設に先立っての側溝工事に伴う発掘調査で、南北33m、東西１mの細長いトレンチ状の調査区である。東側には調査区②－Ｃが存在する。西隣にはすぐに民家が建っており、調査を実施する上で慎重を要した。この民家の西側を超えたところには調査区①が所在する。

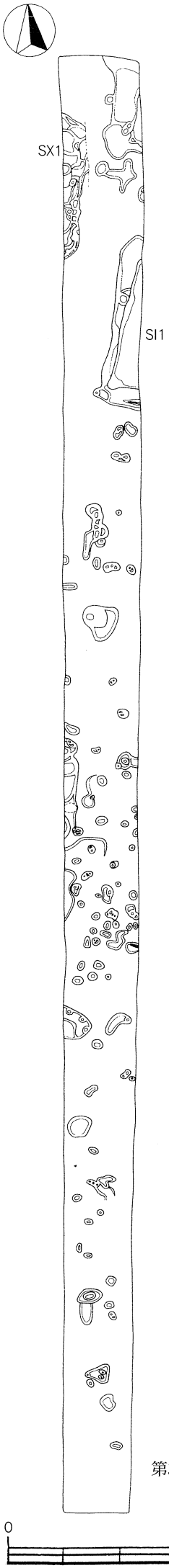
第１項　遺構と遺物

調査区北側は、遺構が希薄で、ピットを２基確認したに過ぎない。

調査区中央付近は、幅30～40cm、深さ10cm前後の東西溝やピットなど遺構が集中する。中央部のやや南寄りには、深さ約30cmの溝が存在し、中から現代の瓦がみつかった。調査区②－Ｃ、SD20と同一の溝となる。

調査区南側は、北側と同様遺構がみられなくなり、南端でピット群を確認できた。このピット群の上層には、黄褐色粘質土と黒灰色粘質土が混じり合った土が５cmほど堆積しており、整地土と考えられる。

遺物は、土師器小片が数点確認できた程度である。



第30図　遺構全体図
(S＝1/250)

第5節　調査区③（鬼ヶ窪地区）

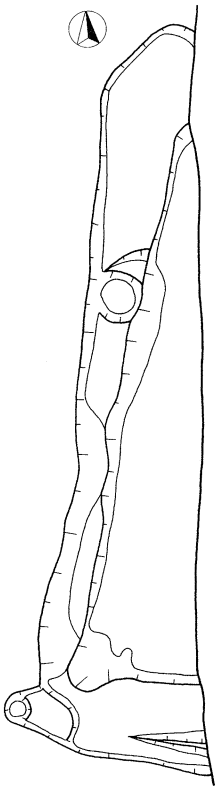
第1項　遺構と遺物

SI 1

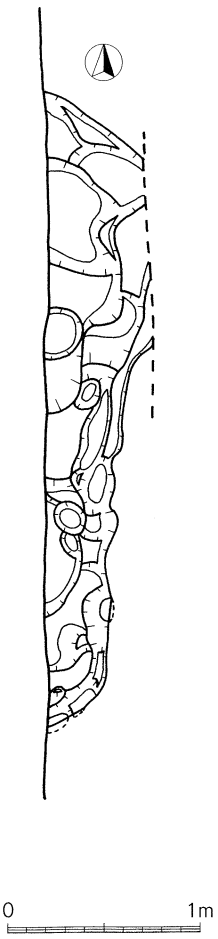
調査区北方に位置する。東側3分の2は調査区外となるため様相はわからない。方向はN17°Eで、方形プランを呈する。南北ラインは3.85m、確認できた東西長は85cm、深さは約15cmを測る。掘方に面して幅10～40cmのテラスが存在する。西面側のテラス上には直径約25cm、深さ約25cmのピットがある。また、南西コーナーにも直径約12cm、深さ約20cmのピットがあるが、直接SI 1の建物施設に関わるかは不明である。遺物は土師器片3点を確認した程度で、詳細な時期をおさえることはできないが、中世の竪穴状遺構と捉えたい。

SX I

SI 1の北西隣に位置する。竪穴状遺構のような形状を示すが、内部には大小の穴が錯綜しており、遺構の性格は明確でない。遺構のほとんどは西側調査区外へと延びている。東端は近代以降の排水溝によってこわされている。規模は南北長3.38m、東西最大長54cm、方向はN16°Eである。内部の穴は円形、楕円



第31図　SI 1実測図（S＝1/40）



第32図　SX 1実測図（S＝1/40）

形など様々で、規模は直径約20～100㎝、深さ約30～85㎝と幅がある。東側壁面の一部には全長約4.5m、幅10～20㎝、深さ15～20㎝の側溝状の溝が見られる。遺物は土師器片数点、15世紀後半～16世紀初めの青磁碗、鉄釘が出土している。

第２項　まとめ

本調査区は東西３～４m、南北67mの細長い範囲である。調査区北側はSI１やSX１など人為的な遺構が存在する。調査区中央部は土坑状遺構やピットが多く見られるが、建物の柱穴になるような穴は見つかっていない。調査区の南側に至っては、遺構は次第に減少していく。

遺物は図示できるものはなく、ほとんどは土師器片である。数量は総体的に少ないが、その中でも調査区の北側に多いようである。

以上から、本調査区の北側はSI１やSX１があることから生活空間の場が高いと考えられ、調査区中央部のピット群から南側にかけては生活空間の場が低くなっていくようである。

なお。第30図の遺構全体図には掲載していないが、本調査区より、北方４m先に東西約3.5m、南北約6.5mの範囲の調査区を設定した。この調査区では石礫層を地山とし、遺構・遺物は全く確認されなかった。

第６節　調査区④（ナガドイ地区）

第１項　遺構

堀

調査区の東側で検出され、南北に向かって走る。方向はN15°E、上幅は6.2～6.9m、下幅0.9.～1.5m、深さは地山から約2.5mの薬研型である。東側法面は約44°、西側法面は約60°と東側の傾斜の方が緩い。土層の最下層では砂が10cmほど堆積していたことから水が流れていたものと思われるが、水堀のように溜めたものではなく、用水のような少ない水量が流水したものである。遺物は、拳大の自然石が大量に入る層15～17から多く出土した。

土塁は確認できなかったが、土層が東側から堆積していくもの（層10、11、17、18）が目立つことから、勾配の緩い東側法面の上に存在していたと推される。土層５、９、13、14は近世以降の水田用水と思われる溝跡である。

SI１

調査区西南隅に位置する竪穴状遺構である。310cm以上×286cm、深さ10～15cmの歪な方形をしている。内部には直径30～45cm、深さ５～15cmのピットが４個みられる。遺物は出土していない。

SK１

調査区の中央からやや西寄りにある土坑である。直径約2.6mの円形をしている。深さは10～15cmと浅い。遺物は出土していない。

第２項　遺物

土器・陶磁器

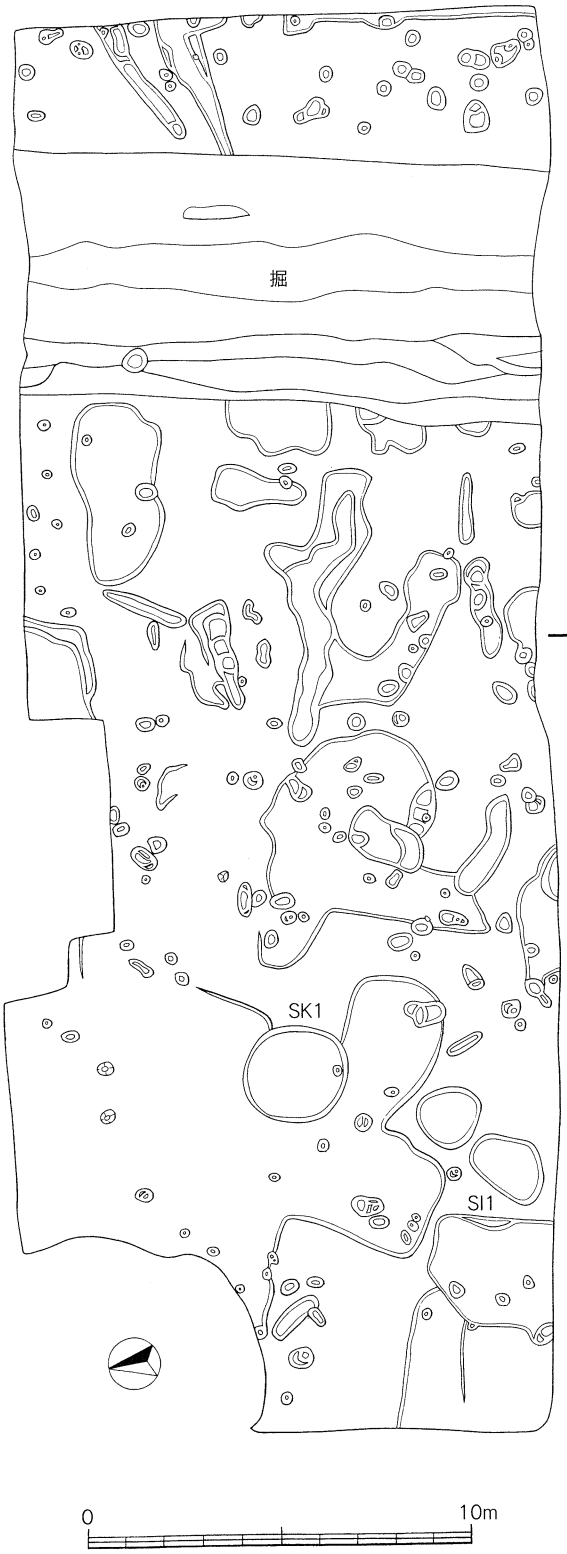
調査区から出土した遺物のほとんどは堀の中からで、層15～17から集中して出てきた。１～３は縄文土器片である。４～６は土師器皿で、４は内面体部下半、５は口縁端部に油痕が付着している。５は16世紀前半である。７は珠洲焼擂鉢である。図示してないが、内外面にハケメが施されている。８～11も珠洲焼擂鉢で、全般的にⅤ期に位置付けられる。12～19は14世紀後半～15世紀後半瀬戸焼で、主体は15世紀半ば～後半である。15の天目茶碗は覆輪被である。20～24は青磁で、22は16世紀前半の稜花皿、23は15世紀前半の皿である。25と26は包含層からの出土で、26は15世紀中頃の瀬戸焼柄付片口である。また、図示はしていないが、越前焼甕・擂鉢、中国染付の坏を確認している。

鉄・銅製品

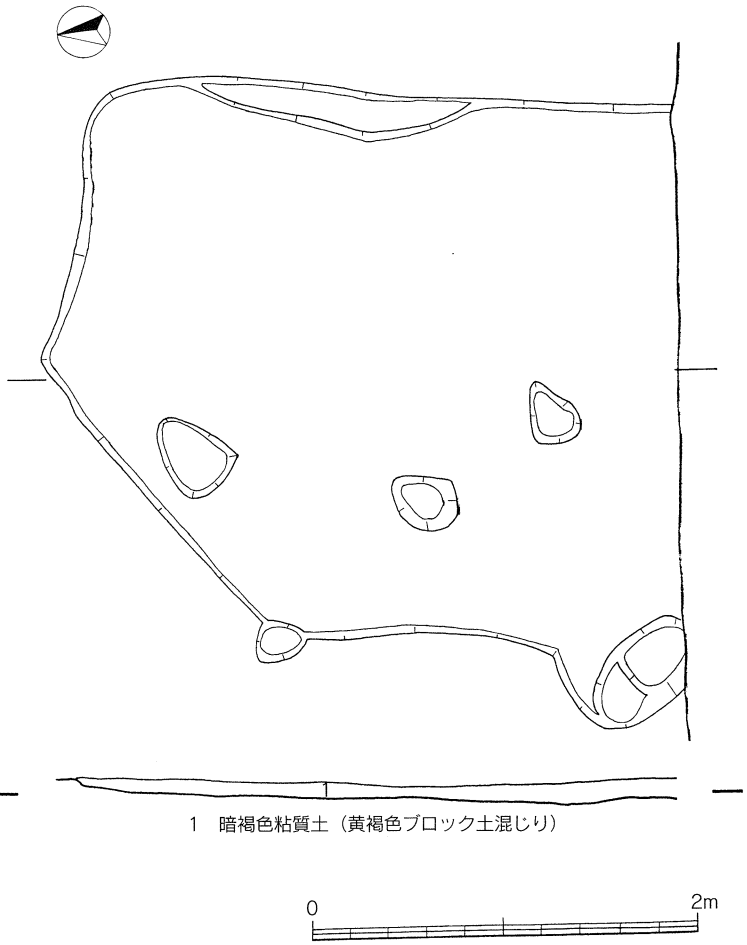
層17の下層（レベル17.75m）から銅鏡30の完形品が出土した。鏡は直径5.4cm、厚さ0.45.cm、重さ40gの厚縁式の円鏡で、錆の付着がほとんど目立たない良好な遺存状態であった。鏡背の文様は中央の鈕に亀が配され、その亀の頭部に向き合うようにして２羽の鳥が飛んでいる。鈕の左右両側と下部には円中に簡略化した草葉が配されている。時期は、16世紀前半代である。また図示はしていないが、層15付近で厚さ６mmの鉄鍋の一部が確認されている。

まとめ

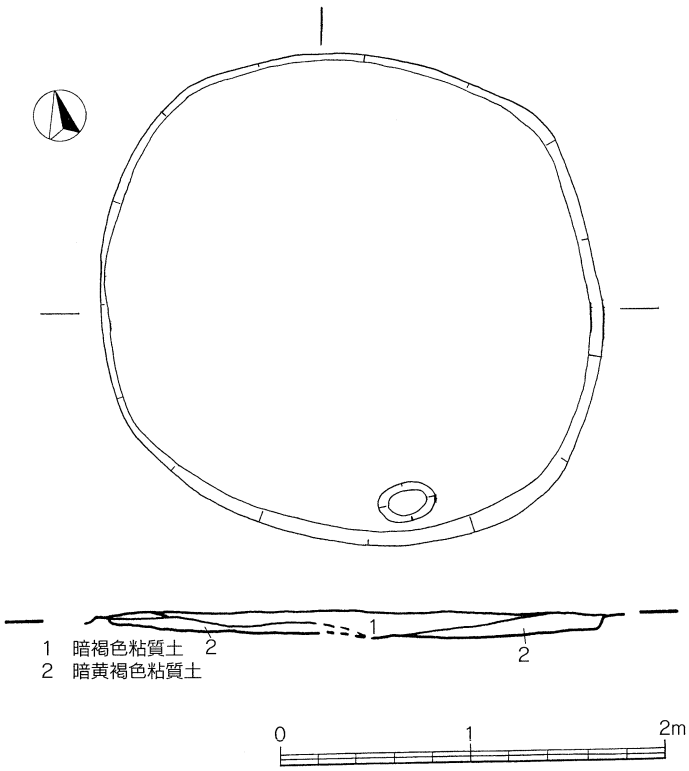
本調査区における堀跡の検出によって、これまで未確認であった富樫館の場所が明らかとなった。土塁は、土層堆積から堀跡の東側に存在したと思われる。館本体は調査区の東方一帯に広がっていたようである。調査区西側は、竪穴状遺構や土坑などを確認しているが、全般的に遺構・遺物は希薄である。



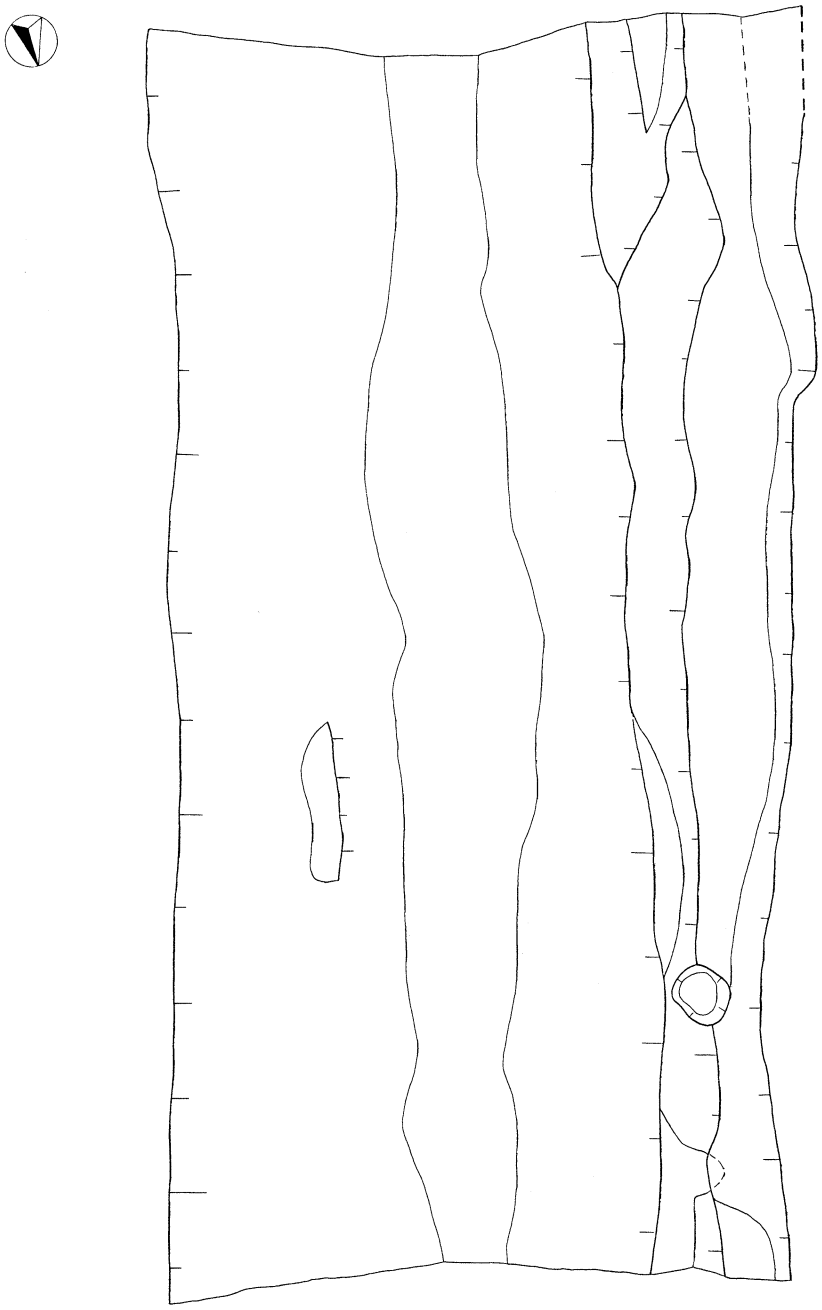
第33図　遺構全体図（S＝1/200）



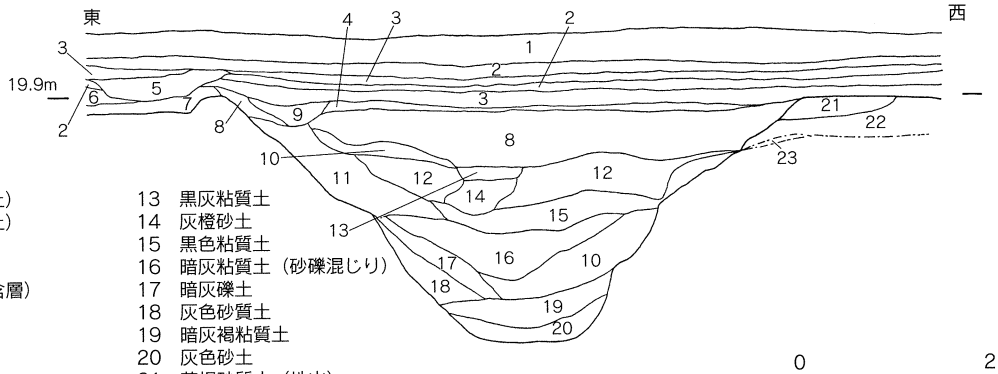
第34図　SI 1 実測図（S＝1/40）



第35図　SK 1 実測図（S＝1/40）

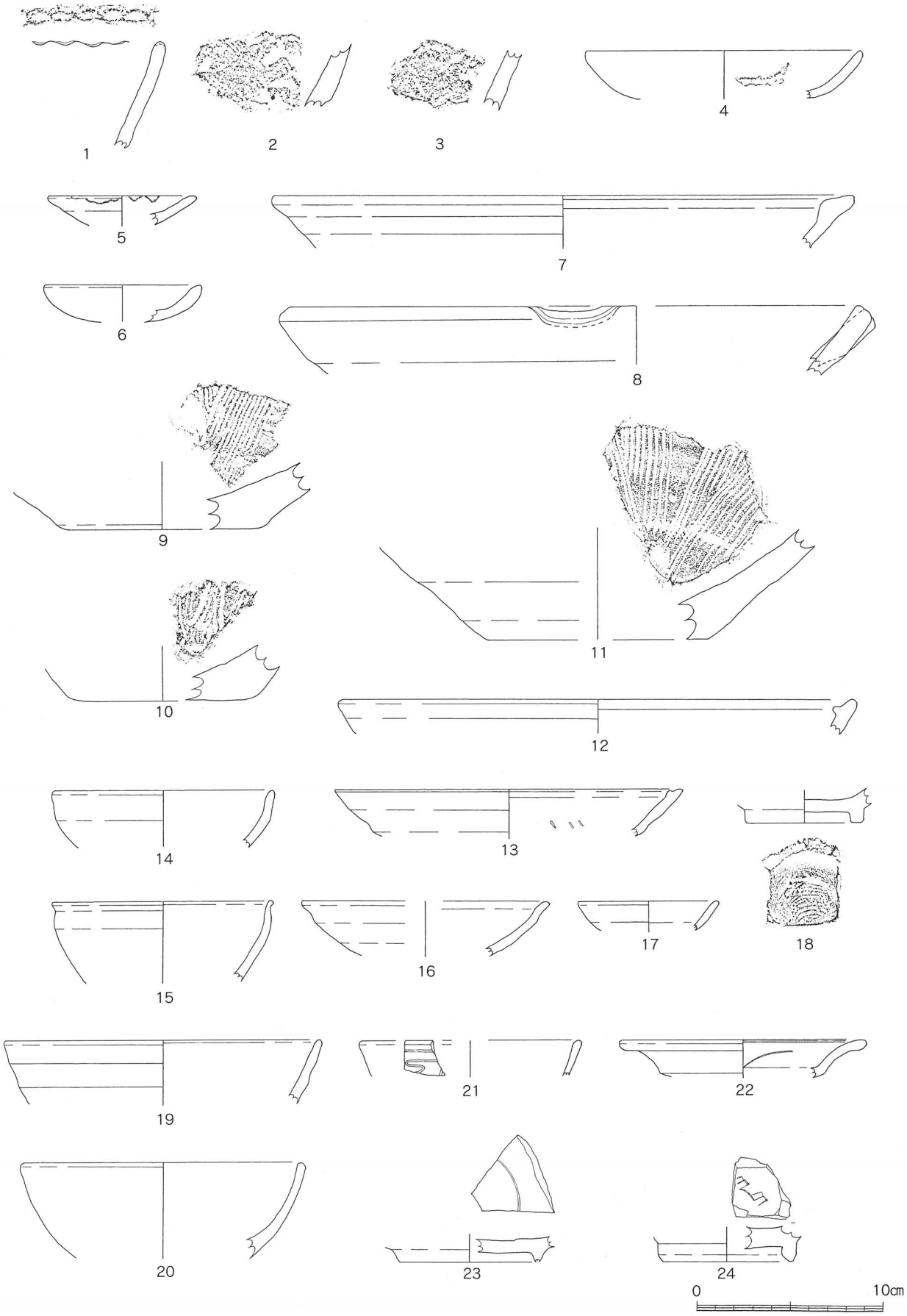


第36図　掘跡平面実測図（S＝1/80）

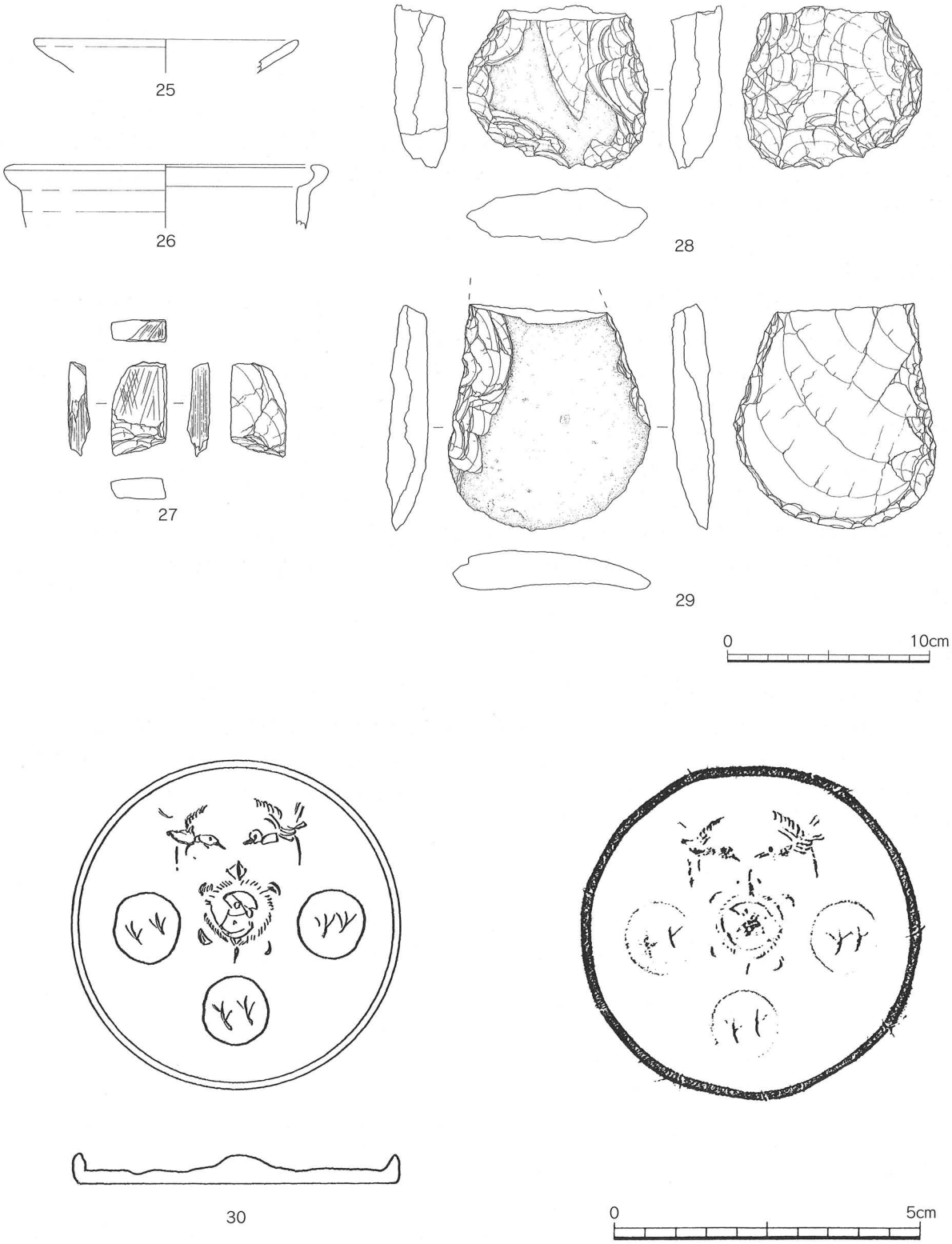


1　盛土
2　灰色粘質土（耕土）
3　灰橙粘質土（床土）
4　褐色粘質土
5　暗灰褐礫土
6　暗褐粘質土（包含層）
7　暗黄褐粘質土
8　暗灰粘質土
9　灰色礫土
10　灰褐砂質土
11　暗灰褐砂質土
12　灰色砂質土（橙色鉄分混じり）
13　黒灰粘質土
14　灰橙砂土
15　黒色粘質土
16　暗灰粘質土（砂礫混じり）
17　暗灰礫土
18　灰色砂質土
19　暗灰褐粘質土
20　灰色砂土
21　茶褐砂質土（地山）
22　灰褐砂土　（地山）
23　灰褐礫土　（地山）

第37図　掘跡南壁土層断面実測図（S＝1/80）



第38図　土器、陶磁器実測図（S＝1/3）



第39図　土器・陶器・石製品・銅製品実測図（S＝1/3、30はS＝1/1）

第７節　調査区⑤（ナガドイ地区）

第１項　遺構

SD１

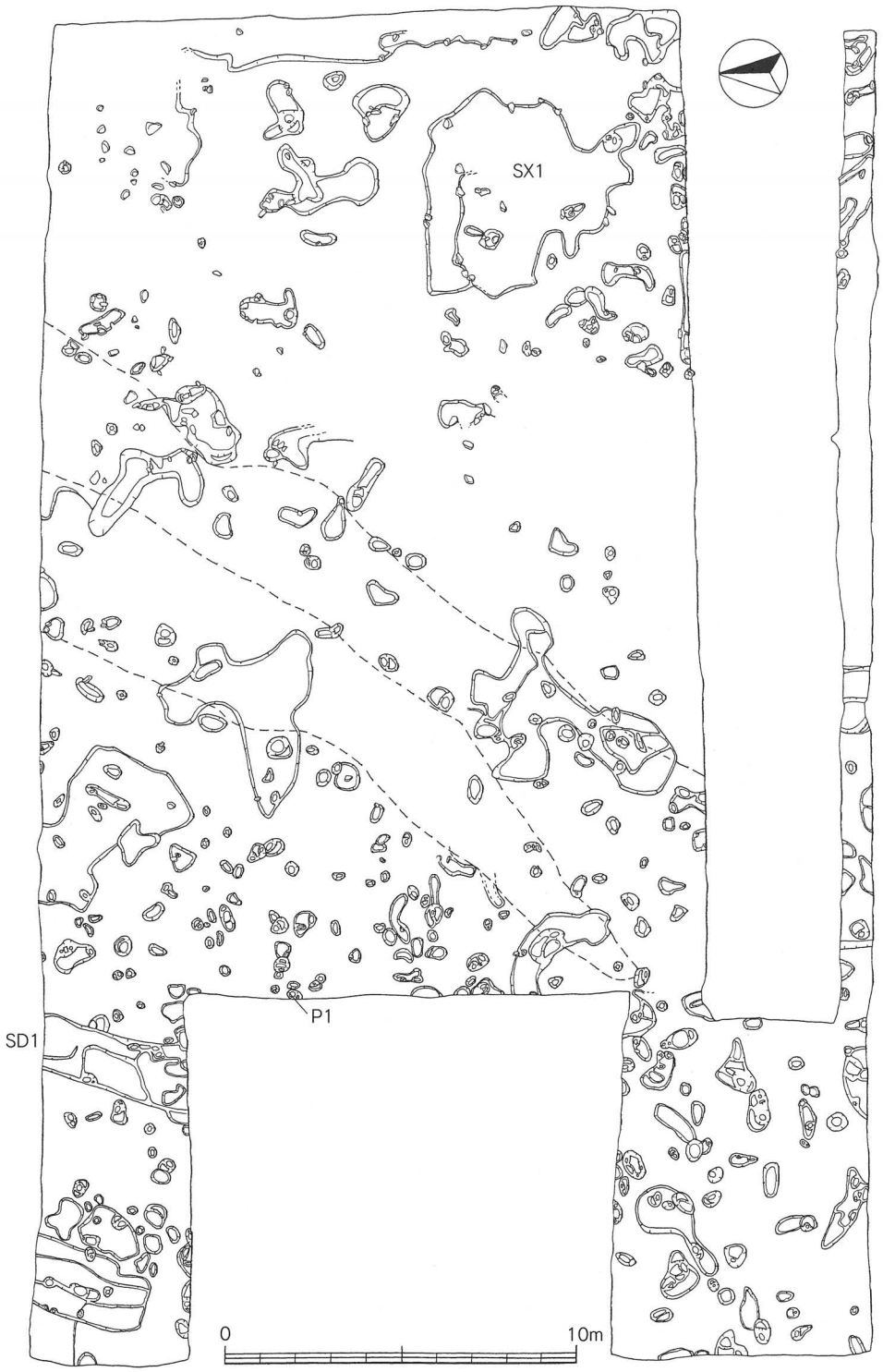
調査区北西側にある溝で、方向はN17°Eである。幅155～195cm、深さ５～10cmの規模をもつ。溝の中には直径20～45cm、深さ５～10cmのピットが数基存在する。溝は南側調査区では確認されていないので調査区外で西方にクランクすると思われる。図示はしていないが、14世紀末～15世紀後半の土師器皿、瀬戸灰釉卸皿・花瓶・鉢などが出土している。

第２項　遺物

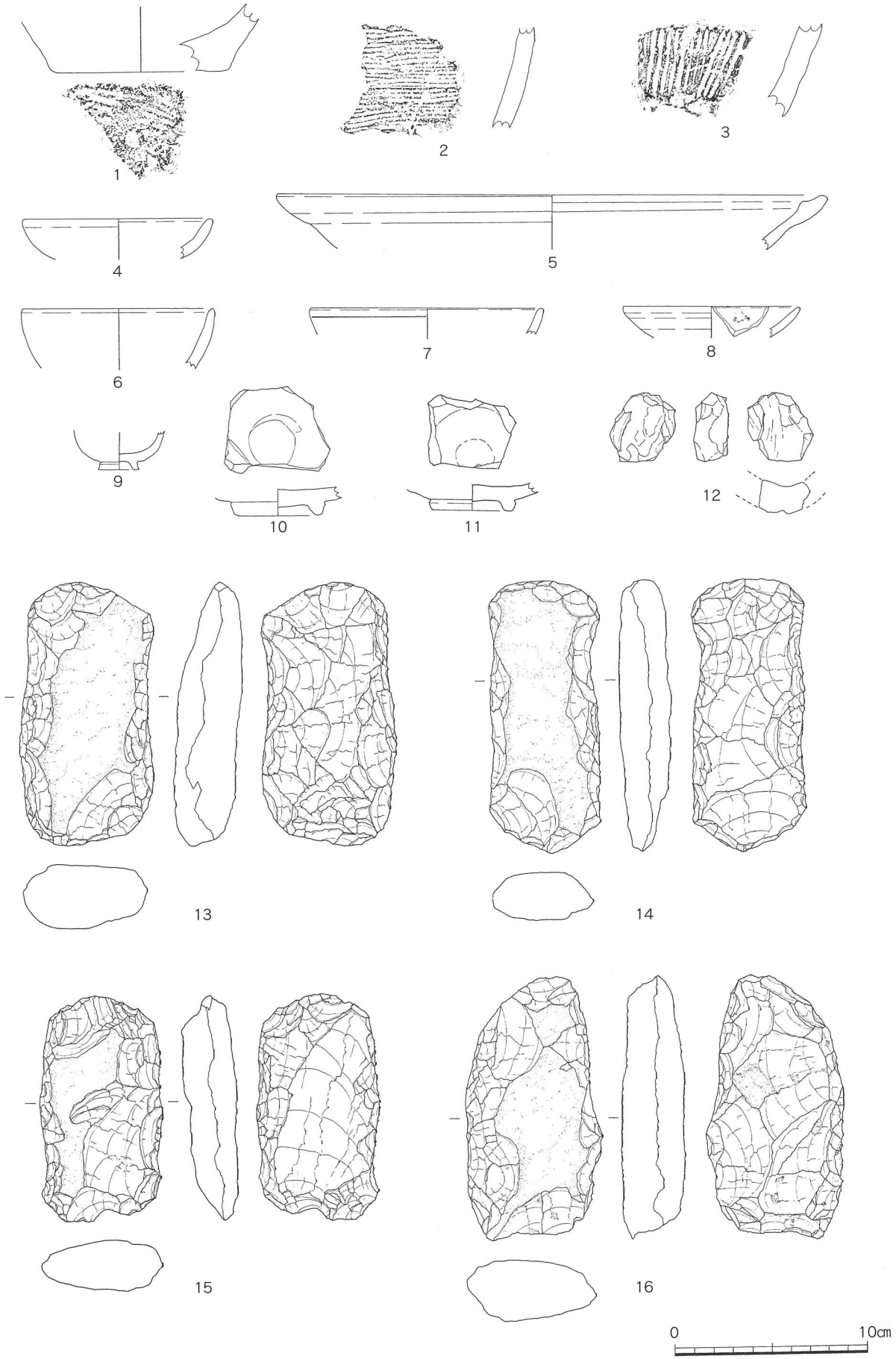
図示できたのは包含層出土遺物のみである。土器については、１と２は縄文土器片で、晩期にあたる。３は珠洲焼擂鉢で、Ⅴ期のものである。５は15世紀後半の瀬戸焼折縁深皿で、内外面とも釉薬は剥げかかっている。６と７は青磁碗で、６は16世紀半ば、７は16世紀前半のものである。８は15世紀前半の白磁台付皿である。10と11は胴緑釉の肥前磁器碗で、底部には蛇の目釉剥ぎが施されている。12はフイゴ羽口の一部で、先端部には鉄釉がみられる。石器は13～24が打製石斧である。13～16は長方形の板状で、幅が基部から刃部まで変わらないものである。（Aタイプ）17～20は基部から刃部へ向かって幅が広がっていくもので、途中でくびれることはない。24は小振りの同タイプである。（Bタイプ）21～23は撥形と呼ばれる基部から刃部に向かって幅が広がり、途中の長軸中程でくびれるものである。（Cタイプ）21の刃部には使用痕の跡がある。25は横刃型石器で、一部で使用痕が認められる。（安 1999）

第３項　まとめ

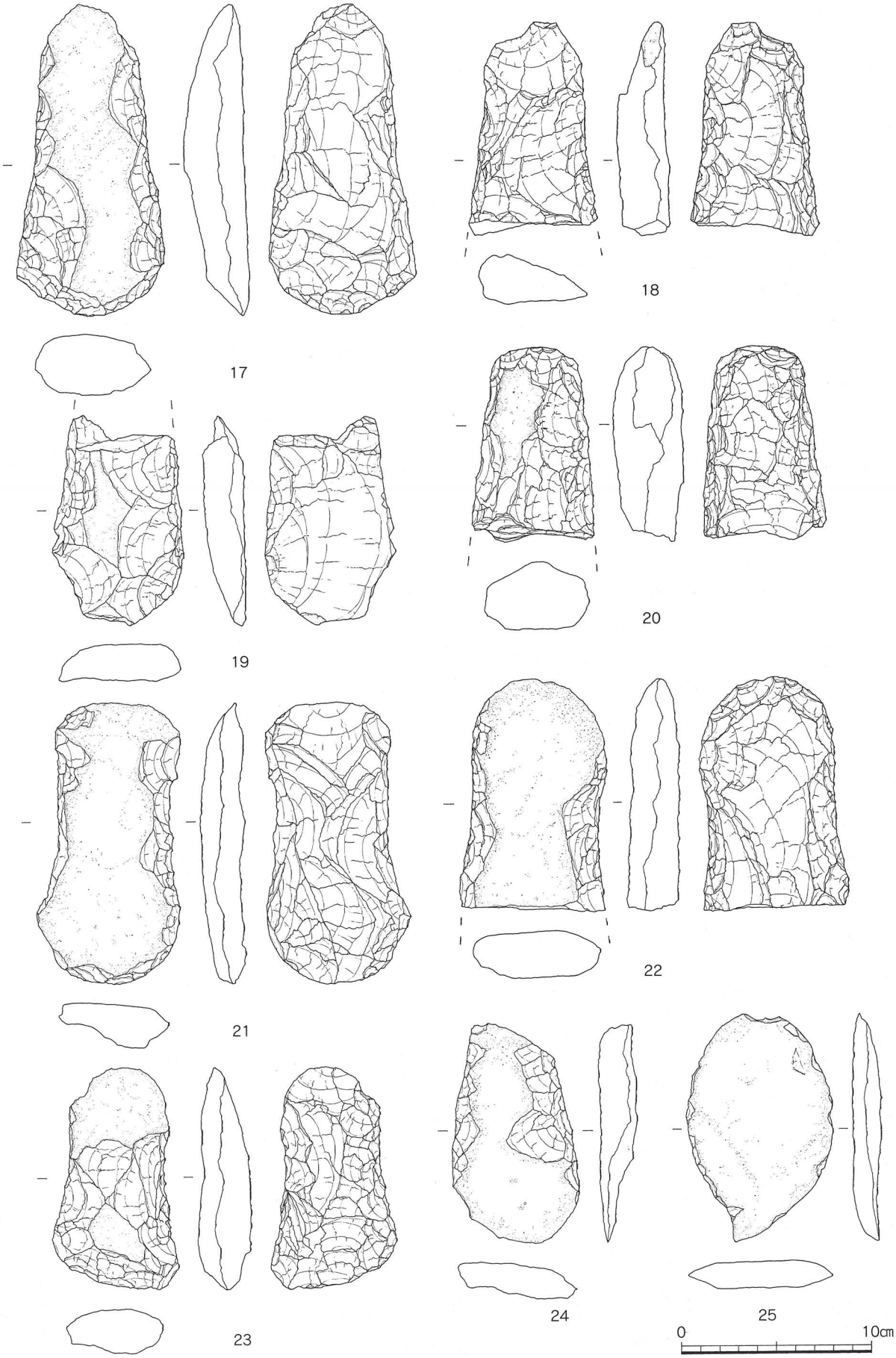
遺構・遺物は全般的に希薄である。ただし、少ないながらも調査区の西半分は、ピット・溝などの遺構や、遺物が集中して出土した。対して、東方は遺構や遺物が極端に少なくなり、辺りは人頭大の石礫が目立つ荒地のような状態となっていた。調査区から北へおよそ50m進んだところには堀を確認した調査区④があり、館のすぐ近くにありながら人為的な手を加わっていない場所が存在することが判明した。



第40図　遺構全体図（S＝1/200）



第41図　土器・陶磁器・土製品・石製品実測図（S＝1/3）



第42図　石製品実測図（S＝1/3）

第８節　調査区⑥（ノダ地区）

第１項　遺構と遺物

富樫館跡ノダ地区の基本層序は、①盛土、②水田耕作土、③暗褐色粘質土、④黄褐色シルト質土、⑤地山である。このなかで、③土は中世の遺物包含層、④は縄文時代後・晩期の遺物包含層であり、遺構の検出は中世期主体の上層と縄文時代後・晩期の下層に分けて行なった。

１　上層（第43図・第46図１～３）

ピット遺構59基と小溝１条を検出した。ピット群には規則性が認められず建物等は不明である。図示遺物を出土した遺構はP01～03で、その大きさは約40×30cmである。１・３は中世の土師器皿である。１は14世紀後半、２は16世紀前半の所産であろう。２は弥生時代後期の壺の胴部である。

２　下層（第44図・第46・47図４～33）

縄文期の遺構は、埋設土器１基、土坑８基（P04～11）を検出し、出土土器は後期中葉酒見式を主体とする。

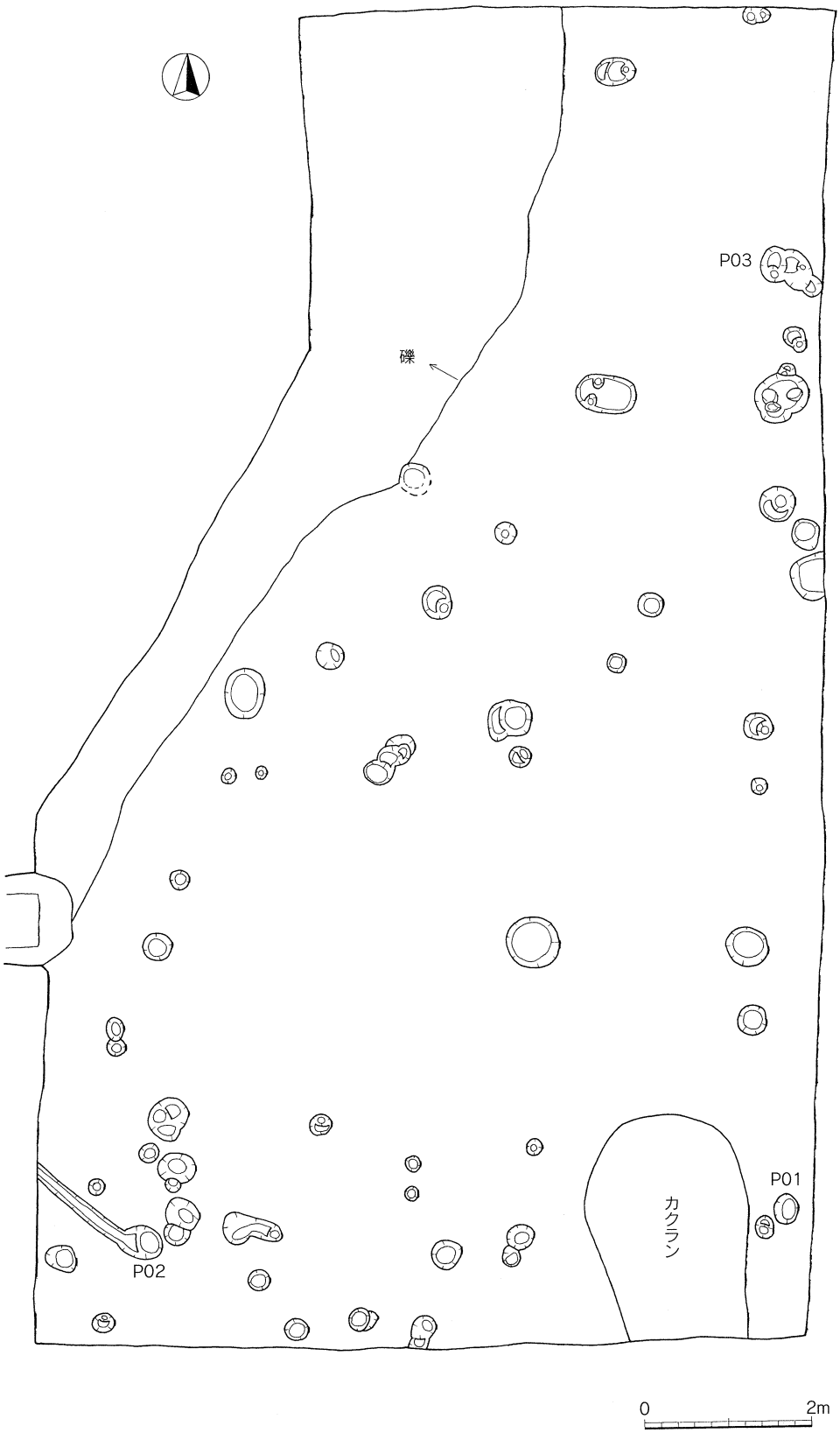
埋設土器１（第45図・第46図４）　調査区の南部に位置し、斜位に埋設された単体の粗製深鉢で両側には自然石が設置されている。口縁部および胴部の約１／２を欠いている。深鉢の外面は縦位の条痕文が施され、底面の網代圧痕は２本組の源体を１本超え１本潜り１本送りとするもので、晩期後半下野～長竹式の所産である。

土坑P04～11（第45図・第46・47図５～24）　P04は楕円形で、規模は190×150cm、深さ50cmを測る。覆土は３層に分かれ中間の層から遺物が出土した。５は深鉢肩部の小片で加曽利Ｂ２～３式の文様をもつ。８は羽状縄文がみられる浅鉢である。刃部を欠く打製石斧９は砂岩製である。土偶10は壊されていたものの１箇所に集中して検出した。乳房部と左半身を欠くが遺存状況は良好で、身長は22.8cmを測る。P05は略円形で、推定規模は径50cm、深さは14cmを測る。上面から11の粗製深鉢底部が出土した。P06はP05と複合するが先後関係や規模は不明である。深さは12cmで、12の浅鉢が出土した。P07は略円形で、径45cm、深さ12cmを測る。上面から不明石器13、敲石14が出土した。13は網掛部が火熱によって変色しており、長さ91mm、幅64mm、厚さ61mm、重さ580gで、石質は凝灰岩である。14は長さ108mm、幅74mm、厚さ51mm、重さ570gで、石質は砂岩である。P08は略円形で、推定規模は径50～55cm、深さ12cmを測る。上面から出土した15の底部には、２本組の源体を１本超え１本潜り１本送りとする網代圧痕がみられる。P09は略円形で、推定規模は100×85cm、深さ５cmを測る。16・17は元住吉山１式に類似するもので、16の深鉢は口縁部２本沈線の上下にLR縄文を施す。17は注口土器の口縁部であろう。18は羽状縄文系の浅鉢である。底部20の網代圧痕は２本超え２本潜り１本送りである。磨石21は長さ115mm、幅90mm、厚さ65mm、重さ948gで、石質は砂岩である。22は板状の石皿で厚さ31mmを測る。P10は略円形で、規模は98×78cm、深さ７cmを測る。23は羽状縄文系の浅鉢である。P11は略円形で、規模は74×65cm、深さ９cmを測る。24は深鉢の突起部で元住吉山１式に類似する。

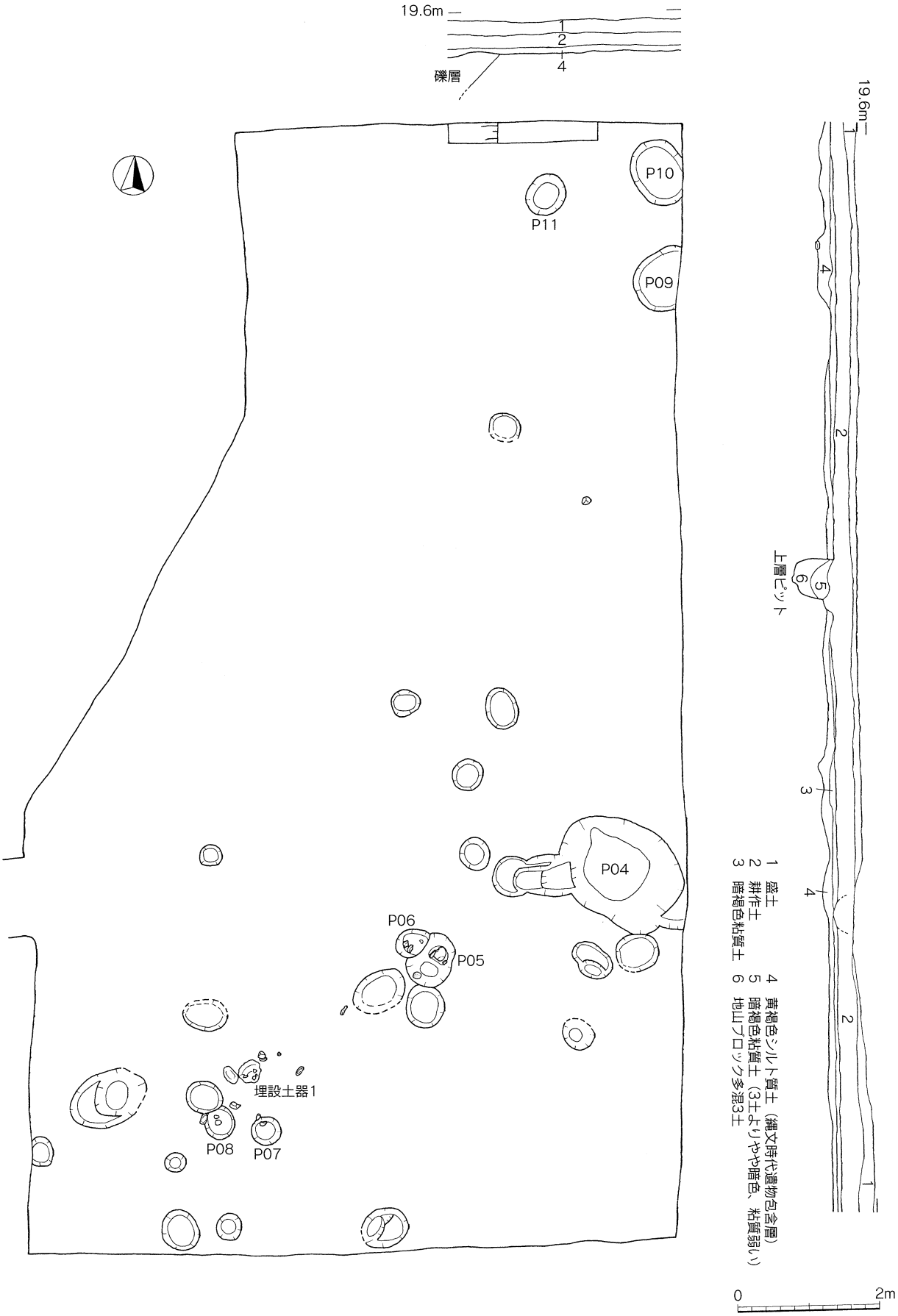
包含層出土遺物（第47図25～31）　25・26は羽状縄文系の浅鉢で、27・28は深鉢である。打製石斧29は長さ158mm、幅70mm、厚さ20mm、重さ239gで、石質は凝灰岩である。敲石30は長さ108mm、幅81mm、厚さ43mm、重さ542gで、石質は砂岩である。31は磨製石斧の基部と考えられ、石質は緑色凝灰岩である。18は石棒の破片で、石質は粘板岩である。石鏃33は長さ27mm、幅24mm、厚さ８mm、重さ９gで、石質は輝石安山岩である。

第２項　まとめ

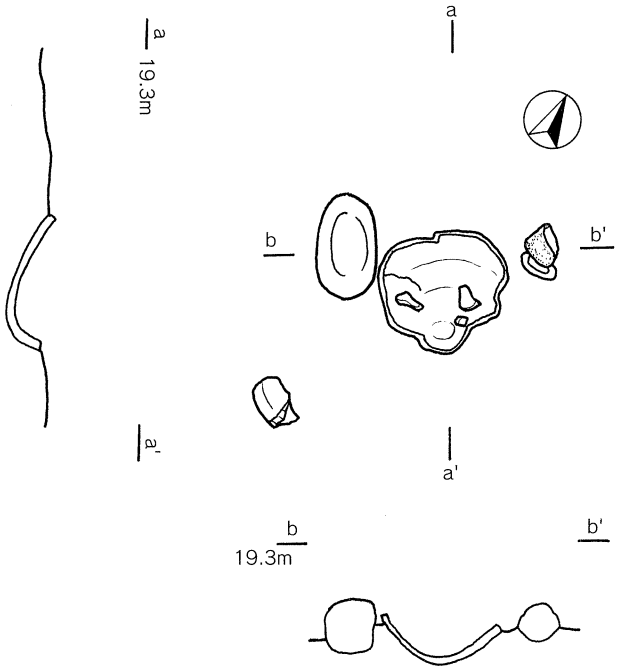
中世期を主体とする上層の状況は不明である。下層の縄文時代は、晩期下野～長竹式期の埋設土器のほかは後期中葉後半の酒見式期を主体とするもので、各土坑は当該期に属する。とくに、土坑P04から出土した土偶は共伴土器から時期が特定されるものであり、またその検出から遺跡は集落跡との推定が可能である。しかし、なにぶん調査面積が小さく遺跡の評価については今後の調査を待つことにしたい。



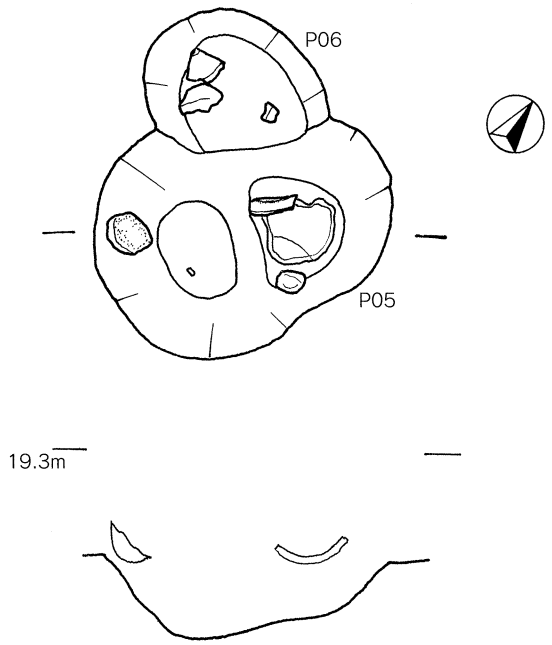
第43図　上層遺構図（S＝1/80）



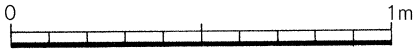
第44図　下層遺構図（S＝1/80）

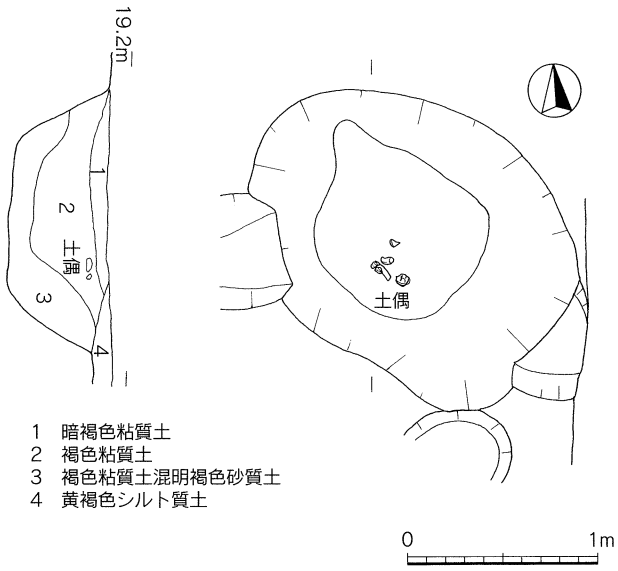


埋設土器1(S=1/20)



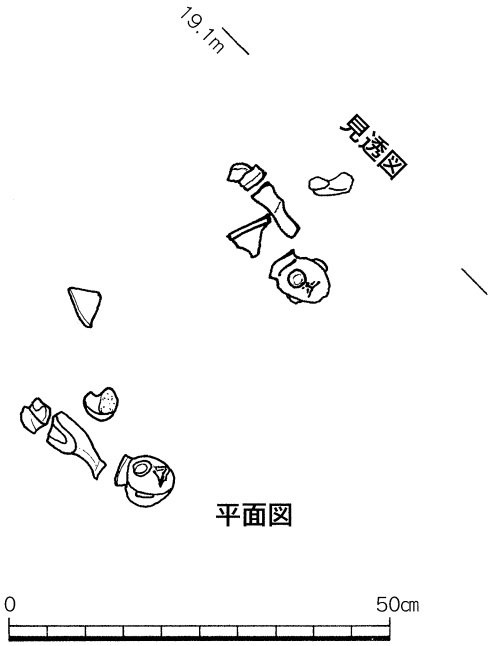
P05・06(S=1/20)





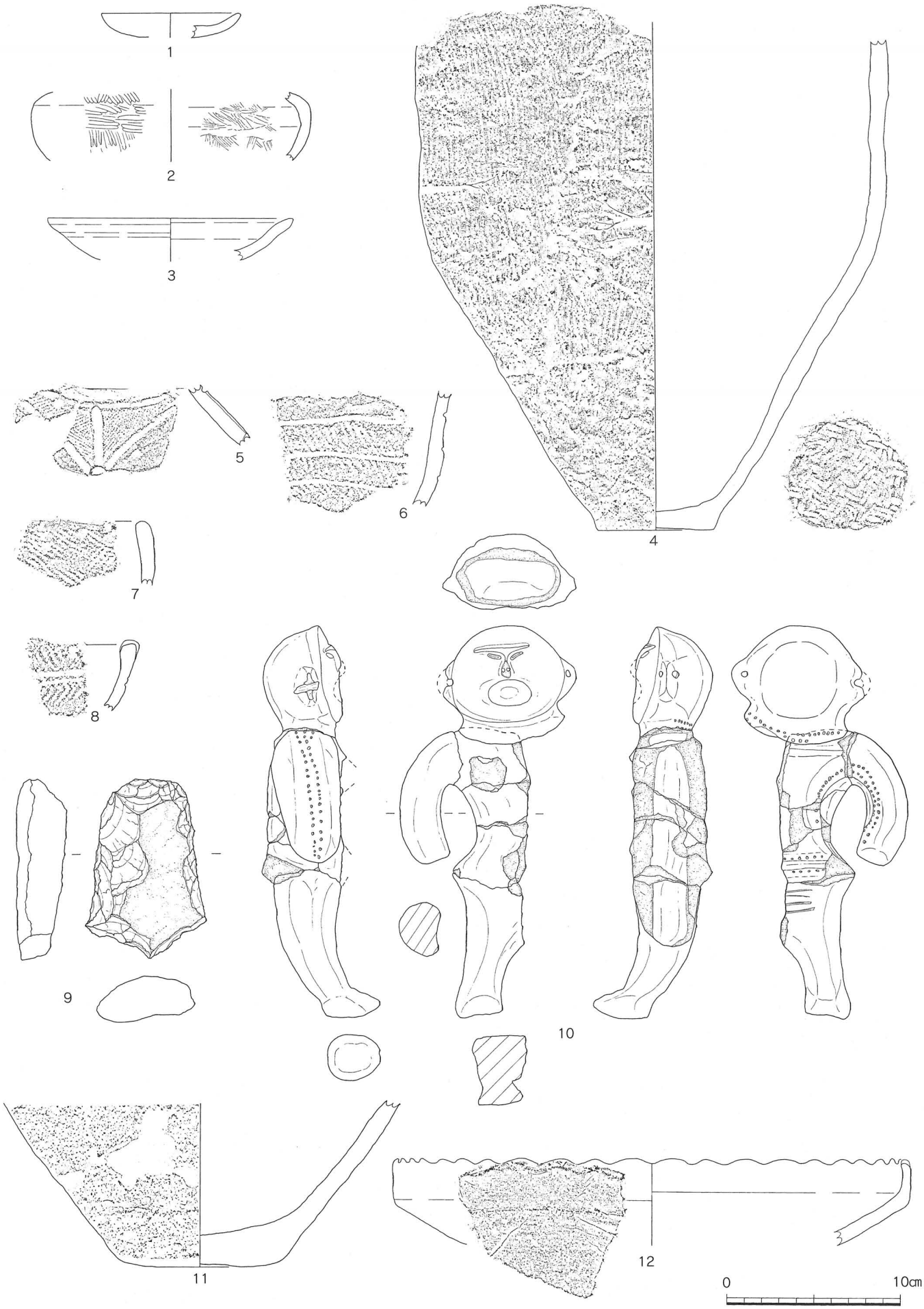
1　暗褐色粘質土
2　褐色粘質土
3　褐色粘質土混明褐色砂質土
4　黄褐色シルト質土

P04(S=1/40)

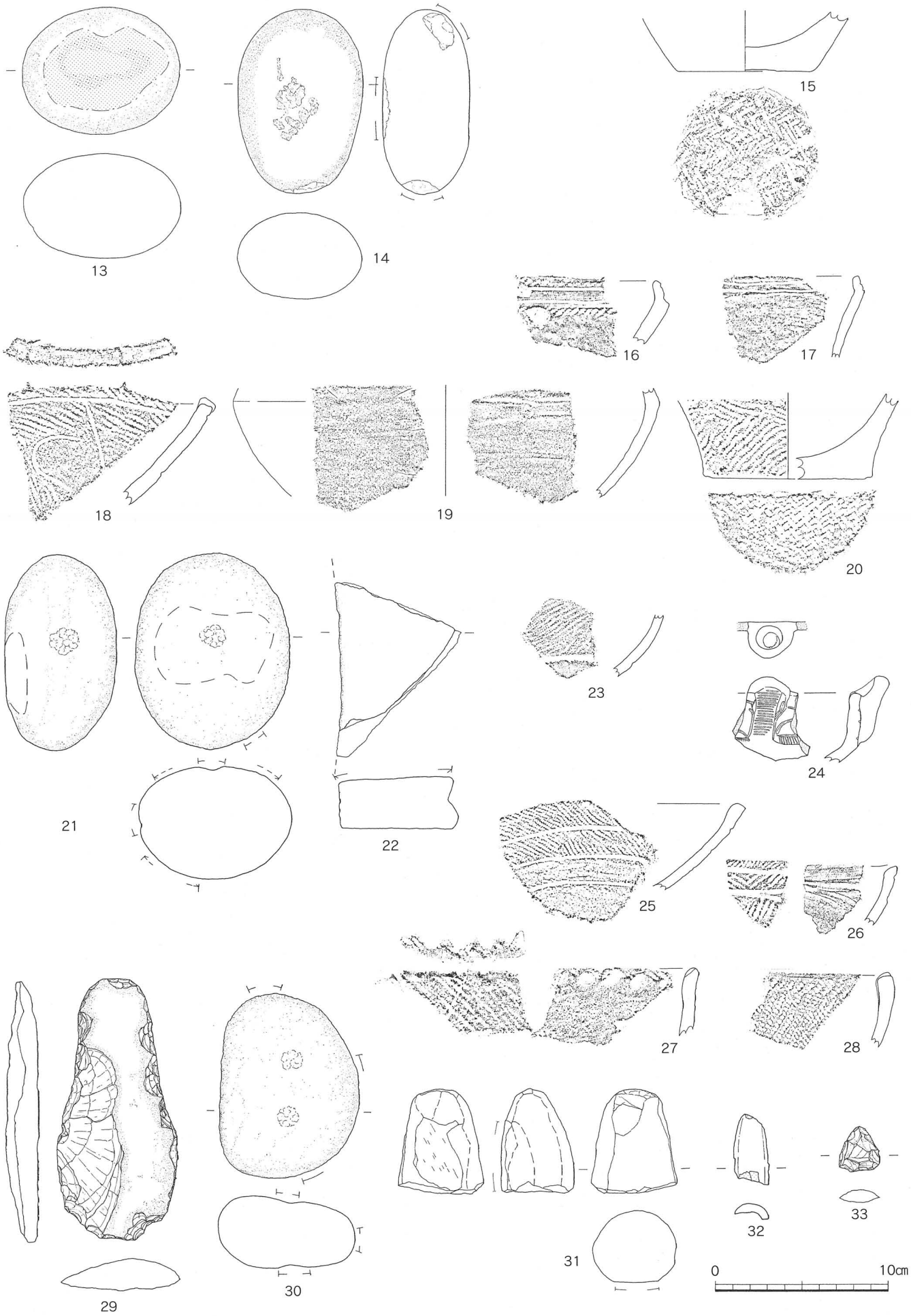


土偶出土状況(S=1/10)

第45図　埋設土器1・P04～06



第46図　土器・土偶・石製品実測図(S＝1/3)
P01(1)・P02(2)・P03(3)・埋設土器1(4)・P04(5～10)・P05(11)・P06(12)



第47図　土器・石製品実測図（S＝1/3）
P07（13・14）・P08（15）・P09（16～22）・P10（23）・P11（24）・包含層（25～33）

第９節　調査区⑦－Ａ（ミヤジ地区）

第１項　遺構

SB１

調査区南東側に位置する建物である。東西３間、南北は調査区外にのびるため不明である。東西ラインの１間幅は西方から190cm、185cm、218cmを測る。柱穴は直径30～50cm、深さ25～45cmの円形である。方向は西へ８°傾く。

SK１

SB１の北東隅に位置し、南北を長辺とする卵形をしている。長辺256cm、短辺242cm、深さ18cmで、北側にはテラスを設けている。テラスの周りには直径25～50cm、深さ約10cmのピットが数基掘られている。遺物は11～19の土師器皿が見つかっている。

SD１

調査区北西隅に位置する。規模は幅が70～150cm、深さ34～42cmで、北東―南西ライン（N67°E）の向きをもつ。南東側には一段下がったテラスがあり、これを除いた溝幅は50～84cmを測る。底の高低差はほとんどなく、覆土に砂質土がみられないことから水の流出はなかったと思われる。遺物は中世土師器皿と人骨が出土した。骨は火葬されたもので、長さ４～５cmの骨片が10数点数える他はすべて細かく砕かれていた。人骨は覆土３及び４の上面からみつかっている。土師器皿は小片で図示はできなかった。

第２項　遺物

１～９は縄文土器である。１と５は御経塚Ｉ式、３と４は外底面に圧痕が認められる深鉢である。10は弥生後期の高杯口縁部で、内面に赤彩が施されている。11～19は中世土師器皿で、11～15は14世紀後半、16～18が15世紀半ば、19は15世紀代のものである。

第３項　まとめ

Ａ区のSD１からは、火葬した人骨の骨片が多く検出された。調査区一帯は通称「御墓」といわれ、また、「ショウダイジ」と呼ばれる寺院があったという伝承が残っており、周囲には寺院に伴う墓地及び三昧場があったかもしれない。本調査区北方一帯にはそれに関連する遺跡が存在する可能性がある。

第10節　調査区⑦－Ｂ（ミヤジ地区）

第１項　遺構

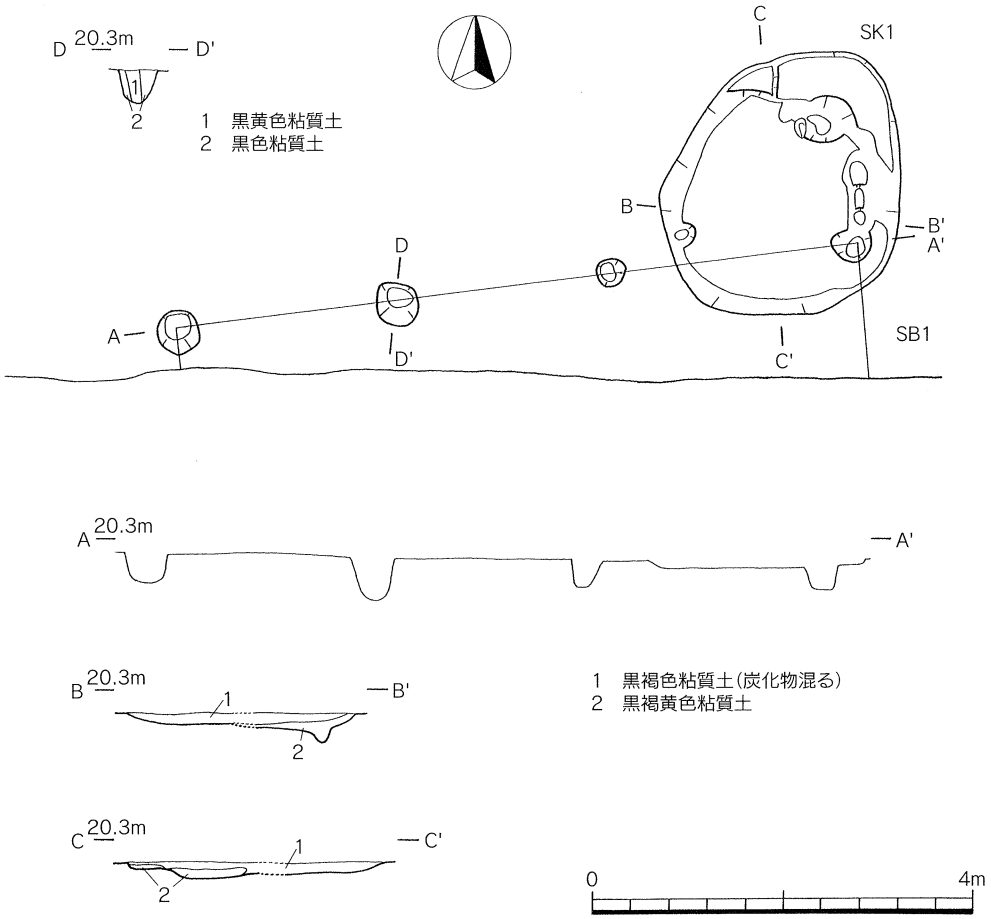
SB２

調査区西側の中央寄りに位置する。南北３間（桁行）、東西１間（梁行）の掘立柱建物で、長さは南北が4.5m、東西が1.4mを測る。桁行の柱間の長さは北から順に150cm、140cm、85cm、165cmで、西側桁行には支柱穴が３基存在する。柱穴の規模は直径20～30cm、深さ15～25cmである。方向は真北にちかい。

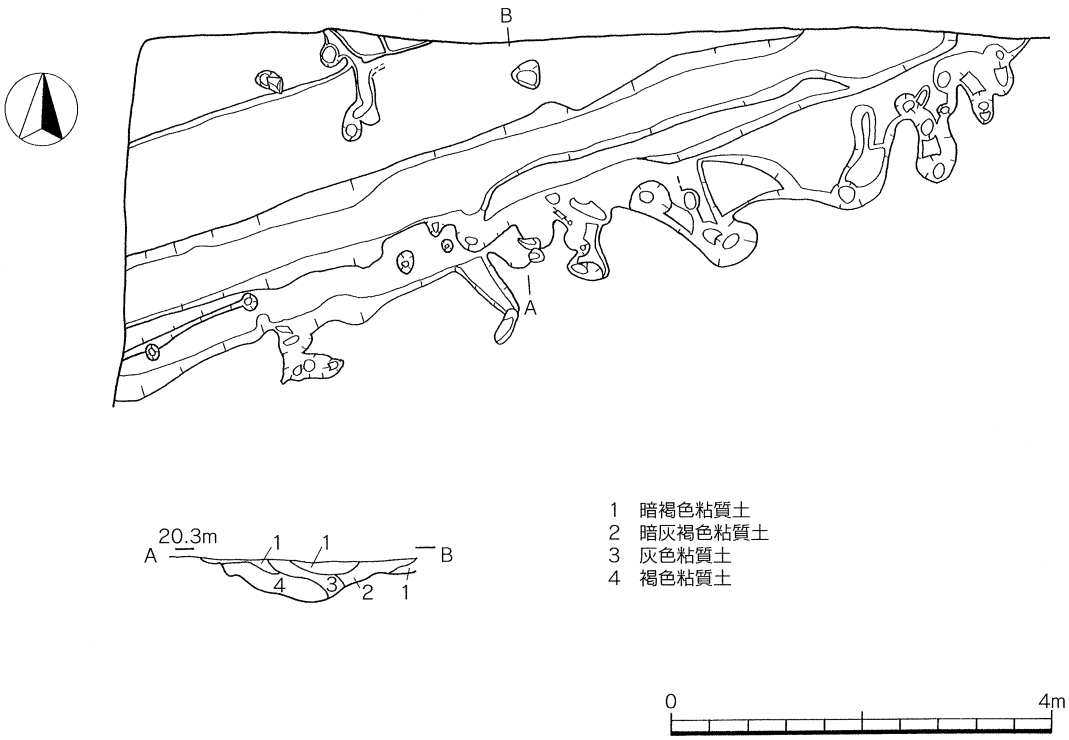
SB３

SB２の南隣にある２間×１間の東西建物である。東西の柱間は東から188cm、205cmで、南北の柱間は315cmを測る。柱穴は直径28～50cm、深さ30cm前後である。方向はN８°Eである。

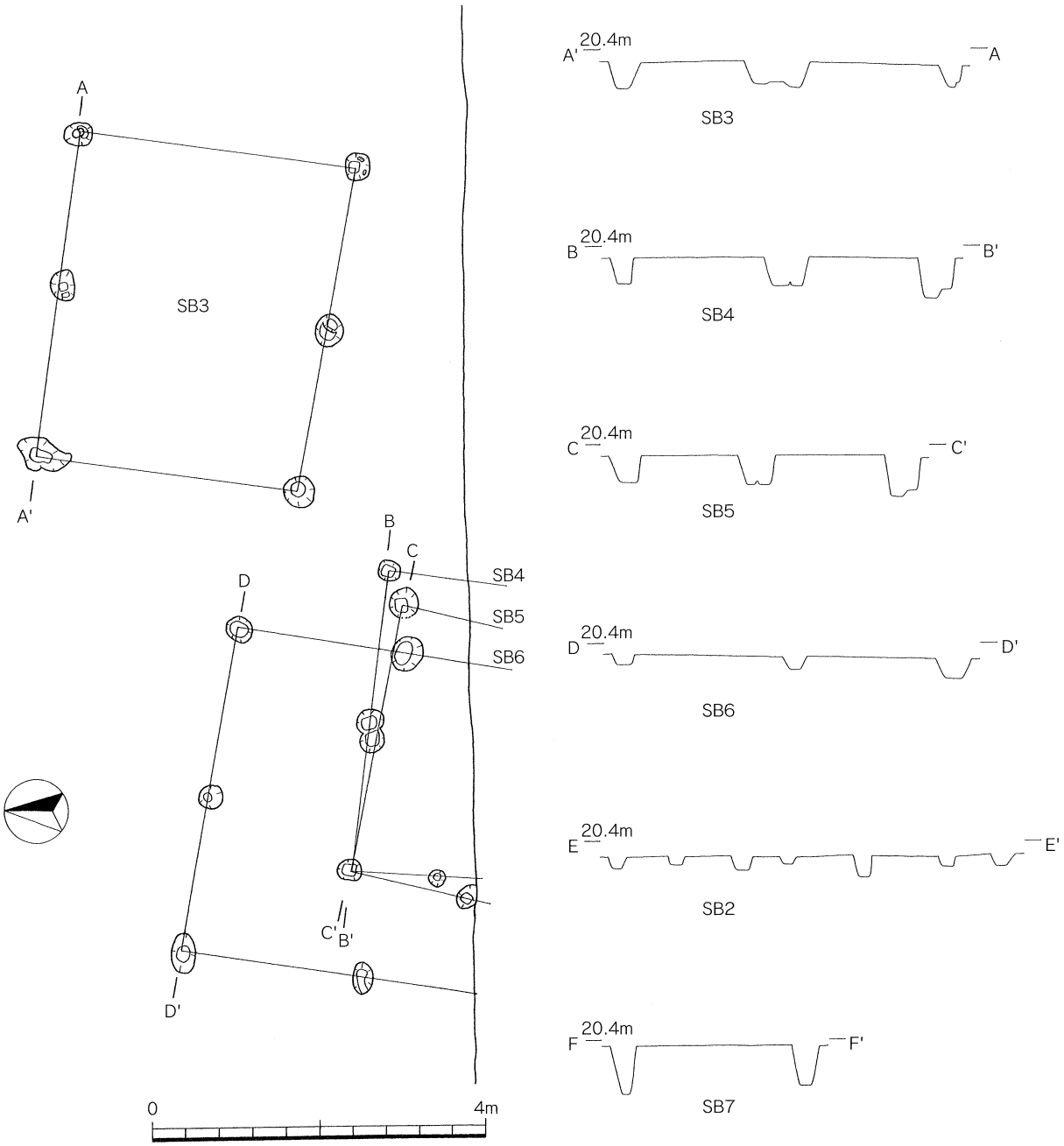
第48図　A、B区　遺構全体図（S＝1/200）



第49図　A区　SB１、SK１実測図（S＝１/80）



第50図　A区　SD１実測図（S＝１/80）



第51図　B区　SB２～SB７実測図（S＝１/80）

SB４

SB３の南西側に位置する。東西２間、南北１間以上で、南側半分は調査区外となり規模はわからない。柱間は東西が東から185、178cm、南北が148cm以上で、南北間の西側柱列には直径20cm、深さ10cmの支柱穴と思われるピット存在する。柱穴は直径25～30cm、深さ30cm前後である。後述するSB５を含めて周辺にはピット群が錯綜することから複数回の建て替えがあったようである。方向はN８°Eである。

SB 5

SB 4 と同じ場所に所在する。東西 2 間、南北 1 間以上の建物で、SB 4 と同様南側部分が調査区外へのびていく。柱間は東西が東から165、165cm、南北が140cm以上で、柱穴は直径が25～30cm、深さが35cm前後を測る。なお、SB 5 の北西隅の柱穴はSB 4 の柱穴と同じ穴になることから、両者の建物はどちらかが建て替えに伴うものとなる。方向はN 9 °Eである。

SB 6

SB 4・5からやや西寄りにある建物である。東西 2 間、南北 2 間以上の規模をもち、柱間は東西が東から206cm、195cm、南北が210cm、140cm以上である。柱穴は形状が円形と楕円形のものがある。直径は30～50cm、深さ16～30cmと他の建物よりは浅い。方向はN11°Eである。

SB 7

調査区西側にある 1 間× 1 間の建物である。柱間は北西―南東ラインが180cm、北東―南西ラインが200cmである。柱穴は直径約30cm、深さ45～55cmを測る。方向はN38°Eである。

畝溝

調査区東側一帯に広がっている。溝は幅が25～30cm、深さ 5 ～10cmで、方向はN10°Wである。溝と溝の間は100～150cmを測る。溝はSB 2 やSB 3 と切り合うが前後関係は不明である。

第 2 項　遺物

B区での中世遺物は土師器皿などを確認しているが図示できるものはなかった。23は天草産の中砥石で、鎌研ぎ用のものである。24と25の打製石斧は同一個体である。タイプは基部から刀部へ幅が広がるもので、凝灰岩質安山岩である。

第 3 項　まとめ

B区は、掘立柱建物が集中する場所が存在する。(SB 2 ～SB 6) 建物の改修を繰り返したと想定され、居住域が限定されていたことを示す。遺物が少ないため、詳細な時期及び性格は確定できない。

第11節　調査区⑦－C（ミヤジ地区）

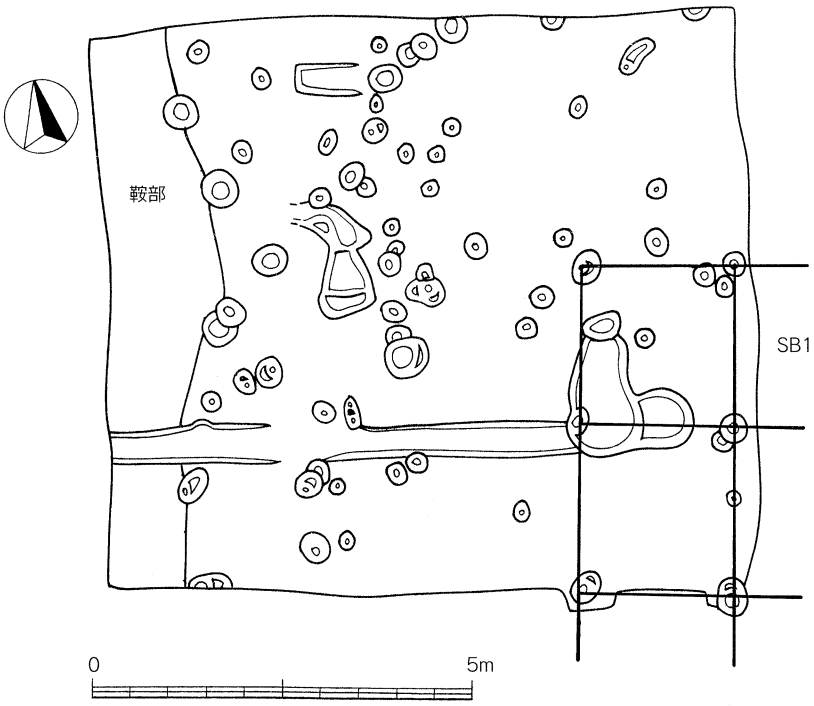
第 1 項　遺構

SB 1

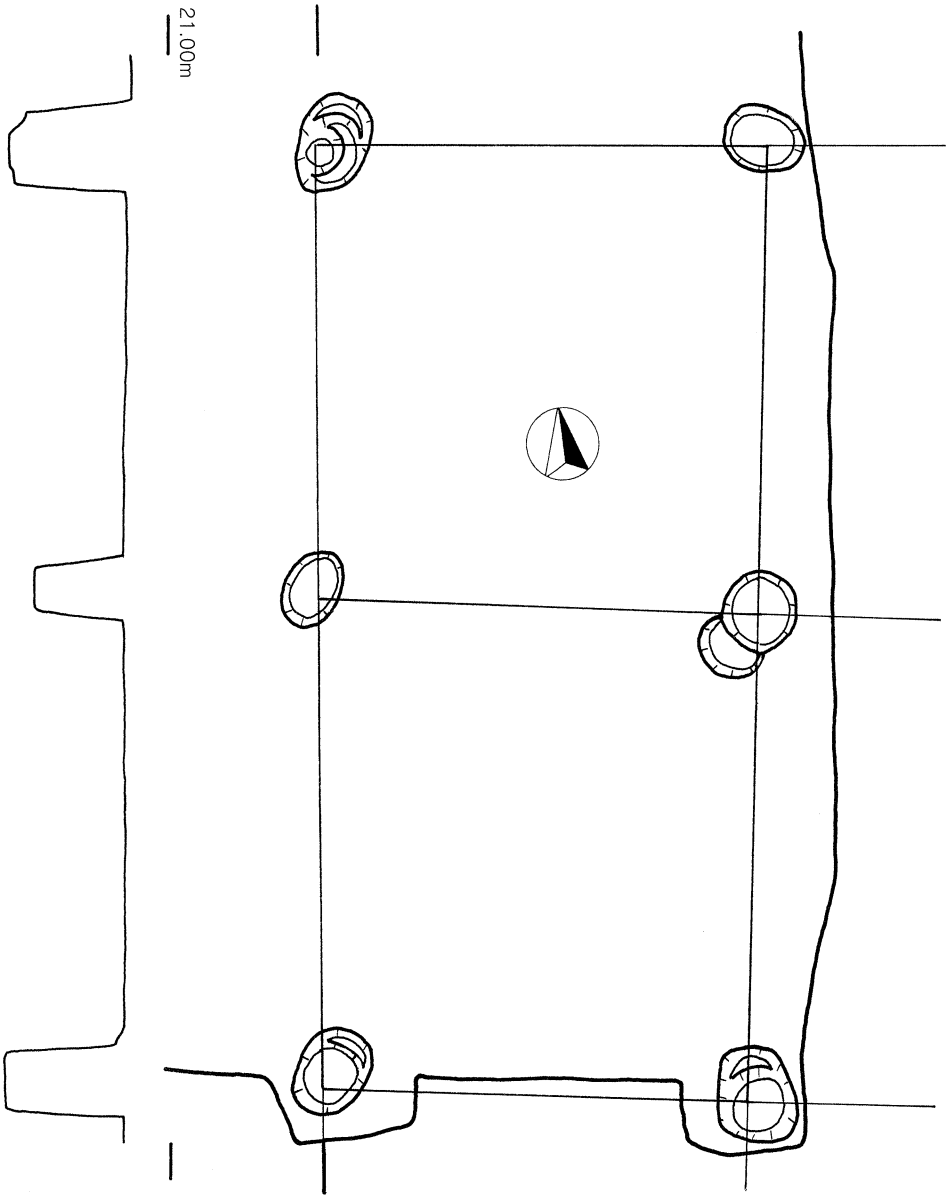
調査区南東隅に位置する。東西 1 間以上、南北 2 間以上の総柱式掘立柱建物である。 1 間の長さは東西が1.86m～2.04m、南北1.9m～2.1mである。柱穴は円形及び楕円形で、直径35～52cm、深さ37cm～63cmの規模をもつ。方向はN14°Eである。

第 2 項　まとめ

調査区⑦－Cは東西10m、南北8.5mの狭い範囲である。調査区の西方には鞍部が南北に走り、標高が次第に低くなる。SB 1 は調査区南東隅に存在し、遺跡の中心は調査区より東方に展開していく。なお、出土遺物は土師器の小片を数点確認した程度で、時期を決定づけるものはみつかっていない。

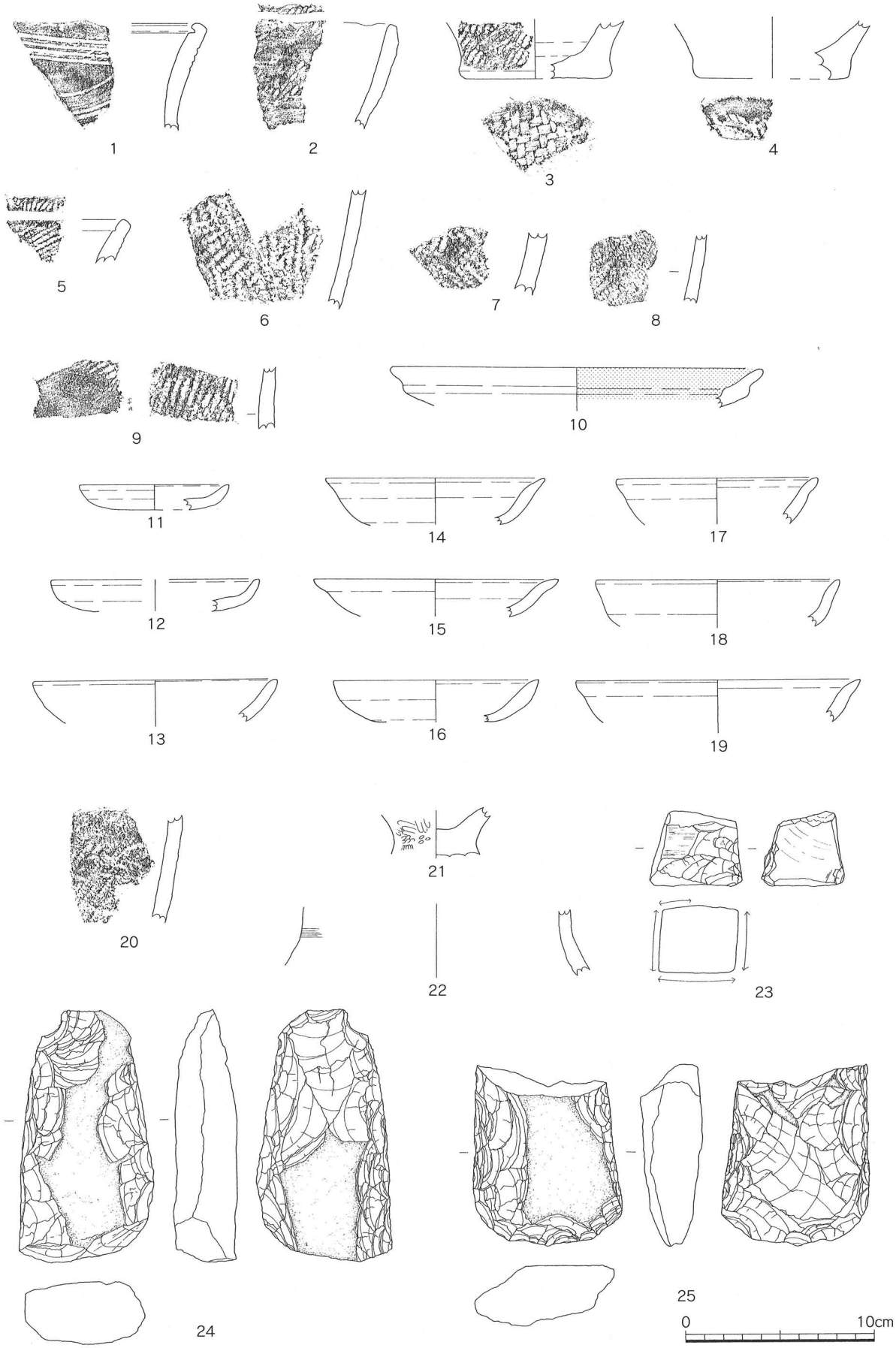


第52図　C区　遺構全体図（S＝1/100）



第53図　SB1実測図（S＝1/40）

0　2m



第54図　土器・石製品実測図（S＝1/3）1～19はA区、20～25はB区

第12節　調査区⑧（アラタ地区）

調査区は東西６m、南北15mの長方形の箇所と、幅１m、長さ23mの東西に長いトレンチが長方形の調査区の北端にとりつく。

第１項　遺構

SB１

調査区の中央からやや北寄りに存在する。北東と南西を桁行とする２間×２間の掘立柱建物である。大きさは桁行が4.1m、梁行が3.1mを測る。桁行の柱間は東側が180cmと130cm、西側が240cmと70cmである。梁行の柱間は西側とも110cm前後である。柱穴は直径35～40cm、深さ30～45cmで、円形が多い。方向は、N30°Eである。

SB２

SB１の東南に位置する掘立柱建物である。建物は調査区外にのび、詳細はわからない。北西―南東ラインが３間、北東―南西ラインが１間以上の規模をもつ。柱間は130～160cmで、等間隔に穴が並ぶ。柱穴は直径20～35cmの円形及び楕円形で、深さは20～40cmを測る。方向は、N25°Wである。

SB３

調査区南側にある掘立柱建物で、東側の一部は調査区外となる。東西が桁行となり２間以上、南北が梁行で２間となる。柱間は、桁行が160～180cm、梁行が120cmと170cmを測る。柱穴は円形が主体で、直径約20cmと約30cmの２タイプ存在する。深さは30～50cm、方向はN17°Wである。

SB４

調査区南端に位置する。東西、南北ともに２間以上の規模をもつ。柱間は東西ラインが150cm前後、南北ラインが90cmと130cmである。柱穴は円形が主体で直径25～30cm、深さ35～52cmである。方向はN22°Wである。

SB５

SB３やSB４の同一場所に位置する。北西―南東ラインが３間以上、北東―南西ラインが２間以上の掘立柱建物で、方向はN21°Eである。北西―南東ラインの柱間はそれぞれ100cm、80cm、140cmで、柱穴間には直径25cm、深さ42cmの支柱穴と思われるピットが存在する。北東―南西ラインの柱間は150cmを測る。柱穴は、直径20cm前後と40cmの２タイプ存在する。深さは33～54cmを測る。

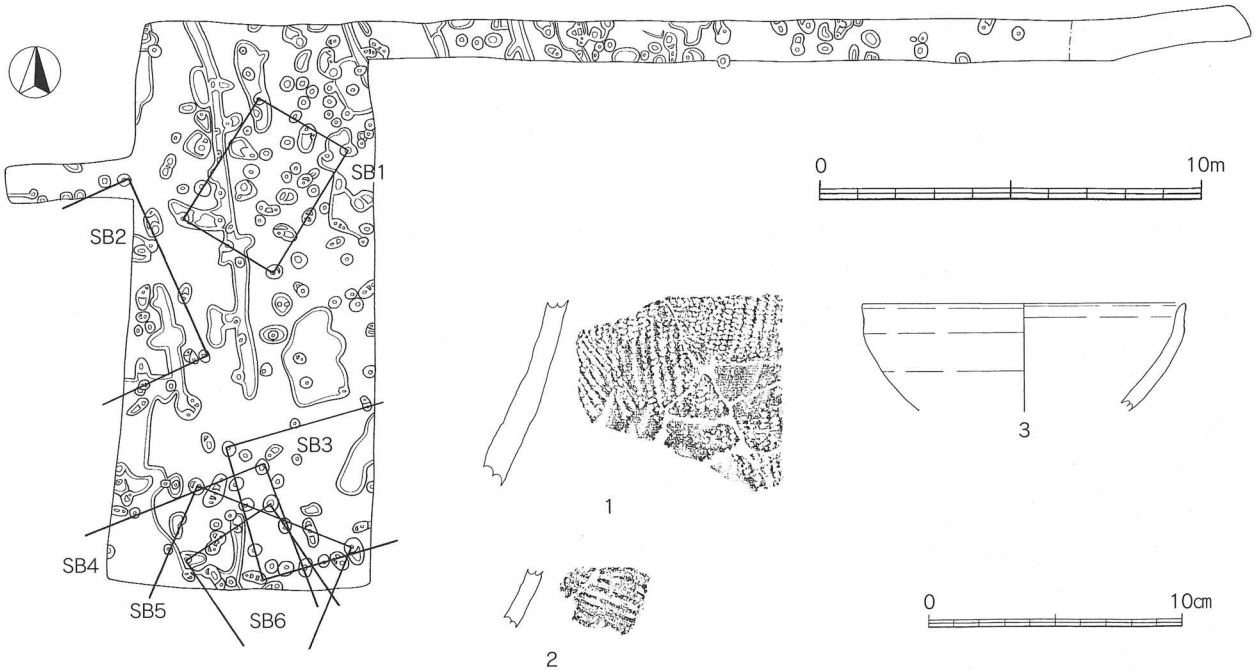
第２項　遺物

出土遺物は極めて少なく、図示できたのは３点のみである。うち２点は縄文土器で、もう１点は古瀬戸後Ⅲ期の瀬戸天目茶碗である。

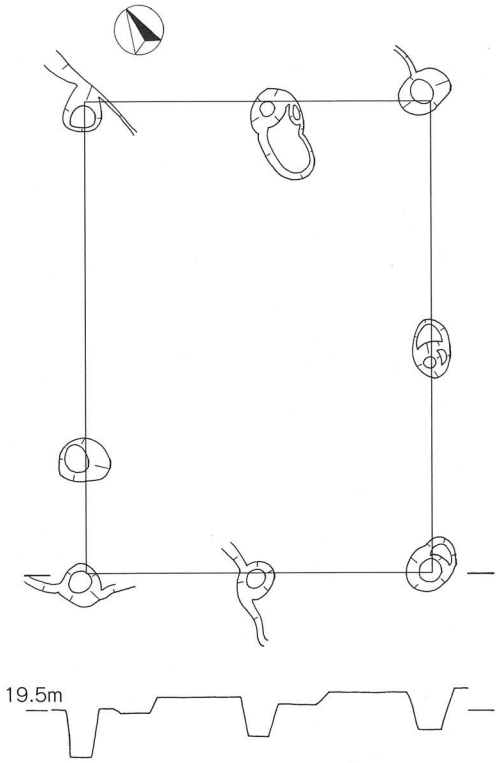
第３項　まとめ

地山面の標高は19mで、調査区より西方へ向かうに従って少しずつ低くなり遺構は希薄となる。調査区中央はピットを中心とした遺構が密集し、掘立柱建物が存在する。調査区東方へは、少しずつ遺構が薄くなり、地山面の土質が石礫に変わっていく。遺跡は調査区中央部に集中するようである。

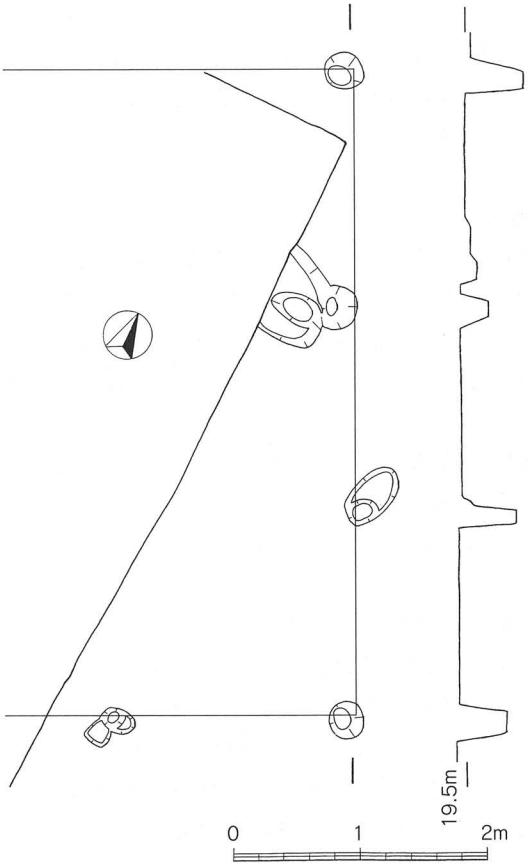
掘立柱建物は調査区より南側に集中する。建物は３間規模の側柱建物が主体と考えられ、SB３～SB６は、方向を異にしながらも同じ場所で建てており、居住域が限定していることを示す。このような特徴は、調査区７（ミヤジ地区）のB区でもみることができる。



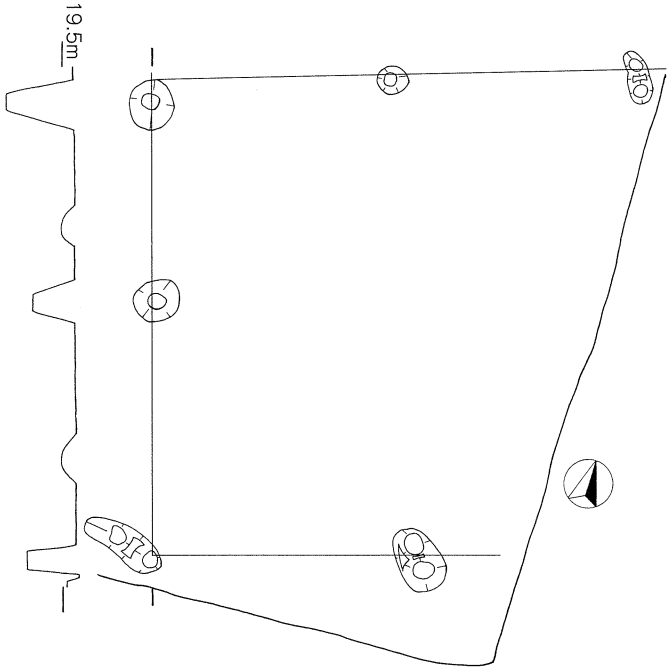
第55図　遺構全体図（S＝1/200）、土器・陶磁器実測図（S＝1/3）



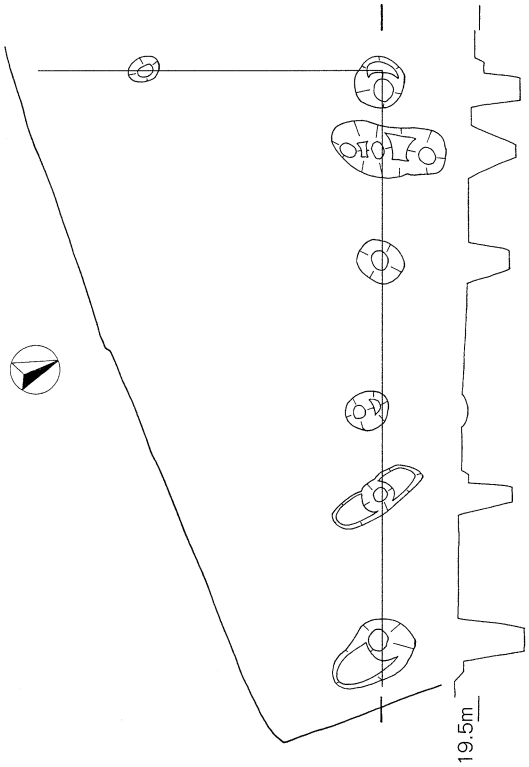
第56図　SB 1 実測図（S＝1/60）



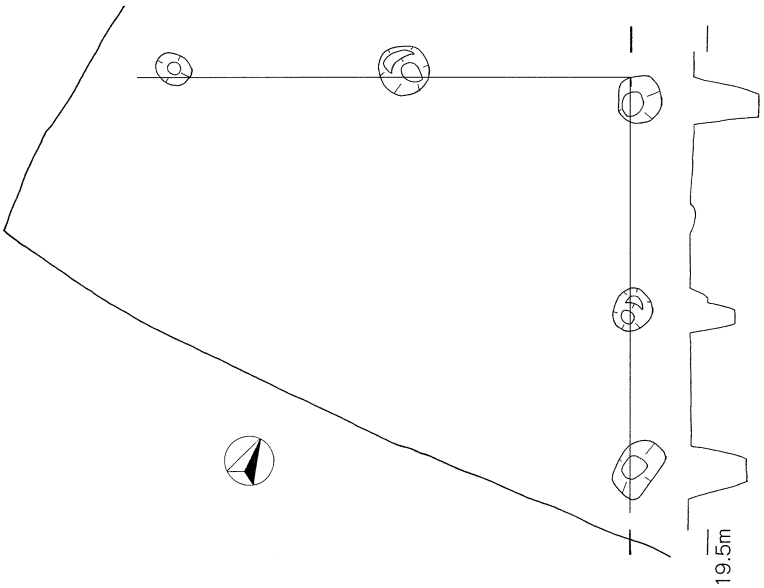
第57図　SB 2 実測図（S＝1/60）



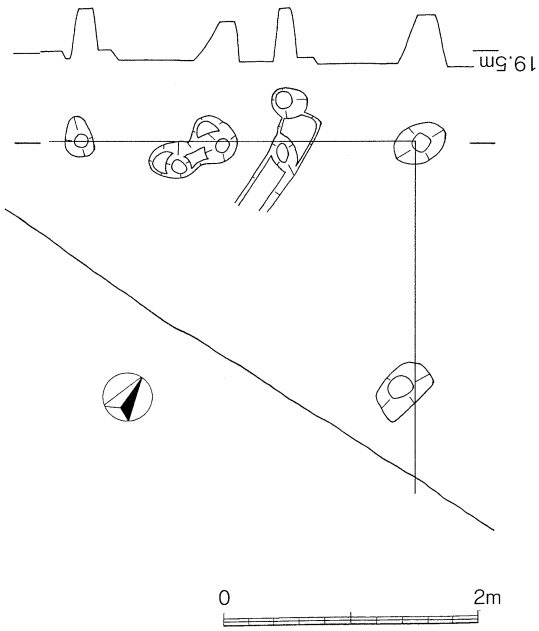
第58図　SB 3 実測図（S＝1/60）



第60図　SB 5 実測図（S＝1/60）



第59図　SB 4 実測図（S＝1/60）



第61図　SB 6 実測図（S＝1/60）

第13節　調査区⑨（山川館跡）

第１項　遺構

SK１

調査区東端に位置する。形状は、長辺119cm、短辺100cmの北東―南西間が長い楕円形である。深さは最深部で42cm、北東側には細長いテラスが存在する。覆土全体には炭粒がみられ、穴の中央部に集中する。中からは土器１～３をはじめとする縄文晩期の土器が10点近く発見された。底からは４個の自然石が並べて置いたような状態でみつかっており、屋外炉の可能性が高い。

SK２

調査区中央より東寄りにある土坑で、何回か掘り直している。土坑中央にSD１が走っていることもあり、詳細な構造は不明である。大きさは北東―南西間が295cm、北西―南東間が310cmで、深さは約40cmを測る。このSK２の北西隅には一辺120cmの正方形をした別の土坑が切り合っている。遺物は土師器皿、珠洲焼擂鉢、越前焼壺、加賀焼甕、瀬戸焼灰釉平碗などの土器・陶磁器や打製石斧12や13が出土している。

SK３

調査区の南側に位置する。規模は直径150～160cmの円形で、深さは16cmである。覆土から土師器片１点が出土している。

SK４

SK２の西隣に存在する南北に長い土坑である。東西約90cm、南北約420cm、深さ約20cmである。遺物は10、11のような珠洲焼擂鉢や越前焼甕などが見受けられるが、覆土は近世以降と思われる灰色粘質土であることから、時期は中世よりも後出すると考えられる。

SD１

調査区北西隅から東へと方向をとり、途中やや南寄りに向きを変えて調査区南東隅へと走る。幅は105cm～115cm、深さ約30～40cmを測る。覆土は黒灰粘質土１層で、溝の底は高低差がなく、目立った水の流出はなかったようである。遺物は７、８の土師器皿、加賀焼甕、瀬戸・美濃の丸碗などがみつかっている。時期は14世紀前半～後半と推される。

SD２

調査区南側を走る溝である。東西ラインより少し南方に傾いており、北西隅で確認したSD１の方向とほぼ同じである。幅は55～60cm、深さは12～45cmで東方に向かって少しずつ低くなっていく。遺物は５の古代の長胴甕の他、縄文土器片が出土している。

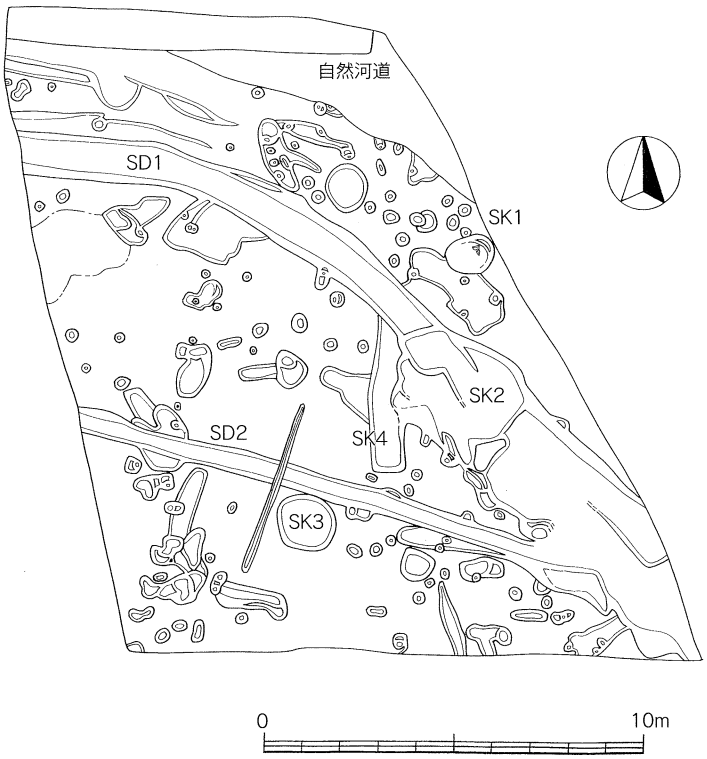
第２項　遺物

１～４は縄文土器で、１～３まではSK１から出土したものである。５はSD２でみつかった長胴甕の体部片で、８世紀末～９世紀初頭に位置付けられる。６は15世紀半ばの瀬戸灰釉平碗の底部である。９は壁面から見つかった坩堝片で、内面に銅釉がみられる。10はⅤ期にあたる珠洲焼擂鉢で、卸目は６条である。

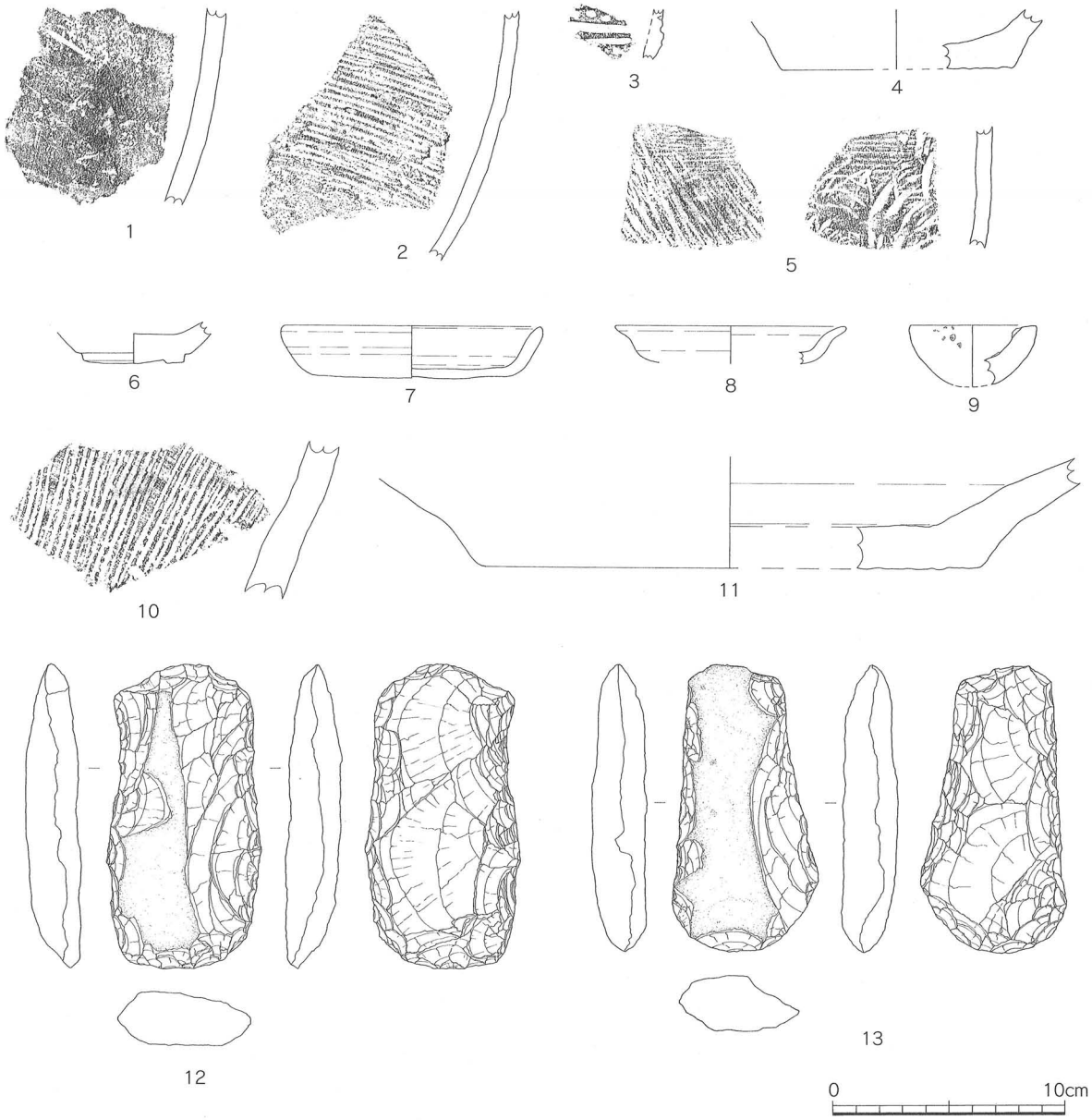
石製品は２点で、いずれも打製石斧である。12は基部から刀部まで幅が変わらないAタイプ、13は基部から刀部に向かって幅が広がるBタイプである。(安1999)

第３項　まとめ

調査区は東西15m、南北17mの台形状をした狭い範囲である。調査区東側は近世以降の河道が走っていたようで、調査区の北東隅ではその一部を検出した。土坑や溝などの時期は古代の遺物も混じるが、主体は縄文晩期と14～15世紀の中世に位置付けられる。調査区周辺は富樫氏の家臣山川三河守の館があったという伝承が残っており、今回の調査で発見された中世の遺構・遺物は館関連施設の可能性をもつことができる。



第62図　遺構全体図（S＝１/200）



第63図　土器・陶磁器・土製品・石製品実測図（S＝1/3）

胎土の細礫は、粒の大きさをS（1㎜以下）、M（1～3㎜）、L（3㎜以上）とし、量を0（ほとんど含まない）、1（少ない）、2（やや多い）、3（多い）で表した。
（　）は推定

調査区①土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備　考	実測番号 ()は調査時の遺構番号等
1	SK3	青磁　碗		7.8		明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	黒色粒S-2、M-1		底部釉剥ぎ取り	2（8T）
2	SK3	青磁　坏	21.0			明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	黒色粒S-1、茶色粒S-1		内面櫛描文	3（8T）
3	SK5	瀬戸美濃碗形鉢	25.2			灰白色/オリーブ黄色 オリーブ黄色	赤色酸化粒S-1、砂礫S-1 黒色粒S-1	内外面ロクロナデ		追8（4D）
4	SK5	瓦質風炉	(27.3)			橙色/にぶい黄橙色/褐灰色 にぶい橙色/橙色/にぶい黄橙色	赤色粒、砂礫S-2、M-1 石英	内外面ロクロナデ	2条の隆帯間に羽状文押捺	2（4D）
5	SK5	珠洲　擂鉢	37.0			灰色 灰色	砂礫S-1、M-1、L-1 黒色粒、石英	内外面ロクロナデ	口頸部内面波状文体部内面おろし目	追7（4D）
6	SK6	土師器　皿	11.2	9.6	1.2	にぶい橙色/褐灰色 にぶい橙色/黄灰色	砂礫S-2、石英	外面ヨコナデ 外面底部ナデ	内面磨耗	21（9T）
7	SD3	土師器　皿	9.8	(6.6)	2.0	にぶい黄橙色/黒色 にぶい黄橙色/黒褐色/黒色	砂礫S-1、石英	内外面ヨコナデ	外面煤付着 底部外面板状圧痕	17（3D）
8	SD3	土師器　皿	(11.4)			にぶい黄橙色/黒色（油煤） にぶい黄橙色/黒色（油煤）	砂礫S-1、M-1、赤色粒	内外面ヨコナデ	内外面に煤付着	14（3D）
9	SD3	青磁　碗				オリーブ灰色/灰白色/明黄褐色 オリーブ灰色/灰白色/明黄褐色	黒色粒S-2			4（3D）
10	SD3	青磁　小型碗	7.8			オリーブ灰色 オリーブ灰色	黒色粒、茶色粒		内面櫛描文	16（3D）
11	SD3	珠洲　擂鉢	32.4			灰色 灰色	砂礫S-2、M-2	内外面ロクロナデ	内面おろし目	6（3D）
12	SD4	白磁　台付皿	8.8			灰白色 灰白色	黒色粒			11（3T）
13	SD4	白磁　台付皿	12.0			灰白色 灰白色	茶色粒			10（3T）
14	SD4	瀬戸灰釉　盤		16.6		灰色/灰白色 黒色	砂礫S-1	内面ロクロナデ　外面ロクロケズリ、底部静止糸切り後ナデ	外面全体に煤付着	15（3T-2）
15	SD4	越前　壷		19.4		暗赤褐色/灰色 暗赤褐色/灰色	砂礫S-2、黒色粒、石英	内面ヨコナデ後ナデ 外面ヨコナデ		8（3T-2）
16	SD4	越前　甕	46.6	42.2	50.2	灰白色/浅黄橙色 灰白色/浅黄橙色	砂礫S-2、M-1、L-1個	内外面ロクロナデ		8（3T-2）
17	SD5	土師器　皿	8.4		1.8	にぶい橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、黒色粒、茶色粒 石英	内外面ヨコナデ	内外面口縁部煤付着	22（5T）
18	SD5	瀬戸美濃　灰釉瓶	11.2	5.6（頚部）		灰オリーブ色 灰オリーブ色/オリーブ黄色	砂礫S-1、M-1	内外面ロクロナデ		1（5T）
19	SD7	白磁　碗	16.0			灰白色 灰白色	黒色粒、茶色粒		外面底部付近露胎	12（6T）
20	SD7	珠洲　擂鉢		12.0		黄灰色/灰白色 黄灰色/灰白色	砂礫S-1、L-1個	内面卸目　外面ロクロナデ、底部静止糸切り	外面に指圧痕残る	9（6T）
21	SD11	土師器　皿	11.0		2.5	にぶい黄橙色/浅黄色 にぶい黄橙色/浅黄色	砂礫S-1、M-1、赤色粒、石英、黒色粒	内外面ヨコナデ		23（10T）
22	SD11	土師器　皿	10.6		2.0	浅黄橙色/にぶい黄橙色 浅黄橙色/にぶい黄橙色	砂礫S-1、赤色粒	内外面ヨコナデ		25（10T）
23	SD11	土師器　皿	8.4	2.0	1.7	灰白色 灰白色/褐灰色	砂礫S-1、赤色粒	内外面ヨコナデ	内面煤付着	24（10T）

24	SD11	越前　甕	(45.4)			灰褐色/にぶい赤褐色 暗赤褐色/にぶい赤褐色	砂礫S-2、M-2	内外面ロクロナデ		1（10T）
25	SD12	土師器　皿	8.2			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、赤色粒	内外面ナデ	内外面煤付着	3（南大溝）
26	不明	白磁　皿	9.0			灰白色 灰白色	黒色粒極少量		口縁部釉剥ぎ	5（不明）
27	包含層	青磁　坏	21.2			灰オリーブ 灰オリーブ	砂礫S-1			5（包含層）
28	包含層	瓦質　火鉢	23.0		9.3	灰色/灰オリーブ色 灰色/灰白色	砂礫S-1、石英微量			追9（包含層）
29	不明	越中瀬戸　皿		5.4		にぶい橙色/にぶい赤褐色 にぶい橙色/にぶい褐色	砂礫S-2、石英、長石粒 黒色粒	内外面ロクロナデ	外面に墨書 底部外面削り出し高台	4（試掘）

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
30	SK6	石臼	(30.4)(径)	8.0(高さ)		1960.0	凝灰岩		7（9T）
31	SD3	炉縁石	11.5	7.2	7.8	394.0	凝灰岩		20（3D）
32	SD3	砥石	5.5	4.2	1.3	29.0	凝灰岩	仕上砥　鳴滝産	13（2T）
33	SD8	砥石	6.3	5.0	4.3	160.0		中砥　備水産か	19（4T）
34	SD11	砥石	3.4	3.7	0.9	18.0		仕上砥　鳴滝産	18（10T）

鉄製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考	実測番号
35	SD11	鉄釘	6.2	1.55	1.10	11.0		追10
36	SD11	鉄釘	4.8	1.1	1.0	4.0		追11

調査区②－A　B土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調内色調外	胎　　土	調　　整	備　　考	実測番号
1	整地層	縄文土器（深鉢）	26.6			にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S-1、石英S-1 赤色酸化粒S-1	内外面ナデ		109
2	整地層	縄文土器（深鉢）				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S-1、M-1、石英少量	内外面ナデ	沈線1本	111
3	整地層	縄文土器				にぶい黄橙色/橙色 にぶい黄橙色	長石粒S-1、M-1 赤色酸化粒S-2	内ナデ 外面縄文	施紋方向　斜位 原体方向　RL	110
4		縄文土器（深鉢）				にぶい黄色 浅黄色	石英S-1、M-1、長石粒S-1、赤色酸化粒S-1	内面ナデ　外面条痕		113
5	整地層	縄文土器（深鉢）				にぶい黄橙 にぶい黄橙	石英微粒、長石粒S-1 赤色酸化粒S-1	内面ナデ　外面条痕		112
6	SE 1	瀬戸　灰釉卸皿	(22.2)			オリーブ黄色/浅黄色 オリーブ黄色/浅黄色	砂礫S-0、茶色粒微量			118
7	SE 1	瀬戸　天目茶碗				褐色/黒色 褐色/黒色	茶色粒S-0			120
8	SE 1	染付　皿	(11.6)			青灰色 明緑色	茶色粒微量、黒色粒微量			119
9	SE 1	白磁　皿		5.6		明赤褐/褐灰/灰白/にぶい黄橙 灰白/明赤褐/褐灰/橙	砂礫S-0、黒色粒微量			117
10	SE 1	白磁　皿		7.0		明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	砂礫微量、黒色粒微量		底部内面に蓮弁文	116
11	SK 1	青磁　碗	12.6			灰オリーブ色 灰オリーブ色	微砂礫少量、黒色粒少量			209
12	SK 2	土師器　皿	8.2			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ヨコナデ		200
13	SK 8	加賀　甕				灰黄褐色 褐灰色		内面ヨコナデ 外面押印		211
14	SK15	瓦質方形火鉢				橙色/にぶい黄褐色 橙色/にぶい黄褐色	砂礫S-1、M-2、石英S-1 赤色酸化粒S-1			169
15	SK15	土師器　皿	8.8			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-0	内外面ナデ		225
16	SK15	土師器　皿	10.0		1.6	にぶい橙色 にぶい橙色	長石粒S-1、M-1 赤色酸化粒S-2	内面ヨコナデ 外面ナデ		233
17	SK15	土師器　皿	10.0		1.5	浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫微量、石英微量、黒色粒S-1、赤色酸化粒微量	内面ヨコナデ 外面ナデ	内外面に油煤付着	227
18	SK15	土師器　皿	12.0		1.8	にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1	内面ナデ 外面ヨコナデ		226
19	SK15	越前　擂鉢	29.4			にぶい褐色 にぶい褐色	長石粒M-1、L-2 赤色酸化粒M-1	内外面ロクロナデ		224
20	SK15	越前　擂鉢				橙色 橙色	長石粒M-2、L-1	内外面ロクロナデ	表面剥離	223
21	SK15	瀬戸美濃 鉄釉小型壷				明黄褐色	長石粒微量、石英微量 黒色粒S-1		底部糸切り痕	220
22	SK15	青磁　盤		11.5		オリーブ灰色/灰白色 灰白色	砂礫S-1			210
23	SK15	白磁　碗	16.0			灰オリーブ色 灰オリーブ色	長石粒微量		口禿げ	221

24	SK15	白磁　皿	10.8			灰白色	長石粒微量		外部底部付近釉剥ぎ	219
25	SK21	土師器　皿	14.1	2.5	8.2	にぶい黄橙色/浅黄橙色 にぶい黄橙色/浅黄橙色	砂礫S-1、M-1、L-1、赤色粒	内外面ヨコナデ、ナデ		A
26	SK21	土師器　皿	16.2		2.0	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、M-1、L-1、赤色粒 長石粒	内外面ヨコナデ、ナデ		207
27	SK23	土師器　皿	(9.0)			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫、赤色酸化粒、黒色粒、 長石粒少量	内外面ヨコナデ	外面口縁部に煤付着	130
28	SK23	越前　甕		(23.0)		にぶい橙色 橙色	砂礫S-1、M-1、長石粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ		114
29	SK23	珠洲　甕		10.0		オリーブ黒色 灰色	砂礫S-0	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	海綿骨針含む、内面に二次的被熱受ける	128
30	SK23	珠洲　擂鉢		13.8		灰色 灰色	砂礫S-2、M-2、L-0	内面ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	底部に大きい礫	129
31	SK23	瀬戸　灰釉小壷		5.0		灰オリーブ色 灰オリーブ色/灰黄色	茶色粒微量		底部糸切り痕	126
32	SK23	瀬戸　灰釉行平	13.1	13.0		オリーブ黄色/浅黄色 オリーブ黄色/浅黄色			片口あり	127
33	SK23	瀬戸美濃 鉄釉花瓶				灰オリーブ/オリーブ黄/褐灰色 暗オリーブ褐色/黄褐色/暗灰黄色	砂礫S-2			追
34	SK23	信楽　壷		14.4		にぶい赤褐色 褐灰色/灰褐色	砂礫S-1、M-1、黒色粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	内面に自然釉付着	115
35	SD 1	土師器　皿	10.5			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-0	内外面ヨコナデ		194
36	SD 1	瀬戸美濃 灰釉平椀	16.0			浅黄色 浅黄色	砂礫S-0、黒色粒微量			196
37	SD 1	瀬戸　灰釉花瓶				灰オリーブ/オリーブ黄/灰黄色 オリーブ黄色	砂礫S-0、黒色		頸部と胴部の接合痕が見られる	195
38	SD 3	染付　皿	11.4			明オリーブ灰色/暗青灰色 明オリーブ灰色/暗青灰色	黒色粒、茶色粒		中国製	189
39	SD 4	土師器　皿	11.5			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-0、長石粒、黒色粒 赤色粒	内外面ヨコナデ		199
40	SD 5	土師器　皿	8.7			にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ヨコナデ	油煤付着	183
41	SD 5	土師器　皿	10.4			橙色 橙色	砂礫S-1、長石粒 赤色粒中量		内外面全体に磨耗	193
42	SD 5	土師器　皿	11.3			にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、黒色粒、赤色粒	内外面ヨコナデ		192
43	SD10	土師器　皿	(13.0)		17.0	にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、石英、黒色粒 赤色粒	内外面ヨコナデ	外面磨耗	202
44	SD10	土師器　皿	12.6		1.4	橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、長石粒、黒色粒 赤色粒			204
45	SD12	土師器　皿	7.2	(3.0)	(1.9)	にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、黒色粒	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ、ナデ	内面油煤付着	201
46	SD12	土師器　皿	10.4			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、黒色粒、赤色粒	内外面ヨコナデ	内外面油煤付着	205
47	SD12	土師器　皿	10.0	4.8	1.8	にぶい橙色/褐灰色 にぶい橙色/明褐灰色	砂礫S-1、石英	内外面ヨコナデ		187
48	SD12	土師器　皿	11.6			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫、長石粒、黒色粒 赤色粒			206

49	SD12	土師器　皿	11.6	5.2	1.5	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ナデ	内外面に油煤付着	186
50	SD12	土師器　皿	14.2		1.5	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ヨコナデ		203
51	SD12	土師器　皿	15.0			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、赤色粒	磨耗著しく不明		188
52	SD12	加賀　壷		9.8		にぶい橙色 にぶい褐色	砂礫S-1、M-1、黒色粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、糸切り痕	内外面自然釉付着	190
53	SD12	産地不明　鉢		19.8		オリーブ黄色 にぶい褐色/灰オリーブ色	砂礫S-2、長石粒、黒色粒	内面ロクロナデ、ナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	外面に押印 産地不明	191
54	SD12	青磁　碗	(14.2)			灰オリーブ色 灰オリーブ色	砂礫微粒子			154
55	SD12	白磁　皿		3.4		灰白色 灰白色	茶色粒微粒子		輪状高台 高台裏に墨痕(解読不可)	155
56	SD12	白磁　皿		3.4		灰白色 灰白色	黒色粒微粒子		輪状高台	156
57	SD22	珠洲　壷				灰色 灰色	砂礫S-1、M-1	内面ナデ 外面斜格子文		121
58	SD22	瀬戸美濃 天目茶碗	(12.0)			にぶい赤褐色(黒褐色交じり) にぶい赤褐色(黒褐色交じり)	黒色粒微粒子			149
59	SD22	青磁　碗	(13.6)			暗オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	砂礫微粒子少量		玉縁	150
60	SD26	土師器　皿	(10.6)			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-0、黒色粒S-0	内外面ヨコナデ		152
61	SD26	瀬戸美濃 灰釉平碗	(14.6)			にぶい黄色 にぶい黄色	砂礫微量、黒色粒微量 茶色粒微量			153
62	SD27	瀬戸美濃 灰釉平碗		5.2		浅黄色 オリーブ黄色	砂礫微量、黒色粒微量		露胎	158
63	SD27	珠洲　擂鉢	(34.0)			灰色 灰色	砂礫S-1、長石粒	内面ロクロナデ、波状文 外面ロクロナデ		157
64	SD26	瓦質　火鉢	28.4			灰色 灰色	砂礫細砂粒-3、S-1 長石粒、黒色粒	内面ナデ 外面隆帯2条		165
65	SD26	白磁　皿	11.6			灰白色 灰白色	黒色粒微粒子少量		露胎	123
66	SD29	珠洲　擂鉢	(35.4)			暗青灰色 青灰色	砂礫S-2、黒色粒、海綿骨針	内面波状文、卸目 外面ロクロナデ	内面に自然釉付着	159
67	SD29	瀬戸美濃 天目茶碗		4.0		黒色/褐色 暗赤灰色	砂礫S-1、長石粒M-0 黒色粒微量		胎土色浅黄橙色	160
68	SD29	白磁　皿		3.5		灰白色 灰白色/灰色	黒色粒少量		胎土色灰白色、灰白釉、高台無釉	162
69	SD29	瀬戸美濃 天目茶碗	(12.4)			極暗褐色/暗褐色/褐色 極暗褐色/暗褐色/褐色	砂礫S-1、黒色粒微量		胎土色浅黄橙色	161
70		土師器　皿	11.2			橙色 橙色	砂礫S-1、黒色粒、茶色粒	内外面ヨコナデ		208
71	SX 5	土師器　皿	7.0	3.9	1.5	にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ヨコナデ		184
72	SX 5	土師器　皿	11.2		(1.7)	橙色 橙色	砂礫S-1、黒色粒、茶色粒	内外面ヨコナデ	京都系	185
73	SX 9	土師器　皿	11.4			にぶい橙色 橙色	砂礫S-1、長石粒中量 角閃石少量、赤色粒中量	内外面ヨコナデ		122

74		土師器　皿				浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S－1	内外面ヨコナデ	内外面油煤付着 外面に指圧痕	4
75		土師器　皿	10.6		1.7	灰白色 灰白色	長石粒S-1、石英微量 赤色酸化粒	内外面ナデ	外面に炭化物付着	92
76		土師器　皿	8.2		1.5	にぶい橙色 にぶい橙色	長石粒S-1、M-1 赤色酸化粒M-1	内外面ヨコナデ	口縁外面ナデ痕強く残る	88
77		土師器　皿	14.8		(1.8)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒少量 赤色酸化粒少量	内外面ヨコナデ		89
78		土師器　皿	7.4			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、石英微量	内面ヨコナデ 外面ナデ		212・214
79		土師器　皿	7.4			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、石英微量	内外面ナデ		218
80		土師器　皿	7.4		(1.7)	橙色 橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒S-1	内外面ヨコナデ	口縁外面ナデ痕強く残る	95
81		土師器　皿	9.6		(1.5)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石英微量、長石粒S-1	内外面ヨコナデ		107
82		土師器　皿	6.0	2.0	1.5	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S-1	内外面ヨコナデ	底部外面調整ナデ 口縁内外面油煤付着	98
83		土師器　皿	8.0	6.0	1.0	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒少量 赤色酸化粒少量	内外面ヨコナデ	外面口縁部に煤付着	99
84		土師器　皿				灰白色 灰白色	砂礫微量、赤色酸化粒S-1	内外面ヨコナデ	口縁内外面油煤付着	6
85		土師器　皿	8.8			浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒S-1	内外面ナデ	口縁内面煤付着	97
86		土師器　皿	8.4		(1.5)	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内外面ヨコナデ	口縁内外面煤付着	100
87		土師器　皿	8.8		(1.5)	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内面ヨコナデ 外面ナデ	表面部分的に剥離	105
88		土師器　皿	7.6			浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒S-1	内面ナデ 外面ヨコナデ	口縁内外面炭化物、煤（タール状）付着	136
89		土師器　皿	7.8			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫微量、赤色酸化粒微量	内外面ナデ	口縁内外面油煤付着	213
90		土師器　皿	8.8			浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内外面ナデ	口縁内外面炭化物、煤付着	101
91		土師器　皿	9.0		1.6	橙色 橙色	砂礫微量、赤色酸化粒微量	内外面ナデ	口縁内外面煤付着	追1
92		土師器　皿	10.0			浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内外面ヨコナデ	全体に磨耗	90
93		土師器　皿	10.8		(1.2)	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内外面ナデ	内外面炭化物、煤付着	103
94		土師器　皿	9.4		1.3	灰白色 灰白色		内外面ロクロナデ	口縁内外面油煤付着	追3
95		土師器　皿	10.0	4.2	2.1	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒微量	内外面ヨコナデ	底部外面調整ナデ、京都系、口縁内外面に煤付着	86
96		土師器　皿	11.0	4.0	1.3	にぶい黄橙色 明黄褐色	長石微粒少量	内面ヨコナデ 外面ナデ	京都系か	87
97		土師器　皿	11.6		1.3	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内外面ナデ		217
98		土師器　皿	12.0		2.0	橙色 橙色	砂礫微量	内外面ナデ	全体に磨耗	215

99		土師器　皿	13.8		1.7	にぶい黄橙色 橙色	長石粒S－1	内外面ヨコナデ	口縁外面ナデ痕強く残る	93
100		土師器　皿	12.8		(1.2)	にぶい橙色 にぶい橙色	長石粒S－1、赤色酸化粒S－1 角閃石S－1	内外面ヨコナデ		106
101		土師器　皿			(1.0)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S－1	内面ヨコナデ 外面ナデ	口縁外面ナデ痕強く残る	91
102		土師器　皿	13.4		1.8	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫微量、赤色酸化粒微量	内外面ロクロナデ	口縁内面ナデ痕強く残る	追2
103		土師器　皿	13.8		(1.6)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S－1	内外面ロクロナデ		94
104		土師器　皿	13.8			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫微量	内外面ロクロナデ	表面磨耗	追5
105		土師器　皿	16.0		(1.6)	浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S－1、石英微量 赤色酸化粒微量	内外面ナデ	口縁外面煤付着	102
106		珠洲　甕	頸部 (42.0)			暗青灰色 暗青灰色	砂礫S－1、M－1、黒色粒	内外面ロクロナデ		66
107		珠洲　甕	(43.6)			黄灰色 灰色	砂礫S－1、黒色粒、長石粒	内外面ロクロナデ	剥離著しい	76
108	整地層 (暗灰色)	珠洲　壷	(15.0)			灰色 灰色	砂礫S－1、黒色粒、長石粒	内外面ロクロナデ		77
109	整地層 (黒灰色)	珠洲　壷	頸部径 (9.9)	体部径 (16.5)		灰色 灰色	砂礫S－2、黒色粒極少量 茶色粒極少量	内外面ロクロナデ		16
110	整地層	珠洲　壷		体部径 (17.4)		灰色/暗灰色（自然釉） 灰色/暗灰色（自然釉?）	砂礫S－1、黒色粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、波状文	外面磨耗	19
111	整地層 (暗灰色)	珠洲　壷				灰色 灰色	砂礫S－1、黒色粒	内面ナデ 外面ナデ、押印		62
112	整地層 (暗灰色)	珠洲　壷		(9.4)		灰白色 灰色	砂礫S－2、M－1、L－1、黒色粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、糸切り		15
113	整地層 (サブトレンチ)	珠洲　壷		9.0		灰色 灰色	砂礫S－3	内面ナデ 外面ナデ、静止糸切り		4
114	整地層	珠洲　壷		9.0		灰色 灰色	砂礫S－0	内面ロクロナデ 外面ナデ、板状圧痕		2
115	整地層	珠洲　擂鉢	28.0			灰色 灰色	砂礫S－2	内面ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ	卸目2本	10
116	整地層 (黒灰色)	珠洲　擂鉢				褐灰色/にぶい褐色 褐灰色/にぶい褐色	砂礫S－2、M－1、黒色粒	内面ロクロナデ、櫛描文、卸目 外面ロクロナデ		17
117	整地層	珠洲　擂鉢	21.4			灰色 灰色	砂礫S－1、海綿骨針	内外面ロクロナデ	内面使用による磨耗	7
118	整地層	珠洲　擂鉢	(23.0)			灰白色 青灰色	砂礫S－1、M－1、黒色粒 海綿骨針	内外面ロクロナデ	口縁端部磨耗	6
119	整地層 (黒灰色)	珠洲　擂鉢	24.0			緑灰色 緑灰色	砂礫S－1、海綿骨針	内面ロクロナデ、ナデ 外面ロクロナデ	内面使用による磨耗	9
120	整地層	珠洲　擂鉢	(31.4)			灰色 灰色	砂礫S－1、黒色粒	内面ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ	卸目浅く6本	18
121	整地層 (礫層)	珠洲　擂鉢	(32.0)			灰色 青灰色	砂礫S－1、M－1、黒色粒少量	内面波状文、ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ		5
122	整地層	珠洲　擂鉢	(33.5)			灰色 灰色	砂礫S－1、M－1L－1、黒色粒	内面波状文、ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ		11
123	整地層 (暗灰色)	珠洲　擂鉢	(33.4)			灰色 灰色	砂礫S－1、長石粒or海綿骨針	内面波状文、ナデ、卸目 外面ロクロナデ		75

124	整地層	珠洲　擂鉢	(31.0)			灰色 灰色	砂礫S-1	内面波状文、ロクロナデ 外面ロクロナデ		8
125	整地層	珠洲　擂鉢	(29.4)			灰色 灰色	砂礫S-2、M-1、L-1、黒色粒 海綿骨針	内面波状文、ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ	外面に工具痕あり	14
126	整地層 (暗灰色)	珠洲　擂鉢	(29.4)			灰色 灰色	砂礫S-1、黒色粒	内面波状文、ナデ、卸目 外面ロクロナデ		69
127	整地層	珠洲　擂鉢	(21.6)			にぶい黄橙色 浅黄橙色/灰白色	砂礫S-1、茶色粒	内面卸目 外面ロクロナデ		80
128	整地層	珠洲　擂鉢		(12.2)		黄灰色 黄灰色	砂礫S-1、L-0	内面ナデ、卸目 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ		81
129	整地層 (灰褐色)	珠洲　擂鉢		(12.8)		灰白色 灰白色		内面卸目 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	内面に炭化物 卸目8～10本	79
130	整地層	珠洲　擂鉢		(14.4)		黄灰色 黄灰色	砂礫S-2、M-2、海綿骨針	内面ナデ 外面ナデ	内面使用による磨耗 外面に指頭痕	1
131	整地層	珠洲　擂鉢		(10.0)		灰オリーブ色 灰オリーブ色	砂礫S-1	内外面ナデ	外面に指頭痕	3
132	整地層	越前　甕	(49.6)			オリーブ灰色 暗オリーブ灰色/オリーブ灰色	砂礫S-2、黒色粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ(灰かぶり)		64
133	整地層 (暗灰色)	越前　甕	(38.2)			灰白色 灰黄色	砂礫S-2、黒色粒	内面ナデ 外面ロクロナデ		63
134	整地層	越前　甕				灰色 灰色	砂礫S-1、黒色粒微量	内外面ロクロナデ		12
135	整地層	越前　擂鉢	33.0			褐灰色/灰褐色 にぶい赤褐色	砂礫S-1、LL-0、黒色粒	内面ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ	外面に煤付着	68
136	整地層	越前　擂鉢		14.8		橙色 にぶい橙色/橙色	砂礫S-1、黒色粒、長石粒	内面ロクロナデ、卸目 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	内面使用による磨 卸目7本	78
137	整地層 (暗灰色)	越前　甕				にぶい褐色 にぶい黄橙色	砂礫S-2	内面ナデ 外面ナデ、押印		58
138	整地層	越前　甕				にぶい褐色 にぶい褐色	砂礫S-1、黒色粒	内面ナデ 外面ナデ、押印		61
139	整地層 (黒灰色礫)	越前　甕				にぶい赤褐色 暗赤褐色/浅黄色	砂礫S-2、黒色粒、茶色粒	内面ナデ 外面ナデ、押印		59
140	整地層	越前　甕		17.2		にぶい黄褐色 灰黄褐色/浅黄色	砂礫S-2、赤色粒中量 長石粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ		84
141	整地層 (礫層)	越前　甕		14.8		灰赤色 灰赤色	砂礫S-2、黒色粒、赤色粒 長石粒	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	外面に指頭痕	85
142	整地層 (黒灰色)	越前　甕		12.1		にぶい橙/にぶい赤褐色 にぶい褐色	砂礫S-2、長石粒	内面ロクロナデ、ナデ 外面ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ		82
143	整地層	瀬戸　卸目大皿				オリーブ灰色	砂礫S-1、M-1		胎土灰色	49
144	整地層 (暗灰色)	瀬戸灰釉　盤				浅黄色	砂礫S-1		胎土浅黄色 口縁端部キザミあり	48
145	整地層	瀬戸　折縁深皿				オリーブ黄色	砂礫S-1		胎土灰色	50
146	整地層	瀬戸灰釉 大型筒型容器	19.4			灰オリーブ色	砂礫S-1		胎土灰白色	52
147	整地層 (黒灰色礫下)	瀬戸　入子	6.8	3.8	2.5	灰白色	砂礫S-1、赤色粒S-1		胎土灰白色 転用硯	51
148	整地層 (黒灰色礫下)	瀬戸美濃 灰釉卸皿	13.0			灰白色	砂礫S-1		胎土灰白色	47

149	整地層	瀬戸　灰釉卸皿		7.2		にぶい橙色/灰黄色 明褐色	砂礫S-1		胎土灰白色 底部糸切り痕	45
150	整地層 (暗灰色土)	瀬戸　灰釉卸皿				灰白色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰白色	46
151	整地層	瀬戸 鉄釉直縁大皿	26.0			灰褐色/黒褐色	砂礫S-1		胎土灰褐色	54
152	整地層 (黒灰色礫下)	瀬戸　鉄釉茶壷	10.2			にぶい黄褐色 黒褐色	砂礫S-1		胎土褐灰色 口縁外面一部剥離	53
153	整地層	瀬戸美濃 天目茶碗				灰黄褐色/黒色	砂礫S-1		胎土灰黄褐色	39
154	整地層	瀬戸美濃 天目茶碗		4.0		黒褐色/灰褐色	砂礫S-1		胎土にぶい黄橙色	55
155	整地層	信楽　壷	15.2			にぶい褐色 にぶい赤褐色	砂礫S-1、M-1、黒色粒中量	内外面ロクロナデ	胎土灰白色	65
156	整地層	加賀　甕				灰黄褐色 褐色	砂礫S-1、M-2、赤色粒 茶色粒	内面ナデ 外面ナデ、押印	全体に自然釉付着	57
157	整地層	加賀　甕				灰黄色 にぶい黄橙色	砂礫S-2、黒色粒、茶色粒	内面ナデ 外面ナデ、押印	湯上谷窯製	60
158	整地層 (黒灰色礫下)	丹波　壷	15.0			暗オリーブ灰色 オリーブ灰色	砂礫M-2	内外面ロクロナデ	外面自然釉付着、表面剥離	24
159	整地層 (灰褐色土)	瓦質風炉	20.0			淡赤橙色/灰白色 淡赤橙色/灰白色			外面隆帯1条	140
160	整地層 (黒灰色礫下)	瓦質火鉢				灰色 灰色		内面ヨコナデ	全体に磨耗	142
161	整地層 (黒灰色礫下)	瓦質火鉢				灰黄色/暗灰色 灰黄色/暗灰色	石英微量、長石粒S-1 赤色酸化粒微量			176
162	整地層 (黒灰色礫下)	青磁　碗	19.4			灰オリーブ色	長石粒微量、石英微量		胎土灰白色	229
163	整地層	青磁　碗				オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰白色	28
164	整地層 (下層)	青磁　碗	(16.8)			灰オリーブ灰色	砂礫少量、黒色粒少量		胎土灰白色	30
165	整地層	青磁　碗	15.2			オリーブ灰色	砂礫S-1		胎土灰色	29
166	整地層 (黒灰色礫下)	青磁　碗	16.4			明オリーブ灰色	黒色粒S-2		胎土灰白色、櫛描文	31
167	整地層 (黒色土下層)	瀬戸　丸碗	11.0			オリーブ黄色	長石粒微量、石英微量		胎土灰白色 線描蓮弁文	232
168	整地層 (黒色)	青磁　碗		6.2		灰オリーブ色	長石粒S-1		胎土灰白色 しのぎ蓮弁文	137
169	整地層 (灰褐色土)	自磁　碗		5.2		オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰白色	37
170	整地層 (黒灰色土)	自磁　碗		4.8		明黄緑色	砂礫S-1		胎土灰白色	36
171	整地層	自磁　碗		5.6		オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰白色	35
172	整地層	青磁　花瓶				緑灰色	砂礫S-1		胎土灰白色	27
173	整地層	青磁　筒型香炉				オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒少量		胎土灰白色	26

174	整地層 (黒灰色礫下)	青磁　皿				オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰色	33
175	整地層 (褐色土)	青磁　盤		17.6		オリーブ灰色	長石粒S-1、石英微量		胎土灰白色	228
176	整地層 (礫層)	白磁　皿	10.4			灰白色	黒色粒S-1		胎土灰白色	42
177	整地層 (暗灰色土)	白磁　端反碗	12.2			灰白色	砂礫S-1、黒色粒S-0		胎土灰白色	43
178	整地層 (黒灰色礫下)	白磁　皿	11.6			灰白色	砂礫S-1		胎土灰白色	44
179	整地層	白磁　端反皿	25.4			灰白色	砂礫S-1、黒色粒S-1		胎土灰白色	41
180	整地層 (暗灰色土)	白磁　皿	14.0			オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒微量		胎土灰色	20
181	整地層	白磁　皿		3.7		灰白色	砂礫S-1、M-2、黒色粒S-1 茶褐色粒多量		輪状高台 底部外面赤色墨書	40
182	整地層	白磁　端反杯	6.4			灰白色	黒色粒少量		胎土灰白色	21
183	整地層 (黒灰色礫下)	白磁　碗				灰色	砂礫S-1、M-1、黒色粒S-1		胎土灰色	32
184	整地層 (暗灰色土)	染付　端反皿	12.6			明緑灰色	黒色粒S-1		胎土灰白色 中国製	23
185	整地層 (褐色土)	染付　端反皿	12.6			明緑灰色			胎土灰白色 中国製	230
186	整地層 (暗灰色土)	染付　端反皿		9.2		灰白色	砂礫S-1		胎土灰白色、中国製	25
187	整地層	染付　端反皿		5.0		明青灰色/鮮青色/灰白色	砂礫S-1		中国製	C
188	整地層 (黒灰色礫下)	染付　端反皿		7.0		明緑灰色/鮮青色/灰白色	砂礫S-1、赤色酸化粒M-1		中国製	B
189	整地層 (黒灰色礫下)	染付　碗		5.0		明青灰色	黒色粒S-2		胎土灰白色 中国製、被熱痕	22
190	整地層 (灰褐・橙褐色土)	染付　碗	14.0			明緑灰色	黒色粒微量、長石粒		胎土灰白色、中国製	231
191	包含層	土師器　皿	8.8	3.8	1.7	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、黒色粒、赤色粒	内面ナデ 外面ヨコナデ		163
192	包含層	土師器　皿	6.0		(1.5)	にぶい橙色 橙色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ナデ		177
193	包含層 (褐色粘質土)	土師器　皿	8.4			浅黄橙色 浅黄橙色	長石粒S-1	内面ヨコナデ 外面ナデ	内外面油煤付着 内面タール状炭化物付着	131
194	包含層	土師器　皿	(7.2)		(1.3)	にぶい橙色/黒色 にぶい橙色/黒色	砂礫S-1、黒色粒	内外面ヨコナデ	外面口縁部に煤付着	182
195	包含層	土師器　皿	9.2		(1.2)	にぶい黄橙色/黒色 にぶい黄橙色/黒色	砂礫、赤色粒	内外面ヨコナデ	内外面口縁部に油煤付着、内面剥離	181
196	包含層	土師器　皿				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長石粒S-1	内外面ロクロナデ		135
197	包含層	瀬戸灰釉　平碗		5.0		灰オリーブ色/オリーブ黄色 灰黄色	砂礫S-1、黒色粒		胎土灰白色/灰黄色	179
198	包含層	青磁　皿	15.0			オリーブ灰色	長石粒S-1		胎土灰白色	133

199	包含層	染付　碗	11.4			明緑灰色 灰白色			中国産	178
200	包含層	瓦質　火鉢				灰黄褐色			外面隆帯１条あり	141
201	包含層 (砂利層)	瓦質　火鉢	19.6			灰色 黄褐色	砂礫S-１		外面一部剥離	175
202	包含層 (暗灰色土)	瓦質　火鉢		28.2		灰色 灰色	砂礫S-１			170

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調　内 色調　外	胎　　土	備　　考	実測番号
203	SK15	信楽　円盤状陶製品					灰白色 灰白色	砂礫S-１、石英微量		G
204	整地層 (暗灰色土)	越前　円盤状陶製品	5.0	4.95	1.4		にぶい橙色			C
205	整地層	越前　円盤状陶製品	4.9	5.1	1.4		灰黄色/黄灰色			B
206	整地層 (黒灰色土)	越前　円盤状陶製品	4.9	4.6	1.4		にぶい褐色/橙色			A

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調　内 色調　外	胎　　土	備　　考	実測番号
207	整地層	越前　溝持ち砥石	6.7	4.4	1.4	50.0				139
208	整地層	越前　溝持ち砥石	(5.45)	5.7	1.2	41.0	にぶい赤褐色/灰黄褐色			13
209		越前　溝持ち砥石	(3.4)	(1.8)	1.2	(8.0)	暗褐色/灰白色		自然釉付着	172

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調　内 色調　外	胎　　土	備　　考	実測番号
210	整地層 (黒灰色土)	フイゴ羽口	(5.5)	(4.6)	(2.9)	(56.0)	浅黄橙色 褐灰/にぶい褐/にぶい橙色		溶解物付着 直径(6.8)孔径(3.2)	5
211	整地層	フイゴ羽口	(4.0)	(3.25)	(3.0)	(35.0)			溶解物付着 直径(8.4)孔径(3.2)	4
212	整地層 (黒灰色土)	フイゴ羽口	6.5	4.7	2.9		灰黄褐色/にぶい黄橙色 にぶい黄橙色/灰黄褐色	砂礫S-２、赤色粒S-１、L-１		10
213	整地層 (青灰色土)	フイゴ羽口	(6.2)	(4.7)	(3.5)	(78.0)	黄灰色 橙色	砂礫S-１、M-１、L-１	溶解物付着、表面剥離、孔径(2.4)	8
214	整地層 (黒灰色礫土)	フイゴ羽口	(6.0)	(5.1)	(4.7)	(96.0)	浅黄橙色 にぶい橙色/褐灰色	砂礫M-２	溶解物付着 直径(9.0)孔径(5.8)	9
215	整地層	フイゴ羽口	(5.05)	(6.3)	(4.1)	(111.0)	にぶい橙色/浅黄橙色 灰色	砂礫M-１、L-１ 赤色酸化粒L-１	溶解物付着 直径(6.4)孔径(3.0)	6
216	不明	フイゴ羽口	(5.6)	(6.5)	(4.2)	(125.0)	灰白色 灰黄色	砂礫S-１、M-１	溶解物付着 直径(8.4)孔径(3.4)	7

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備　考	実測番号
217	整地層 (黒灰色礫土)	坩堝	7.6		(3.1)	灰色/オリーブ灰色 灰色	砂礫S-1、M-1、黒色粒S-1	外面ナデ	溶解物付着	追1
218		坩堝	7.6			灰色 灰白色/灰色	砂礫S-1、M-1	内外面ナデ	溶解物付着 手捏	追1
219	整地層 (黒灰色礫土)	坩堝	8.8			黄灰色 黄灰色	砂礫M-1	外面ナデ	溶解物付着	2
220	整地層 (黒灰色礫土)	坩堝				灰色 灰白色/灰色	砂礫M-2、L-1	外面ナデ	溶解物付着	3
221	整地層	鋳型か	(8.4)	(6.8)	(3.2)				色調：橙色	K
222	整地層 (灰褐色土)	鋳型か	(7.5)	(6.2)	(3.5)				色調：橙色	J

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
223		砥石	(12.7)	6.2	3.8	210.0		荒砥、大村産	167
224		砥石	(5.9)	5.4	2.1	95.0	砂岩	荒砥、大村産	173
225		砥石	(7.1)	6.4	2.2	65.0			168
226	整地層 (黒灰色礫土)	砥石	7.6	4.3	3.8	200.0		中砥	143
227	整地層	砥石	(5.4)	(5.25)	4.5	180.0		中砥	147
228	整地層	砥石	(3.65)	3.8	3.0	58.0		中砥	14
229	整地層 (暗灰色土)	砥石	3.5	2.5	0.95	10.0			145
230	整地層	砥石	3.7	3.4	0.5	10.0			144
231	整地層 (暗褐色土)	石鏃	2.1	1.65	0.3	1.2	安山岩		108

鉄製品・銅製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
232		鉄釘	(6.4)	(1.9)		5.0		D
233		鉄釘	(6.2)	(2.2)		(7.0)		E
234		鉄釘	(3.6)	(0.35)		1.0		F
235	整地層	鉄釘	6.3	3.2	0.85	7.0		12
236	包含層	小札	1.8	1.2		1.4		H
237		錫状	13.7(総高)	6.7(輪径)	1.45(宝瓶)		遊鐶4個(内径2.7～2.9)	追

調査区④土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備　考	実測番号
1	包含層	縄文土器　深鉢					砂礫S-1、M-2、L-1	ナデ	口縁刺突文	39
2	包含層	縄文土器				明黄褐色	砂礫S-2、M-2、L-2	内面ナデ 外面一部縄文LR	原体の撚り　左 施文方向　縦位か	37
3	包含層	縄文土器				にぶい黄橙色	砂礫S-1、M-2	ナデ		38
4	堀	土師皿	15.0		2.6	橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒微量		油痕付着	32
5	堀（層15）	土師皿	8.0		1.6	橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒S-1		油痕付着	30
6	堀	土師皿	8.4		2.0	浅黄橙色	長石粒S-1 赤色酸化粒S-1			31
7	堀（層17）	珠洲　擂鉢	31.2			灰色	砂礫S-1	ロクロナデ		7
8	堀（層17）	珠洲　擂鉢	30.5			灰色	砂礫S-1、M-1		ハケ目陶器 片口あり	8
9	堀（層17）	珠洲　擂鉢		10.2		灰色	砂礫S-1 石英微量		卸目11本	4
10	堀	珠洲　擂鉢		9.0		灰色	砂礫S-1、M-1			34
11	堀（層16）	珠洲　擂鉢		12.0		灰白色	砂礫S-1 石英微量		卸目7～9本	6
12	堀（層12）	瀬戸　灰釉卸大皿	27.8			灰白色	長石粒微量			17
13	堀（層15）	瀬戸　灰釉卸皿	18.8			オリーブ黄色	長石粒S-1			22
14	堀	瀬戸　天目茶碗	12.0			黒褐色	長石粒S-1、L-1		覆輪被	24
15	堀（層12）	瀬戸　天目茶碗	10.6			黒褐色	長石粒S-1 黒色粒S-1			16
16	堀（層15）	瀬戸　灰釉皿	(13.3)			にぶい黄色	長石粒微量			19
17	堀	瀬戸　灰釉丸皿	7.4			オリーブ	長石粒S-1			35
18	堀（層16）	瀬戸　灰釉平碗		5.0		浅黄色	黒色粒微量 長石粒S-1			20
19	堀（層12）	瀬戸　灰釉碗	17.2			オリーブ黄色	石英L-1 長石粒S-1			19
20	堀（層15）	青磁　碗	15.0			オリーブ灰色	長石粒、 石英微量、黒色粒S-1			25
21	堀（層17）	青磁　碗	(11.9)			オリーブ灰色	長石粒S-1 黒色粒S-1			28
22	堀（層17）	青磁　稜花皿	13.0		2.1	にぶい赤褐色	長石粒S-1 赤色酸化粒多量			26
23	堀（層17）	青磁　皿		8.6		オリーブ灰色	長石粒S-1 黒色粒S-1			29
24	堀（層17）	青磁　碗		7.2		オリーブ灰色	砂礫S-1 黒色粒S-1			27
25	包含層	土師皿	13.2			黄橙色	砂礫S-1、M-0	内外ナデ		36
26	包含層	瀬戸 灰釉柄付片口	14.6			オリーブ黄色	長石粒S-1 黒色粒S-1			33

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	基　部	刃　部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　　質	備　　考	実測番号
27	堀（層17）	砥石			4.7	2.8	1.1	20			23
28	堀（層16）	打製石斧		円刃	(8.1)	9	2.65	230	火山礫凝灰岩		2
29	堀（層16）	打製石斧		円刃	(11.3)	10.1	2.1	260	火山礫凝灰岩		3

銅製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	直径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	実測番号
30	堀（層17）	双鳥鏡	5.4	0.45	40	完形品	1

調査区⑤土器・土製品観察表

遺物番号	出土地点	器　　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　　土	調　　整	備　　考	実測番号
1	SX 1	縄文土器		9.0		橙色 黄褐色	砂礫S-1、M-1、L-2 赤色酸化粒M-1、L-2	内面ナデ　外面条痕		17
2	包含層	縄文土器				灰黄色/黄灰色 灰黄色	砂礫M-1	内面ナデ　外面条痕	海綿骨針含む	14
3	P 1	珠洲　擂鉢				橙色 にぶい黄褐色	砂礫S-1、黒色粒M-0	外面ロクロナデ	卸目４本 海綿骨針含む	16
4	包含層	土師器　皿	10.0			にぶい橙色/浅黄橙色 にぶい橙色/浅黄橙色	砂礫S-1、赤色粒	内外面ナデ		22
5	包含層	瀬戸美濃　灰釉 折縁深皿	28.8			にぶい黄色/灰白色 にぶい黄色/灰白色		内外面ロクロナデ		15
6	包含層	青磁　碗	10.0			オリーブ灰色 オリーブ灰色	砂礫S-1、黒色粒、茶色粒		釉厚い	19
7	包含層	青磁　碗	12.2			明緑灰色 明緑灰色	黒色粒微粒			20
8	包含層	白磁　皿	9.2			淡黄色/黒褐色 灰白色/灰黄色	黒色粒微粒			21
9	壁面	白磁　小杯		2.		灰白色 灰白色	砂礫微量、黒色粒微量	内外面ロクロナデ	底部釉剥ぎ	24
10	壁面	肥前磁器　碗		4.		灰白色 灰白色		内外面ロクロナデ	蛇の目釉剥ぎ	18
11	包含層	肥前磁器　碗		4.		緑灰色/灰黄色 灰黄色	砂礫S-1、黒色粒微量	内外面ロクロナデ	蛇の目釉剥ぎ	25
12	包含層	フイゴ羽口	長さ 3.7	幅 3.55	厚さ 1.8					23

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	基部	刃部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
13	包含層	打製石斧	円基	直刃	14.0	7.1	3.65	520.0	凝灰岩質安山岩		4
14	包含層	打製石斧	直基	凸刃	14.5	5.9	2.8	316.0	凝灰岩		9
15	包含層	打製石斧	円基	直刃	12.0	6.4	2.95	277.0	砂岩		6
16	壁面	打製石斧	凸基		14.1	7.25	3.35	409.0	火山礫凝灰岩		10
17	包含層	打製石斧	凸基	円刃	16.6	7.8	3.45	522.0	火山礫凝灰岩		7
18	包含層	打製石斧	凸基		(11.4)	6.8	2.8	202.0	安山岩		3
19	包含層	打製石斧		凸刃	(11.2)	(6.6)	(2.25)	(179.0)	安山岩		11
20	包含層	打製石斧	直基		(10.4)	(6.5)	3.7	(305.0)	火山礫凝灰岩		1
21	包含層	打製石斧	直基	円刃	15.5	7.6	2.45	308.0	砂岩		8
22	包含層	打製石斧	円基		(12.4)	7.8	2.8	338.0	砂岩		2
23	包含層	打製石斧	円基	外湾刃	11.9	6.7	2.9	225.0	凝灰岩質安山岩		5
24	包含層	打製石斧		円刃	11.7	6.7	2.1	148.0	火山礫凝灰岩		12
25	包含層	横刃型石器			12.15	7.75	1.6	159.0	安山岩		13

調査区⑥土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備考	実測番号
1	P01(上層)	土師器　皿	8		1.4	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S－2 赤色酸化物	内外面ヨコナデ		21
2	P02(上層)	壺				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S－2　長石粒少量	内面　ハケ 外面　ミガキ	弥生時代	19
3	P03(上層)	土師器　皿	14.2			橙色/灰褐色 橙色/灰褐色	砂礫S－2　M－1 赤色酸化物　石英	内外面ヨコナデ		20
4	地山直上 (下層)	深鉢		6.7		にぶい黄橙色 にぶい黄橙色　黒褐色	砂礫S－2　M－2　L－2 赤色酸化物　石英	ヨコナデ 縦条痕	埋設土器1 底部網代圧痕	32
5	P04(下層)	深鉢				褐灰色 褐灰色	砂礫S－1　M－1	内面ヨコナデ	原体方向LR	1
6	P04(下層)	深鉢				黒褐色 浅黄橙色	砂礫S－1　M－1　L－1		原体方向RL	2
7	P04(下層)	深鉢				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S－1		原体方向RL	3
8	P04(下層)	浅鉢				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S－1　M－1　L微量	内面ナデ	原体方向RL 海綿骨針含む	4
11	P05(下層)	深鉢		7.2						11

12	P06（下層）	浅鉢	29			にぶい黄橙色 黒褐色	砂礫S－1 石英	内面ナデ		6
15	P08（下層）	深鉢		7.8		黄橙色 灰黄褐色	砂礫S－1　M－2 赤色粒　黒色粒	内面ナデ	底部網代圧痕	7
16	P09（下層）	深鉢				黒褐色　灰黄褐色 黒褐色　灰黄褐色	砂礫S－2　M－1 石英		原体方向LR	23
17	P09（下層）	注口土器				灰黄褐色　にぶい黄橙色 黒褐色　褐灰色　橙色	砂礫S－2　M－1 石英			24
18	P09（下層）	浅鉢				にぶい黄橙色　にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	砂礫S－1　M－1	内面ナデ	原体方向RL 外面に煤付着	12
19	P09（下層）	浅鉢				にぶい橙色 浅黄橙色　にぶい黄橙色　灰黄褐色	砂礫S－2　M－1 石英	内外面ナデ	外面に煤付着	17
20	P09（下層）	底部		9.8		にぶい黄橙色 灰黄褐色		内面ナデ	原体方向LR 底部網代圧痕	14
23	P10（下層）	浅鉢				褐灰色 黒褐色　灰黄褐色	砂礫S－2　石英粒 赤色粒　黒色粒		原体方向LR	33
24	P11（下層）	深鉢（突起部）				黒褐色　灰黄褐色　にぶい黄橙色 黒色　にぶい黄橙色　灰黄褐色	砂礫S－1　M－1 石英　金粒子			16
25	包含層（下層）	浅鉢				にぶい黄橙色　褐灰色 浅黄橙色	砂礫S－1　M－2 赤色酸化粒S－1	内面ヨコナデ	原体方向RL	8
26	包含層（下層）	浅鉢				黒褐色　黒色 黒褐色　黒色	砂礫S－2　石英			26
27	包含層（下層）	深鉢				褐色　にぶい黄褐色　黄褐色 にぶい黄褐色　黒褐色	砂礫S－2　M－1		原体方向RL	25
28	包含層（下層）	深鉢				暗褐色　にぶい黄褐色 黒褐色　にぶい黄褐色	砂礫S－2　石英	内面ナデ	原体方向LR	22

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	基　部	刃　部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
9	P04（下層）	打製石斧	直基		10.5	7	2.9	225	中粒砂岩		5
13	P07（下層）	不明			6.4	9.1		580	凝灰岩	一部火熱受ける	28
14	P07（下層）	敲石			10.8	7.4	5.1	570	砂岩		29
21	P09（下層）	磨石			11.5	9	6.5	948	砂岩		15
22	P09（下層）	石皿			(10.2)	(7.3)	3.1	259		板状	10
29	包含層（下層）	打製石斧	直基	円刃	15.8	7	2	239	凝灰岩		30
30	包含層（下層）	敲石			10.8	8.1	4.3	542	砂岩		9
31	包含層（下層）	磨製石斧	円基		(4.2)	6.1	5	195	緑色凝灰岩		27
32	包含層（下層）	石棒			(4.1)	2.1		7	粘板岩		18
33	包含層（下層）	石鏃			2.7	2.4	0.8	9	輝石安山岩		31

調査区⑦土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備考	実測番号
1	A区 包含層	縄文土器　深鉢	(46.2)			にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-2、M-1、赤色粒 長石粒、石英、海綿骨針	内面ナデ	口唇部に刻み目 外面に平行沈線	16
2	A区 包含層	縄文土器				にぶい黄褐色/黒褐色 にぶい黄褐色	砂礫S-2、長石粒、石英	内面ナデ	口唇部に刻み目 波状口縁 外面に斜位刺突文	18
3	A区 包含層	縄文土器　深鉢		8.2		灰黄褐色/にぶい黄橙色 にぶい黄橙色/橙色	砂礫S-3、M-1、長石粒	内面ナデ 外面縄文LR横位	内に指圧痕 底部外に網代痕	23
4	A区 包含層	縄文土器　深鉢		(8.2)		にぶい橙色/明黄褐色 にぶい橙色	砂礫S-3、M-1、赤色粒	内外面ナデ	底部外に網代痕	24
5	A区 包含層	縄文土器		(21.2)		黒褐色 にぶい黄橙色/黒褐色	砂礫S-2、M-1	内面ナデ 外面縄文LR横位	口唇部に刻み目	25
6	A区 包含層	縄文土器				にぶい黄褐色/黒褐色 にぶい黄褐色	砂礫S-2、M-1、L-0	内面ナデ	外煤付着	17
7	A区 包含層	縄文土器				にぶい黄橙色/褐灰色 にぶい黄橙色	砂礫M-2、赤色粒、石英	内面ナデ	羽状文	19
8	A区 包含層	縄文土器				橙色 にぶい黄橙色/褐灰色	砂礫S-1、M-2、赤色粒、 石英	内面ナデ　外縄文LR		20
9	A区 包含層	縄文土器				明黄褐色 にぶい黄橙色	砂礫S-2、M-0、長石粒	内面ナデ　外縄文LR斜位		26
10	A区 包含層	高杯	19.9			にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	砂礫S少量　長石粒	内面　ミガキが 外面　ナデ	弥生土器	28
11	A区 SK1	土師器　皿	8.0		1.4	にぶい黄橙色/にぶい橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、赤色粒、長石粒	内外面ヨコナデ	海綿骨針	11
12	A区 SK1	土師器　皿	(11.1)		1.7	橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、赤色粒、長石粒	内外面磨耗不明	海綿骨針	10
13	A区 SK1	土師器　皿	13.0			浅黄橙色 にぶい橙色	砂礫S-1	内外面ヨコナデ		7
14	A区 SK1	土師器　皿	11.6			浅黄橙色 浅黄橙色	砂礫S-1、茶色粒	内外面ヨコナデ		9
15	A区 SK1	土師器　皿	13.0			にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、石英	内面ナデ　外面ヨコナデ		6
16	A区 SK1	土師器　皿	11.0			にぶい黄橙色 灰白色/にぶい黄橙色/浅黄橙色	砂礫S-1、黒色粒	内面ナデ 外面ヨコナデ、ナデ		2
17	A区 SK1	土師器　皿	10.7			にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-1、赤色粒、石英	内面磨耗不明 外面ヨコナデ		3
18	A区 SK1	土師器　皿	13.0			橙色 橙色	砂礫S-1、赤色粒、石英	内外面ロクロナデ		4
19	A区 SK1	土師器　皿	15.6			灰黄褐色 にぶい黄橙色	砂礫S-1、茶色粒、石英	内外面ロクロナデ		8
20	B区　表土	縄文土器				にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂礫S-3、M-1、L-0 赤色粒、長石粒	内面ナデ 外面縄文LR横位		22
21	B区 包含層	高坏				にぶい黄橙色 にぶい橙色	砂礫S-2、L-0、赤色粒 長石粒、石英	外面ミガキ		27
22	B区 包含層	壷				にぶい橙色 にぶい橙色	砂礫S-3、M-0、石英	内外面ナデ	弥生土器	21

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	基部	刃部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
23	B区　P1	砥石			4.0	5.0	4.40	110.0			12
24	B区　包含層	打製石斧	凸基		(13.4)	7.2	3.4	456.0	凝灰岩質安山岩	25と同一個体	15
25	B区　包含層	打製石斧		外湾刃	(9.7)	7.9	3.30	285.0	凝灰岩質安山岩	24と同一個体	14

調査区⑧土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備　考	実測番号
2	包含層	縄文土器　深鉢				にぶい褐色/黒褐色 灰褐色/にぶい褐色	砂礫S-2、M-1、赤色粒	内面ナデ、外面斜縄文	外面縄文RL	1
1	包含層	縄文土器				にぶい黄橙色 橙色/にぶい黄橙色	砂礫S-1、M-1	内面ナデ、外面条痕		3
3	包含層	瀬戸美濃　天目茶碗	12.8			黒色/褐色 黒色/灰褐色/褐色	黒色粒		鉄釉	2

調査区⑨土器観察表

遺物番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調　内 色調　外	胎　土	調　整	備　考	実測番号
1	SK1	縄文土器				にぶい橙色 橙色	砂礫S-1、長石粒、赤石粒	内外面ナデ		16
2	SK1	縄文土器　(深鉢)								14. 15
3	SK1	縄文土器				にぶい黄褐色/灰黄褐色 にぶい黄橙色/にぶい黄褐色	砂礫S-2、長石粒、赤石粒	外面刺突痕、沈線		13
4	SD2	縄文土器		(10.1)		にぶい黄橙/明黄褐色 橙色/にぶい黄橙色	砂礫M·L-2、長石粒、赤石粒	内外面ナデ		12
5	SD2	甕				にぶい褐色 橙色	砂礫S-1·M-2、赤石粒 長石粒	内外面タタキ、カキ目	古代	11
6	SK2	瀬戸美濃 灰釉平碗		4.4		オリーブ黄色 灰黄色	砂礫S-1、M-0、長石粒			7
7	SD1	土師器　皿	11.4	2.3	9.0	橙色/にぶい橙色 にぶい橙色/橙色	砂礫S-1、長石粒、赤石粒		海綿骨針含む	6
8	SD1	土師器　皿	10.0	(1.6)	2.1	にぶい橙色 にぶい橙色/にぶい黄橙色	砂礫S-1、赤色粒、黒色粒 長石粒	内面おろし目 外面ロクロナデ		4
9	壁面	坩堝	5.4	(2.7)	(2.2)	黒褐色/灰白色 褐灰色/灰白色	砂礫M-0、長石粒、鉄			3
10	SK4	珠洲　擂鉢				灰色 灰色	砂礫S-1、M-1、赤石粒 長石粒、石英	内面おろし目 外面ロクロナデ		8
11	SK4	越前　甕		22.0		にぶい赤褐色/赤灰色 灰赤色/にぶい赤褐色	砂礫S-1、M-0	体部内外面ナデ 底部内面ナデ、外面ヘラ切りのちナデ	底部外面鉄分付着	9

石製品観察表

遺物番号	出土地点	器　種	基部	刃部	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	備　考	実測番号
12	SK2	打製石斧	直基	直刃	13.2	6.7	2.40	290.0			18
13	SK2	打製石斧	直基	丸刃	12.4	6.3	2.4	216.0			19

第４章　まとめ

第１節　館の位置と範囲

富樫館跡の発掘調査は、開発行為が民間住宅などによる原因が主なため、大規模な調査を実施することはほとんどなかった。そのため、調査の成果から検討を行うにしても全容を解明することはできない。そこで、幕末に描かれた絵図や明治期に作成された地籍図などで補完して、館の位置や範囲を推定したい。

これまでの発掘調査において、富樫館に直接関連する遺構は調査区④で確認した南北間を走る堀跡だけである。堀跡は土層の堆積状況などから、東側に土塁を設けていたらしく東方一帯に館本体が存在していたようである。

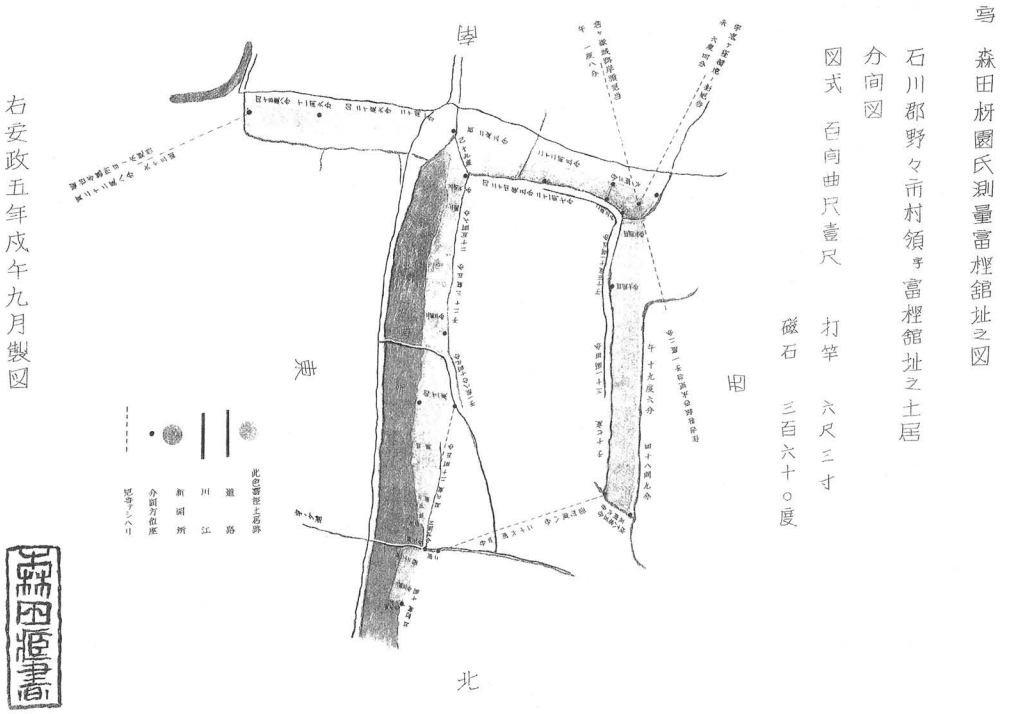
安政５年（1858）当時の郷土史家、森田平次（柿園）は、富樫館の現況を絵図にしたためている（野々市村富樫館址図）。絵図では、土塁を中心に描かれている。土塁は幅約４間（約7.2m）のL字型をしており、長さは、東西ラインが59間（約106.2m）、南北ラインが42間（約75.6m）である。東西ラインの中央には、南北方向に走るもう一本の土塁が存在する。この土塁は、長さ65間（約117m）、幅３～４間（5.4～7.2m）で、土塁の東側には「新開所」と呼ばれる南北に長い区域が存在する。絵図からは北面と東面の土塁は描かれていないが、残存する土塁の総長から約１町四方の方形館であったことが推定される。また、東西土塁の中央を走る南北土塁の隣にある「新開所」は江戸末期には埋まった堀の跡と推察される。

明治40年（1907）に作成された野々市村地籍図にも富樫館の遺構と思われる地割を見ることができる。その箇所は、絵図で見られたものと同様、幅約10～15m四方の土塁及び堀跡が地割となって表現してある。ただし、絵図と同様に館の東限と北限の一部は土塁の痕跡を見ることはできない。館の東限にあたるところは、旧九艘川が南北を走っている。また、北限については、西限の南北土塁と中央に走る南北土塁間には土塁（堀）が存在した痕跡が見られるが、中央の南北土塁から旧九艘川に至る東半分までは土塁や堀の痕跡は全く認められない。

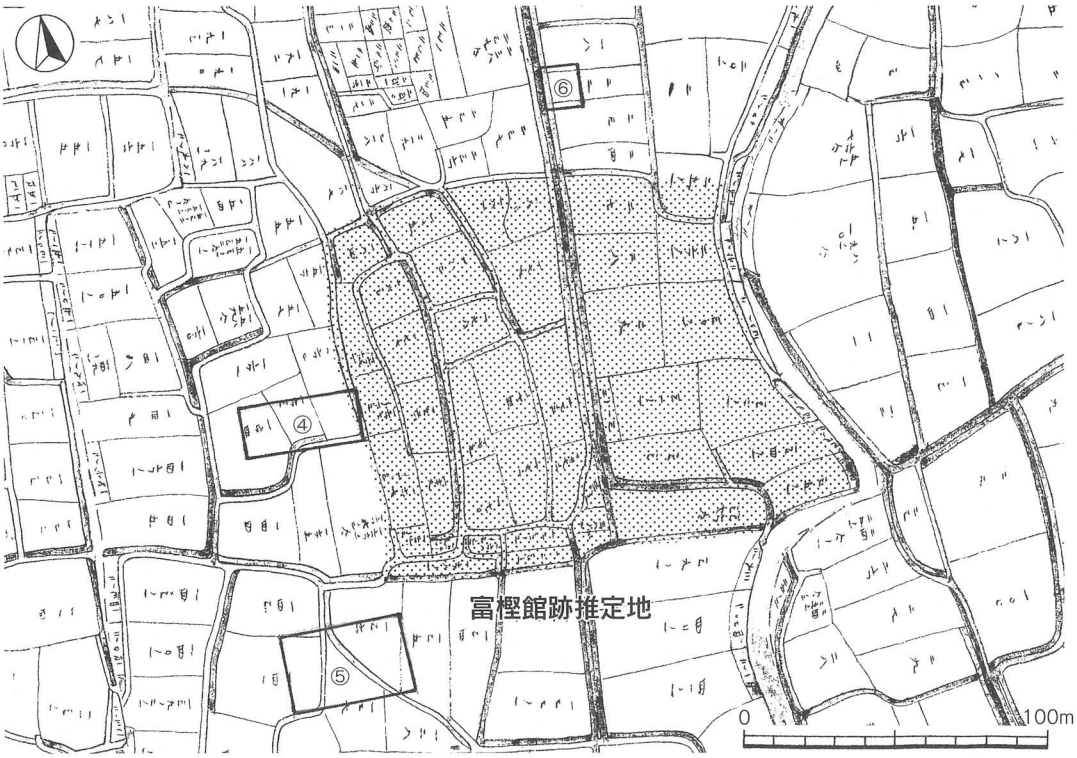
以上、富樫館に関連する絵図と地籍図について概観した。続いて、発掘成果、絵図、地籍図をさらに分析し、富樫館の構造を探ってみたい。調査区④で確認した堀跡は、現況図と地籍図を照合すると館の西限に位置する。調査では、土塁を確認することはできなかったが、検出した堀の埋土をそのまま土塁として活用したと仮定すれば、土塁の幅は約６m、高さは約２mとなり、絵図で記録された土塁幅とほぼ合致する。また、絵図に描かれている「新開所」と呼ばれる箇所は、前述したとおり堀跡と推定できる。これに地籍図で判明できる土塁ラインを調べると、西限の土塁から南限土塁の中央を南北に走る土塁までは、堀とセットになって四周を巡る構造となる。それに対してこれより東側の旧九艘川までのエリアは、南限には土塁と堀が存在するが、北限は土塁状の遺構はなく開口する形状となる。

館の東限に位置する旧九艘川は、船が９艘分の幅をもつという言い伝えが残るくらいの大きな河川で、発掘調査の成果からでも幅約11～15mの幅をもつことがわかっている。この川と館の南限土塁と接触するところでは、川がくの字状にクランクし、その箇所だけ川幅がさらに大きくなっている。旧九艘川は、金沢市街を流れる伏見川、犀川を経て、日本海へと注がれる。犀川の河口には、中世に栄えた宮腰津や14世紀半ば～15世紀半ばまでの港湾集落遺跡である普正寺遺跡が存在する。以上から、九艘川は、日本海からの船による物資流通経路となり、館に隣接するくの字クランクの箇所は、館に物資を搬入出できる荷解場のような場所と考えられる。

これらの成果をまとめると、富樫館は、約１町四方の規模をもった敷地面積をもっていたようである。館内は、一本の土塁と堀が中央を分断するように走り、縦に長い長方形をした２箇所の空間地を



第64図　野々市村富樫館址図（野々市町小史より）



第65図　野々市村地籍図（S＝1/2500）［網かけは館推定地］　一部加筆

形成している。西側の空間地は、四周を土塁と堀で囲った防御的に堅固な構えとなっており、守護所としての公的な場にあたると推定される。東側の空間地は、北限に土塁・堀を設けておらず、館の東限にあたる旧九艘川では、水運の拠点地としての構造をみせている。以上から、このエリアでは、人々や物流が頻繁に出入りすることができる開放的な場と想定される。このように、館内には機能分化した2箇所のエリアが存在したことをうかがうことができる。

第2節　館周辺部の状況

富樫館の周辺部の状況について概観する。館の西方にあたる調査区①、調査区②は、今回の一連の発掘調査で遺物が最も多く出土した。調査区①は、宅地の区画を想定させる溝や廃棄土坑を検出した。調査区②でも宅地を区画した溝や土坑、井戸跡を確認している。遺物においては、土師器皿や越前・珠洲・瀬戸・美濃焼の陶器、青磁・白磁・染付などの中国製磁器といった日常雑器を主体とし、フイゴ羽口、坩堝、砥石、鉄滓など金属製品の製作に関係する遺物も多く見つかっていることから、宅地内には鍛冶師をはじめとする商工業者の居住域があったと想定することができる。調査区②のB区の溝は南北ラインを主軸とし、溝と溝の間は南北間を走る道路と考えられる。江戸時代の調査区②は、白山へと向かう街道「馬替道」があった。調査区②で確認した道路跡は、「馬替道」の前身とも考えられ、その道に接するように東西溝で区画した宅地が並び、そこに商工業者の居住地を兼ねた市場が展開した景観を復元することができる。

館より東方側は、西方側の市場推定地とは全く異なる様相をもつ。調査区⑦－Aでは、人骨が出土した溝SD１を確認した。調査区⑦の北隣一帯は、通称「御墓」と呼ばれており、周辺に寺院及び墓地があった可能性をもつ。調査区⑦－B、調査区⑧には、掘立柱建物が集中するエリアがある。建物の規模はあまり大きくなく、数回立替を行っている。建物の主軸は館とは合致せず、遺物は調査区②に比べて極端に少ない。遺構の性格付けは今一度検討を要するが、一般農民層の居宅と考えたい。

調査区⑨は、富樫氏の家臣、山川氏の館推定地である。この調査で、14～15世紀の遺構・遺物を確認しており、屋敷が存在した可能性をもつ。富樫館から北方約２kmには、富樫氏庶流の富樫家善の館と推定されている押野館跡が存在する。また、富樫館と押野館との間には、富樫氏の菩提寺、大乗寺跡があったといわれている。[1]このように、富樫館の周辺には市場、家臣団屋敷、寺院などが点在する城下町のような都市的機能が備わっていたようである。

調査区⑤は、館推定地から南方約50mに所在する。この調査区からは、溝SD１や柱穴と思われるピットなど中世の遺構を確認することできたが、調査区のほとんどは、自然礫が散在する荒地のような場所で、遺物の出土量も極めて少ない。この状況は、調査区⑤から南へ約120m離れた鬼が窪地区（野々市町教委2001）や調査区③、調査区⑥でも見ることができる。このように館の近隣地においても、人為的な手の加わっていない箇所が各地に存在するようである。これは富樫館が城館を中心に展開する戦国期の城下町のような都市構造までにはまだ到達していないことを示している。

第3節　出土土器・陶磁器類の組成

本節では、富樫館跡から出土した中世の土器・陶磁器類の破片数量から、本遺跡のもつ特質を探ってみたい。破片数量については、本報告で紹介したものと過去に調査したものを含めている。[2]

中世の遺物は、総破片数が5,039点で、14世紀半ば頃から16世紀後半までのものが出土しているが、主体は14世紀後半から16世紀前半までである。（第２表参照）組成の内訳は、土師器58.1%、越前焼12.4%、瀬戸・美濃焼9.8%、中国製品8.4%、珠洲焼7.3%、加賀焼2.6%、瓦質土器0.9%、信楽焼0.4%、その他0.1%で、土師器と珠洲・越前焼など貯蔵用具等の二者で８割を超える。中国製品（8.4%）と瀬戸・美濃焼（9.8%）はほぼ同率で、供膳用具を中心とするが、花瓶、香炉などの宗教用具も少量出土する。

全体総括表

	製品		点数		製品		点数
中国	青磁	碗	167	国産		鉄釉卸皿	1
		皿	21			鉄釉碗	32
		鉢	6			鉄釉壺	8
		盤	9			鉄釉香炉	1
		花瓶	2			鉄釉小碗	1
		坏	1			鉄釉花瓶	2
		香炉	2			鉄釉その他	13
		壺	1			天目茶碗	69
		その他	38			計	492
		計	247		珠洲焼	甕	116
	白磁	碗	11			壺	69
		皿	81			すり鉢	158
		坏	10			その他	22
		その他	12			計	365
		計	114		越前焼	甕	445
	青白磁	梅瓶	2			壺	70
	染付	碗	15			すり鉢	40
		皿	31			その他	74
		小碗	1			計	629
		花瓶	1		加賀焼	甕	99
		坏	2			壺	13
		計	50			すり鉢	1
	天目茶碗		9			その他	18
	褐釉壺		2			計	131
	中国製品合計		424		信楽焼	壺	19
国産	瀬戸・美濃焼	灰釉皿	57		志野焼	皿	1
		灰釉卸皿	47		不明陶器		3
		灰釉碗	91		瓦質土器	火鉢	21
		灰釉盤	21			風炉	6
		灰釉花瓶	13			火桶	1
		灰釉鉢	6			その他	19
		灰釉壺	3			計	47
		灰釉瓶子	13		土師質土器	皿	2928
		灰釉その他	110		国産製品合計		4615
		鉄釉皿	4		総計		5039

第２表　富樫館跡出土土器・陶磁器破片数量表

（文献　野々市町教委1999、野々市町教委2001の調査の数量含む）

	甕	壺	擂鉢
珠洲焼	17.6	40.4	79.4
越前焼	67.4	40.9	20.1
加賀焼	15	7.6	0.5
信楽焼	0	11.1	0

（数値は%）

第３表　甕・壺・擂鉢の比率表

	碗	皿
青磁	42.4	10.8
白磁	2.8	41.8
染付	3.8	16
天目	2.3	0
瀬戸・美濃	48.7	31.4

（数値は%）

※皿は、土師器と瀬戸卸皿を除く

第４表　碗・皿の比率表

長池キタノハシ遺跡	野々市町北西部に位置する14世紀後半～16世紀前半の農村集落遺跡
普正寺遺跡	金沢市の犀川河口に位置する14世紀中ば～15世紀中ばの港湾集落遺跡
白山遺跡	鶴来町にある14世紀後半～16世紀の白山社の門前町的な基幹集落遺跡
木越光琳寺遺跡	金沢市の河北潟縁辺部にある14世紀～16世紀の集落遺跡

	富樫館跡	長池キタノハシ	普正寺	白山	木越光琳寺
土師器	58.1	67.1	70	77.5	57.3
珠洲・越前	19.7	18.7	23.6	10.5	29
中国	8.4	6.7	2.9	4.6	6.5
瀬戸・美濃	9.8	3.7	3.2	5.8	6
加賀	2.6	3.3	1	1	
瓦質	1	0.3	0.4	1.1	
朝鮮			0.1		
信楽	0.4	0.4			

（数値は%）

第５表　北加賀地域における中世遺跡出土土器・陶磁器組成表

甕・壷・擂鉢の日常容器は、基本的に珠洲・越前・加賀の三窯で構成されている。（第３表参照）組成は珠洲焼33.3%、越前焼53.9%、加賀焼11%、信楽焼1.8%で、越前焼が多い。器種別でみると、甕は、珠洲焼17.6%、越前焼67.4%、加賀焼15%と越前焼が半分以上を占める。壺は、珠洲焼40.4%、越前焼40.9%、加賀焼7.6%、信楽焼11.1%で、珠洲焼と越前焼がほぼ同率となる。信楽焼の壺は調査区②を中心に出土している。調査区各地で天目茶碗など茶道具が出土していることから、この壺は、葉茶を入れて運搬した容器と考えられる。擂鉢は、珠洲焼79.4%、越前焼20.1%、加賀焼0.5%と圧倒的に珠洲焼が多い。この状況は、他遺跡でも報告されているように、日常容器三器種については珠洲と越前による製品の分業形態が確立していることを表している。[3]加賀焼が全体的に少量なのは、本遺跡の中心時期が加賀焼の生産が衰退していく14世紀後半以降にあることと深く関係していると考える。

供膳用具については碗・皿類について見てみる。（第４表参照）碗は、中国製の青磁が42.4%、白磁が2.8%、染付3.8%、天目茶碗2.3%、瀬戸・美濃焼48.7%と青磁と瀬戸・美濃焼で９割以上を占める。瀬戸・美濃焼の内訳は、灰釉碗47.4%、鉄釉碗16.7%、天目茶碗35.9%で、灰釉碗が半数で天目茶碗がその後を続く。嗜好用具となる天目茶碗は、中国製・国産製を合わせて13.3%とやや少なめである。

皿は、土師質土器、卸皿を除外して検討する。青磁10.8%、白磁41.8%、染付16%、瀬戸・美濃焼31.4%となる。白磁皿と瀬戸灰釉皿の比率が高い。

続いては、各調査区における土器・陶磁器の組成から館とその周辺の特質を述べたい。調査区④では、遺物は館の堀から多く出土しており、館内部での使用頻度が高いことが想定される。総数は131点で、供膳用具の土師器皿、青磁碗・皿、白磁皿、瀬戸・美濃焼灰釉碗・皿や調理用具の珠洲・越前焼擂鉢、瀬戸・美濃焼灰釉卸皿、貯蔵用具の珠洲・越前焼の甕や壺、信楽焼の壺、嗜好品容具の瀬戸・美濃焼天目茶碗などが挙げられる。暖房用具や信仰用具は出土していない。遺物組成からは、守護所という特殊な場という視点からするとやや貧弱な印象を受ける。これは、堀跡は館の最も外郭側に位置することや調査面積の制限などが要因と考えられる。

調査区②は、富樫館跡一連の発掘調査で遺物の出土量が一番多く、総数は2,779点である。調査区④で説明した遺物はもちろん、青磁香炉や瀬戸・美濃焼灰釉花瓶といった信仰用具や瓦質火鉢、火桶などの暖房用具、青白磁の梅瓶など多種多様なものが見つかっている。これは、街道筋に広がる商工業者の居住域であることを虚実に示しているためと考えたい。蝮土居地区で検出した旧九艘川と周辺からは、大量の中世の土器・陶磁器を確認している。（野々市町教委2001）ここでの遺物の組成は、土師器皿が29.2%、瀬戸・美濃焼が22.2%、中国製品16.5%、越前焼18%、珠洲焼9.7%、加賀焼4.1%、信楽焼0.3%となっている。土師器皿が極めて少なく、瀬戸・美濃焼や越前焼、中国製品が非常に多い。これは、旧九般川が日本海と館を結ぶ物資流通の主要ルートとしており、そのことが変則的な遺物組成に表われていると考えられる。

また、富樫館跡の近隣に位置する中世遺跡の出土土器・陶磁器組成を比較すると、その構成比に基本的な違いはあまり見られない。（第５表参照）これは、北加賀地方で成立した商品経済圏下の物流構造が同じであることを示している。なお、中国製品と瀬戸・美濃焼において、富樫館跡の方が他遺跡よりも若干多い傾向にある。これは、館や市といった遺跡の性格による相違と捉えたい。

註

(1) 金沢市大乗寺所蔵の富樫家善寄進状は、家善が素哲という僧に大乗寺の田地や敷地を寄進した内容の文書である。その中に、大乗寺の敷地は、東は山王社の西側の溝、南は富樫館、西は白山大道、北は家善の館の堀と記述してある。

(2) 平成10年度の発掘調査（野々市町教委　1999）と平成10、11年度蝮土居地区の発掘調査（野々市町教委　2001）で得た成果を追加した。

(3) （石川県立埋蔵文化財センター　1984）（石川県立埋蔵文化財センター　1985）（石川県立埋蔵文化財センター　1998）参照

参考文献

『野々市町小史』 1953 野々市町役場
『普正寺遺跡』 1984 石川県立埋蔵文化財センター
『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（II）』 1985 石川県立埋蔵文化財センター
櫻井 甚一 「福水出土の古密教仏具からみた能登の山林宗教考」『能登加賀の中世文化』 1990 北国新聞社
『押野ウマワタリ遺跡』 1992 野々市町教育委員会
吉岡 康暢 『中世須恵器の研究』 1994 吉川弘文館
藤田 邦雄 「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸』 1997 桂書房
垣内光次郎 「加賀国の陶磁器流通」『中近世の北陸』 1997 桂書房
『研究紀要第５輯』 1997 ㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
『冨樫館跡Ⅰ』 1998 野々市町教育委員会
『木越光琳寺遺跡』 1998 石川県立埋蔵文化財センター
田村 昌宏 「冨樫館跡復元考」『ののいち町史だより創刊号』 1999 野々市町史編纂専門委員会
『冨樫館跡II』 1999 野々市町教育委員会
安 英樹 『石鏃雑考』「石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具」 1999 石川考古学研究会
久保 智康 『日本の美術394 中世・近世の鏡』 1999 至文堂
『長池キタノハシ遺跡』 2000 野々市町教育委員会
『冨樫館跡蝮土居地区 冨樫館跡鬼ヶ窪地区』 2001 野々市町教育委員会
『野々市町史資料編１考古 古代・中世』 2003 野々市町史編纂専門委員会

調査区①　全景（北から）

調査区①　全景（南から）

調査区①　SK１（北から）

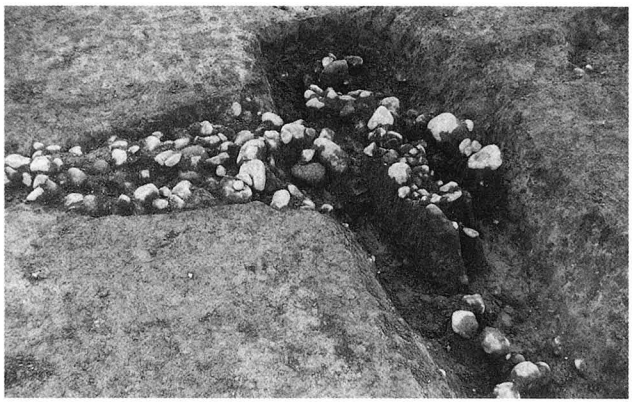
調査区①　SK３・SK４・SK６（東南から）

調査区①　SK６・SK７（東から）

調査区①　SK７（東から）

調査区①　SK８・SK９（北から）

調査区①　SD１・SD２・SD３（北から）

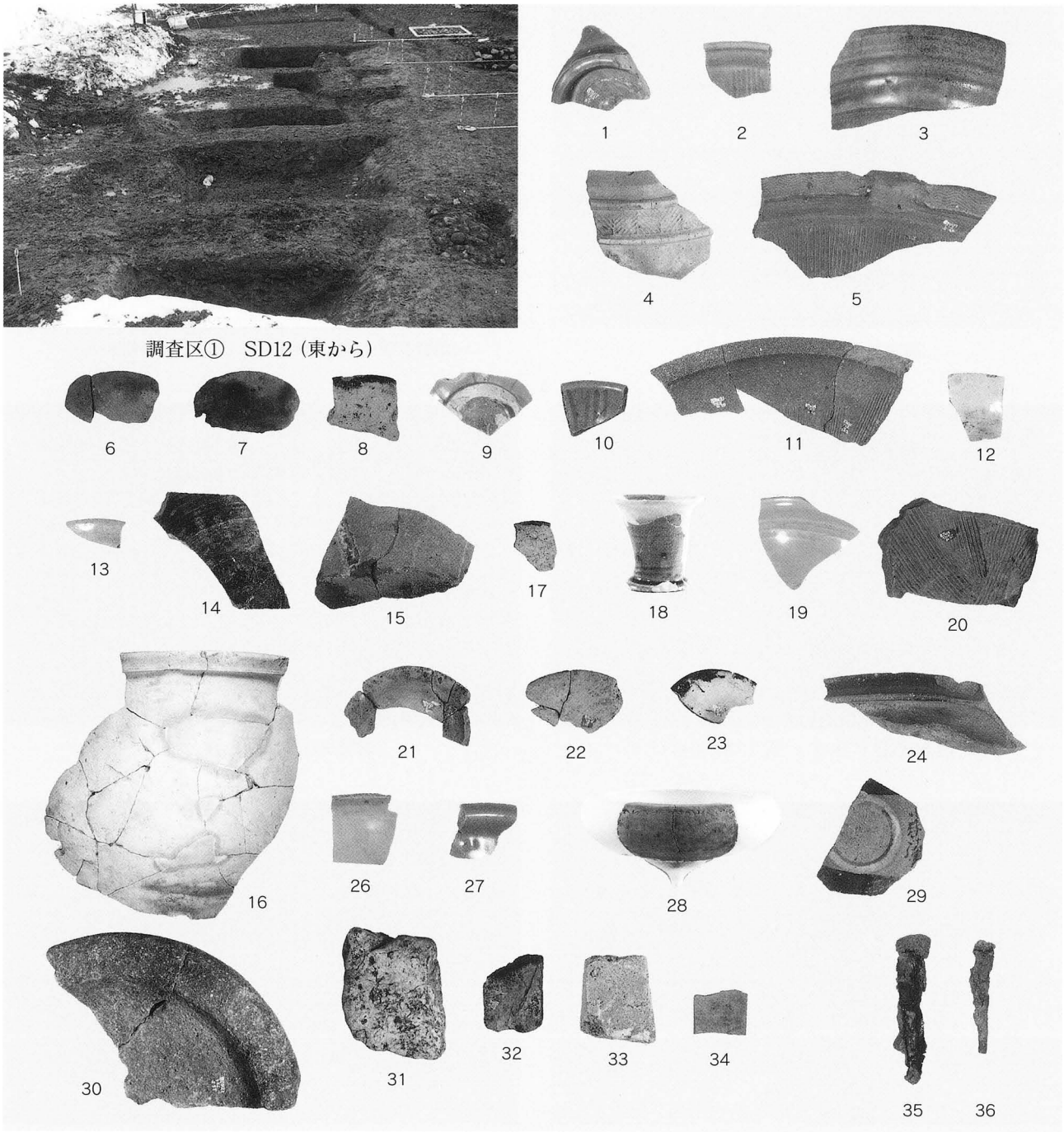


調査区①　SD３・SD４（北から）

調査区①　SD７（北から）

調査区①　SD10･SD11（東から）

調査区①　SD12（東から）



調査区①　遺物

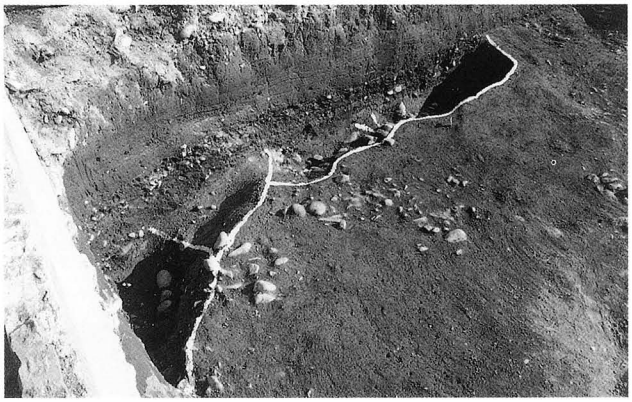
調査区②－A　全景（北から）

調査区②－A　SD17より南側全景（北西から）

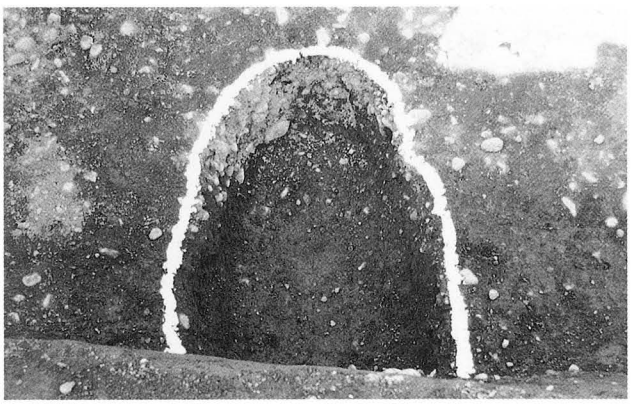
調査区②－B　全景（北から）

調査区②－B　SE 1（北から）

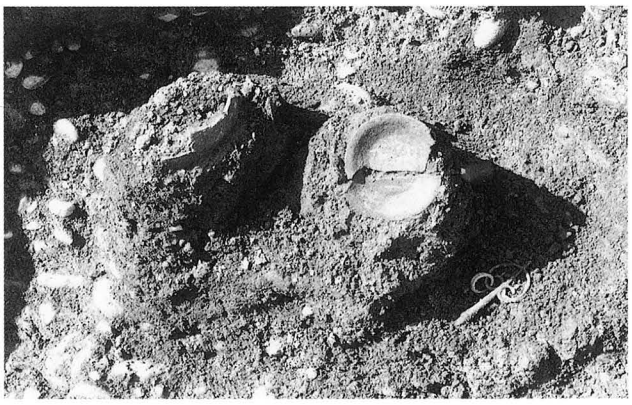
調査区②－A　SK 3 ～SK15（南東から）



調査区②－A　SK16～SK19（北西から）

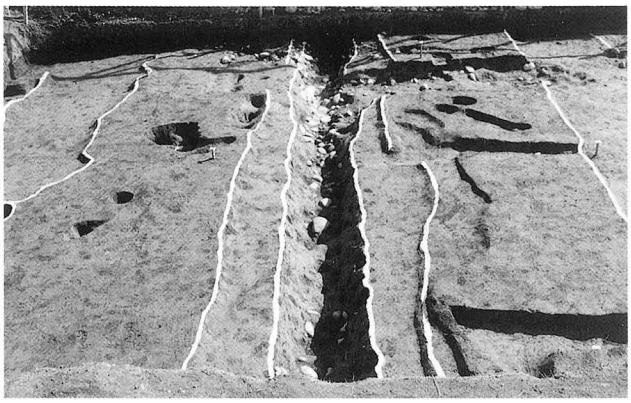


調査区②－A　SK20（南から）

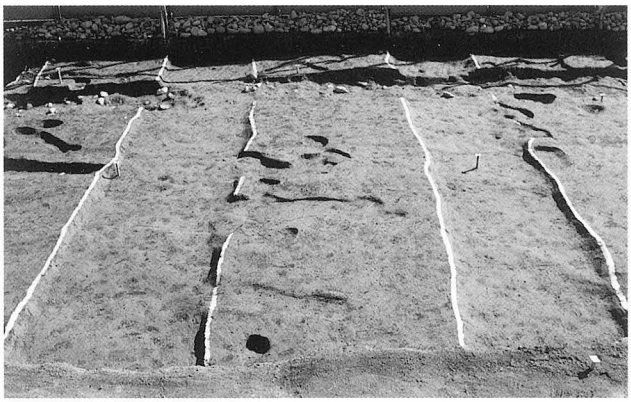


調査区②－A　SK21遺物出土状況

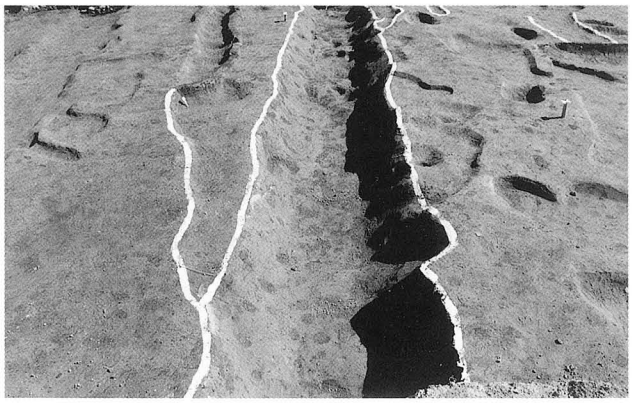
調査区②－B　SK23（東南から）



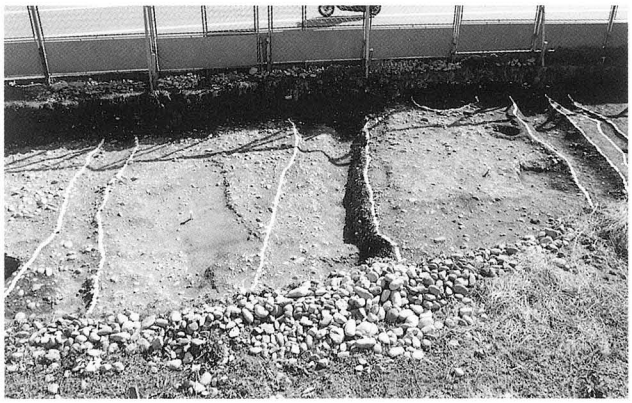
調査区②－A　SD 1（西から）



調査区②－A　SD 2 ・SD 3（西から）

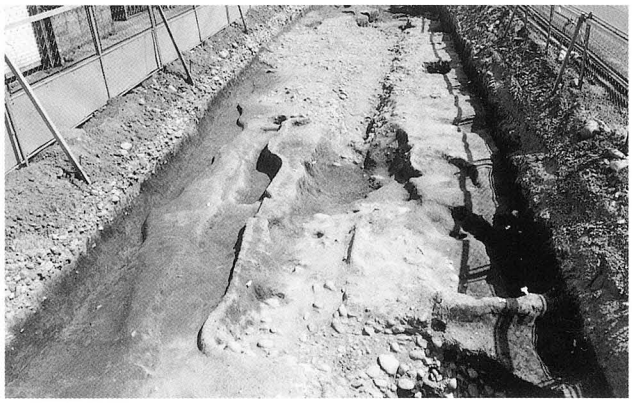


調査区②－A　SD12（西から）



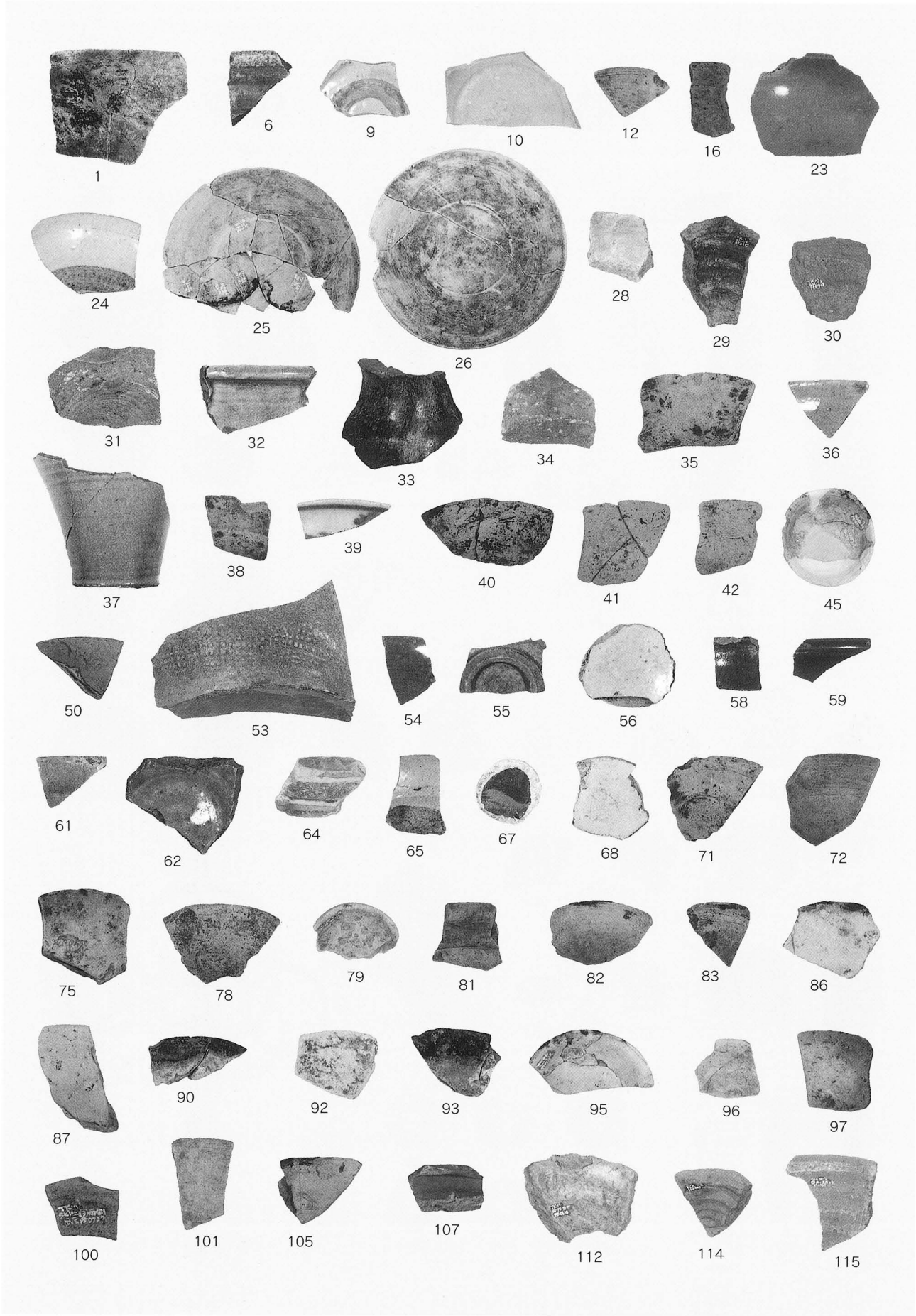
調査区②－A　SD15・SD16・SD17（西から）

調査区②－B　SD22・SD24・SD25（南から）

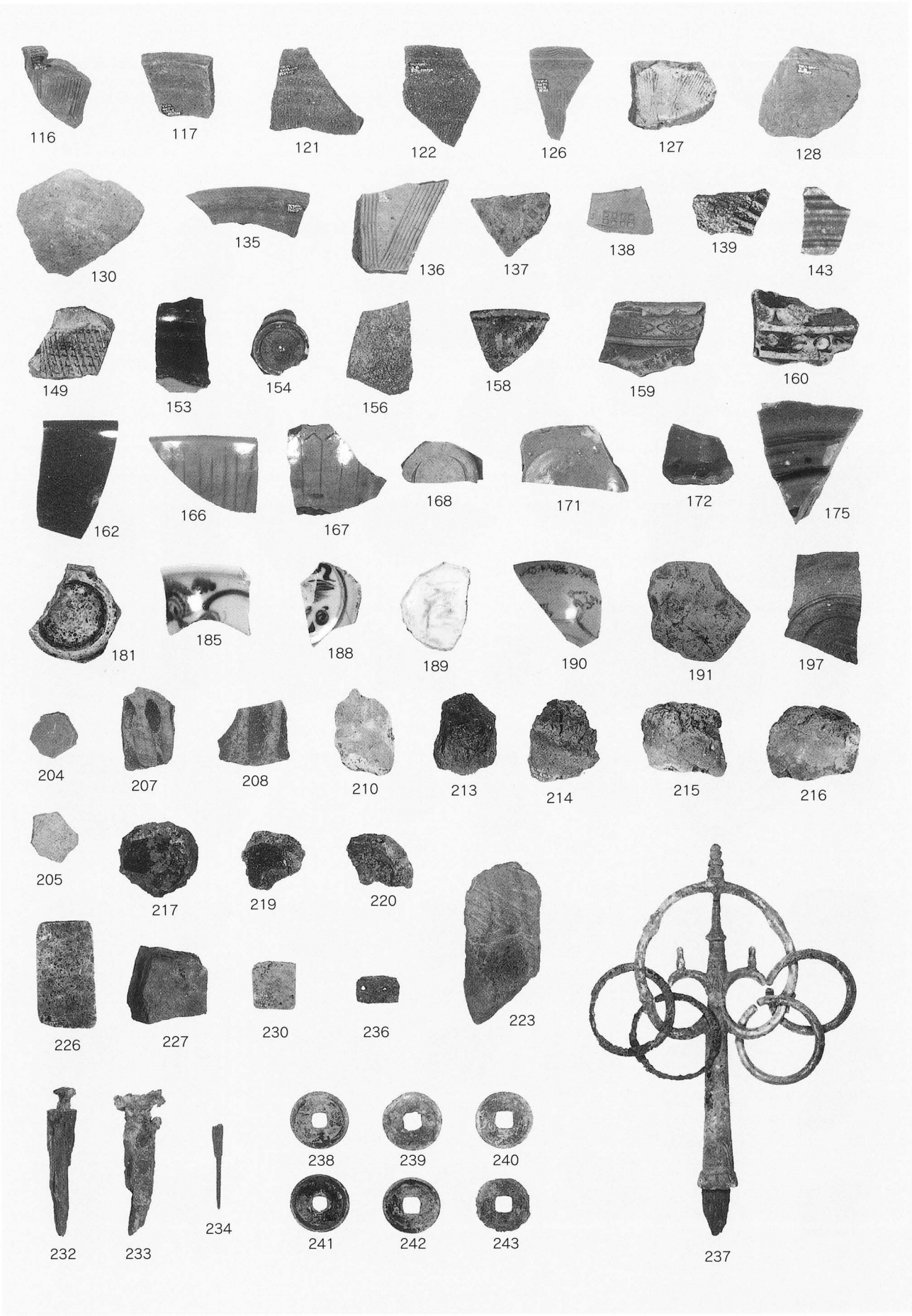


調査区②－B　SK23・SD26（北から）

調査区②－B　SX 8（南から）


1
6
9
10
12
16
23
24
25
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
45
50
53
54
55
56
58
59
61
62
64
65
67
68
71
72
75
78
79
81
82
83
86
87
90
92
93
95
96
97
100
101
105
107
112
114
115

調査区②　遺物


116
117
121
122
126
127
128
130
135
136
137
138
139
143
149
153
154
156
158
159
160
162
166
167
168
171
172
175
181
185
188
189
190
191
197
204
207
208
210
213
214
215
216
205
217
219
220
223
226
227
230
236
232
233
234
238
239
240
241
242
243
237

調査区②　遺物

調査区②－C　全景（南から）

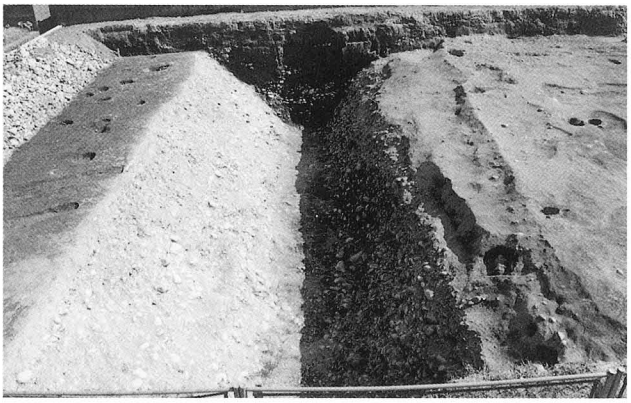
調査区②－D　全景（北側）

調査区②－D　全景（南側）

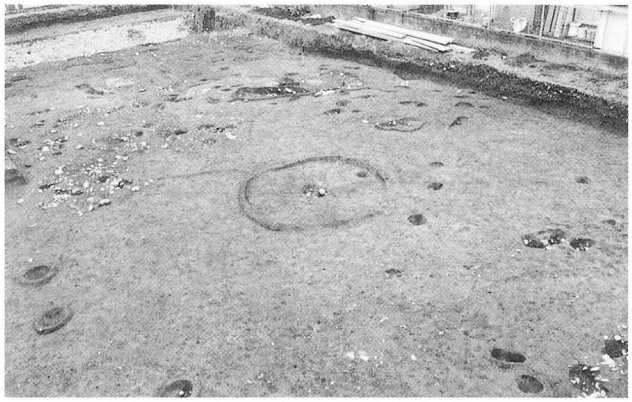
調査区③　全景（南から）

調査区③　SI 1・SX 1（北から）

調査区④　堀（北西から）

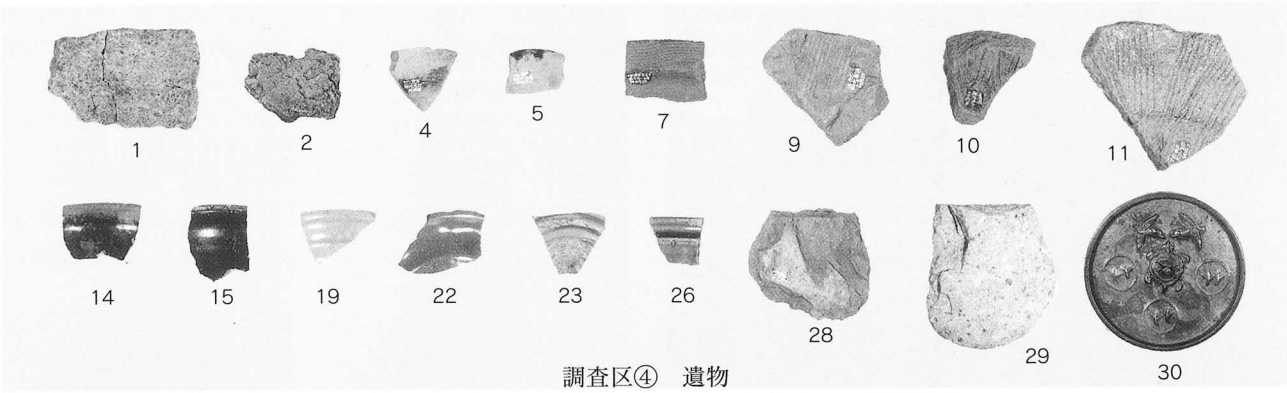


調査区④　堀（北から）



調査区④　全景（北西から）

調査区④　SI 1（北から）

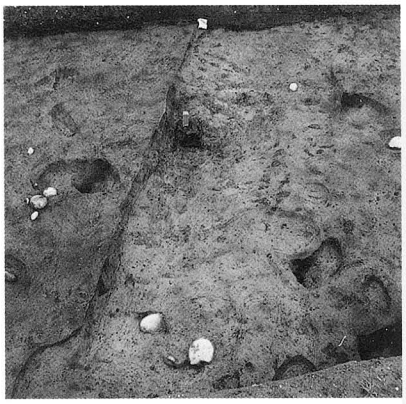


調査区④　遺物

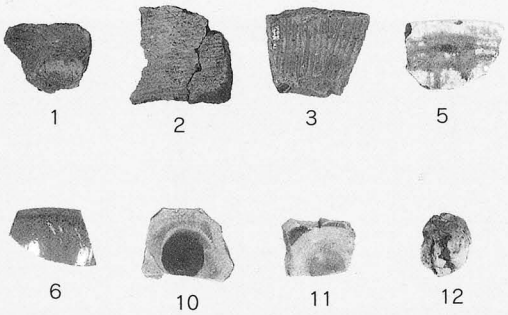
調査区⑤　全景（西から）

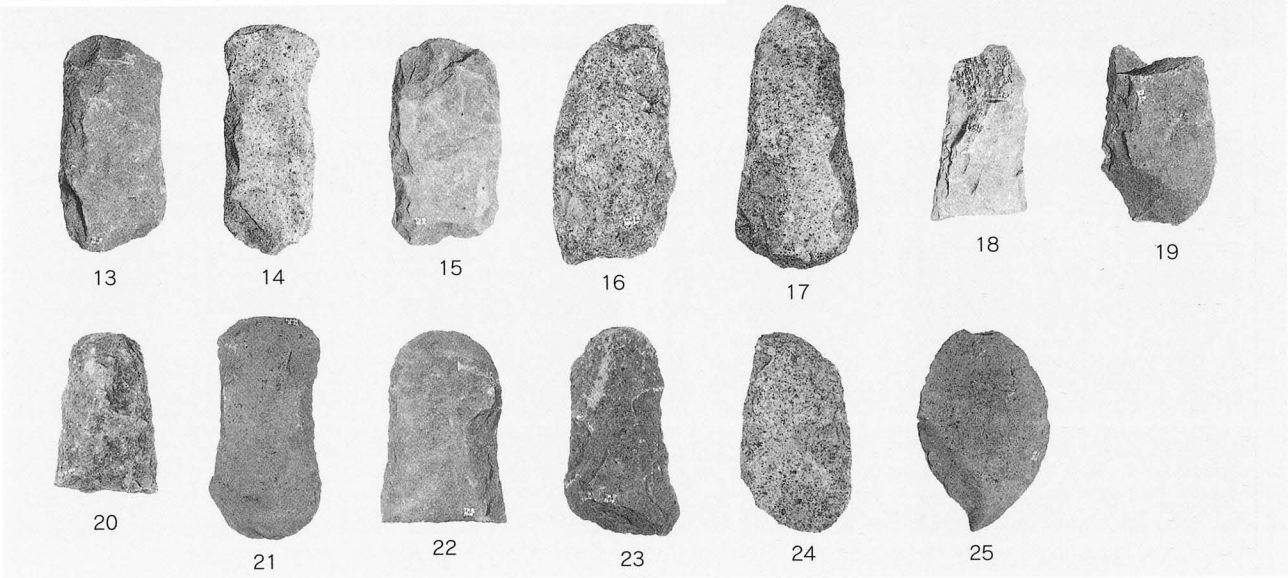
調査区⑤　南西側全景（南西から）

調査区⑤　南側全景（西から）

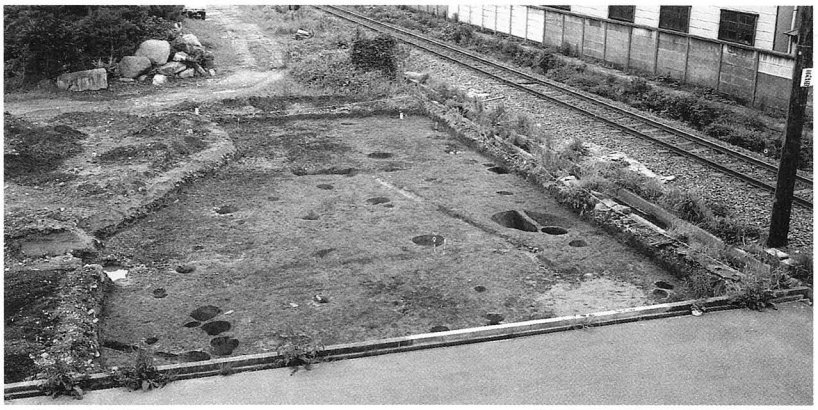


調査区⑤　SD１（南から）



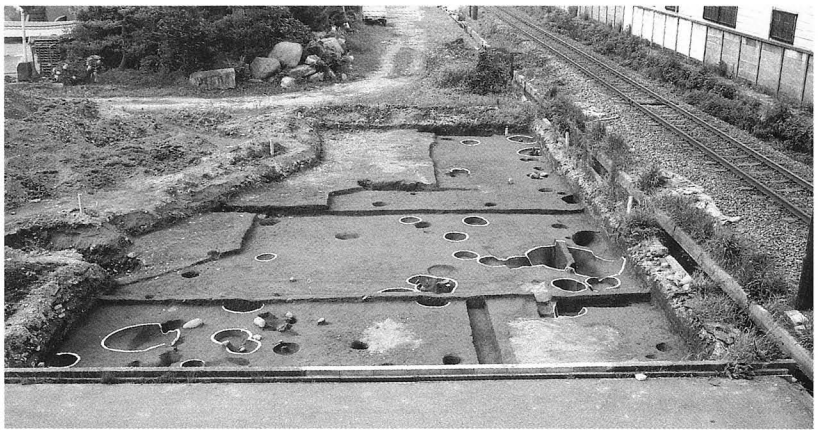


調査区⑤　遺物



調査区⑥　上層遺構検出状況

調査区⑥　埋設土器 1



調査区⑥　下層遺構（白線）検出状況

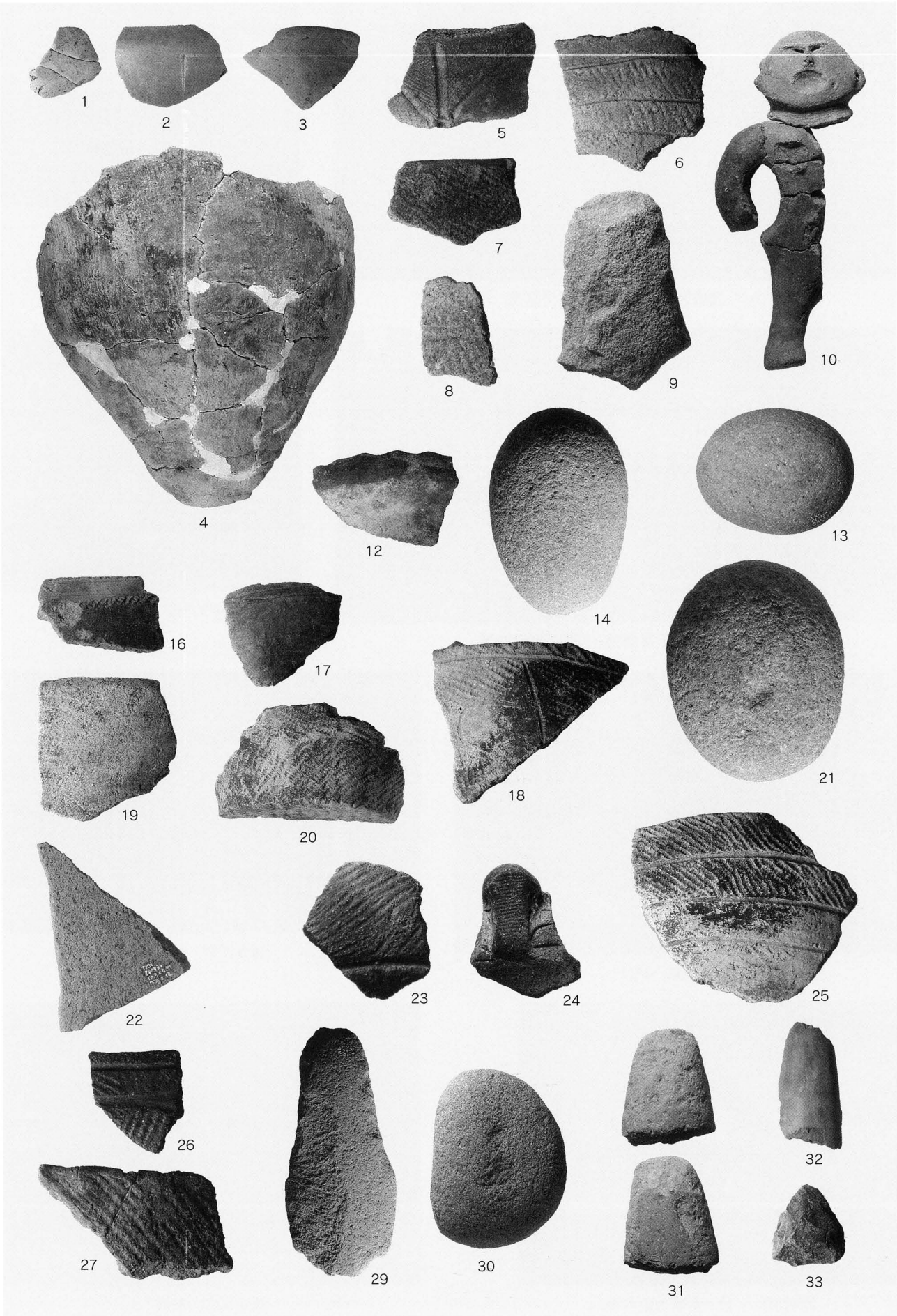
調査区⑥　P05・P06

調査区⑥　P04

調査区⑥　P09

調査区⑥　P04土偶出土状況

調査区⑥　P10

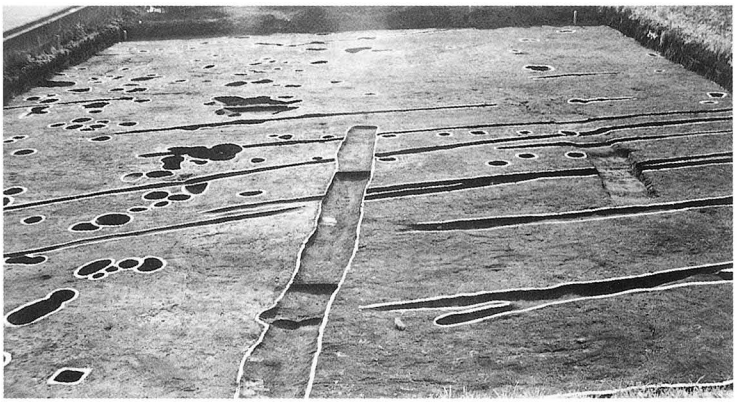

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
12
13
14
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
29
30
31
32
33

調査区⑥　遺物

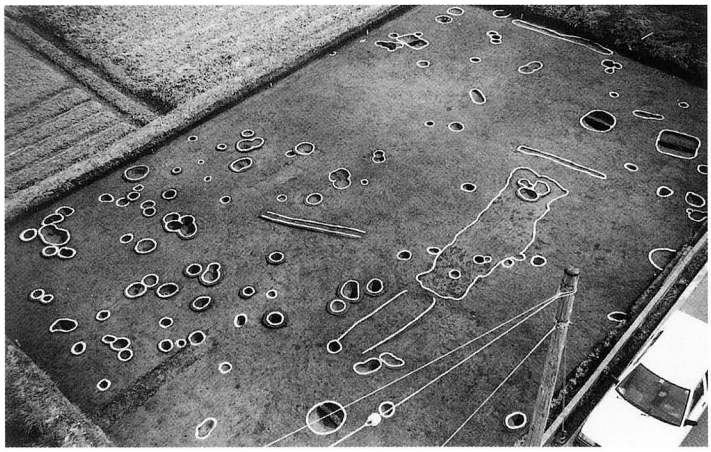
調査区⑦－A　全景（南東から）

調査区⑦－A　SD１（南西から）

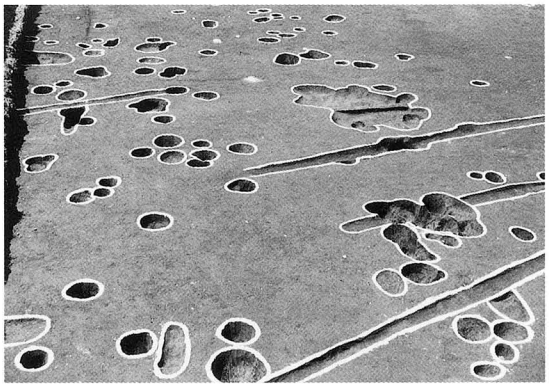
調査区⑦－A　SK１（北から）



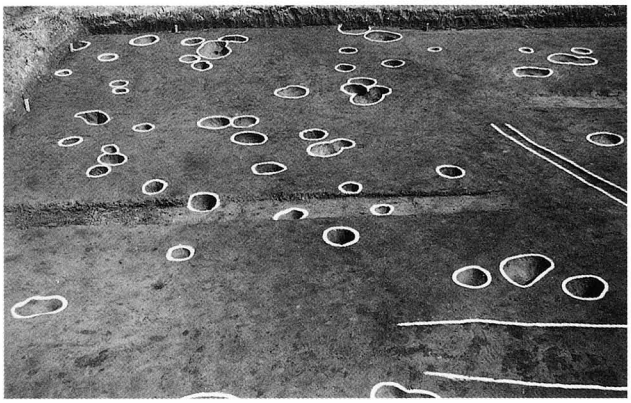
調査区⑦－B　東側全景（東から）



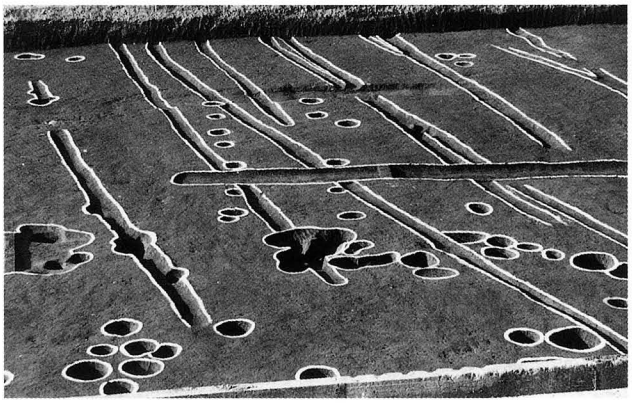
調査区⑦－B　西側全景（南西から）



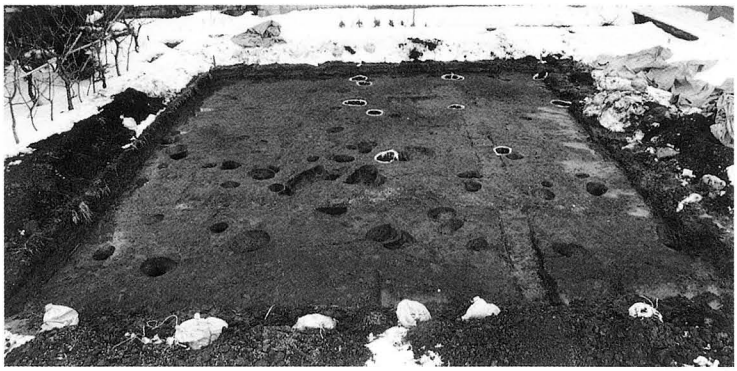
調査区⑦－B　SB３周辺（東から



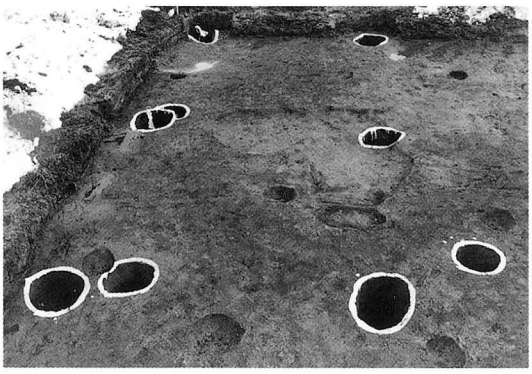
調査区⑦－B　SB７周辺（南から）



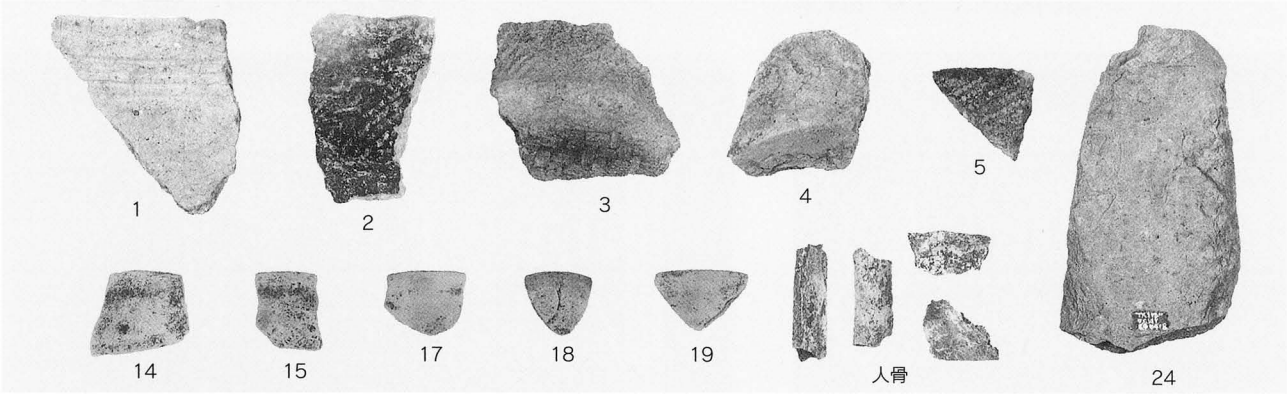
調査区⑦－B　SB２・畝溝（南から）



調査区⑦－C　全景（西から）



調査区⑦－C　SB１（北から）

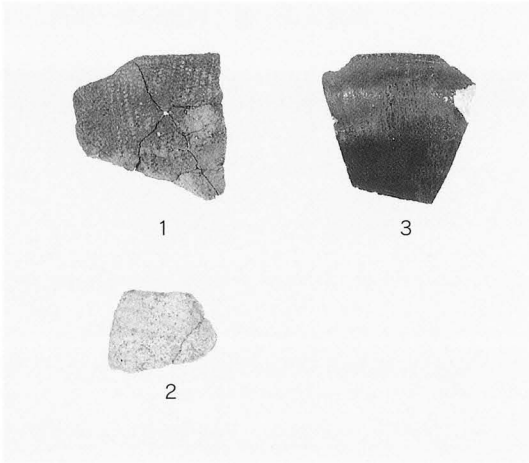


調査区⑦　遺物

調査区⑧　全景（南から）

調査区⑧　北側全景（西から）

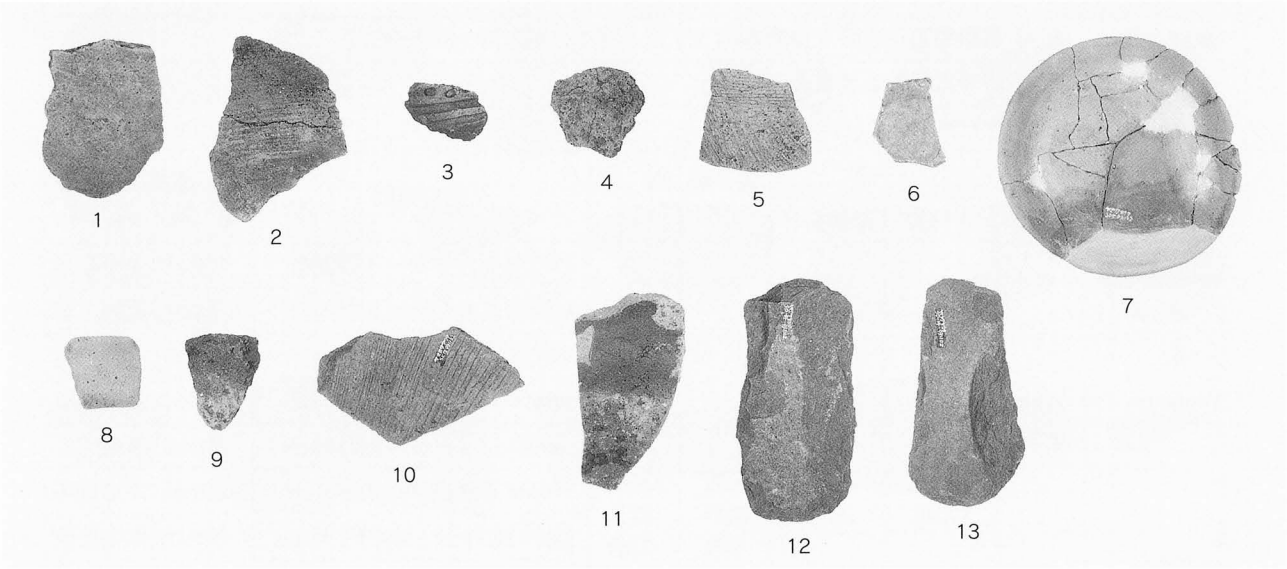
調査区⑧　全景（北から）



調査区⑧　遺物

調査区⑨　全景（東から）

調査区⑨　SK１（北から）



報告書抄録

ふりがな	とがしかんせき
書名	富樫館跡
副書名	
巻次	Ⅲ
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田村　昌宏　　吉田　　淳
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	石川県石川郡野々市町本町５丁目４－１　TEL 076－248－8545
発行機関	野々市町教育委員会
発行年月日	2003年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
富樫館跡①（とがしかんせき）	野々市町（のいちまち）住吉町（すみよしまち）	17344	16039	36度31分32秒	136度37分32秒	1987年１月５日～１月26日	650㎡	店舗建築
②－A・C						1994年９月７日～12月27日	1200㎡	道路工事
②－B						1995年５月23日～７月28日	700㎡	道路工事
②－D						1992年６月１日～６月12日	35㎡	側溝工事
③						1995年12月11日～12月19日	300㎡	道路工事
④						1994年４月19日～７月８日	600㎡	住宅建築
⑤						1996年10月14日～1997年１月20日	960㎡	住宅建築
⑥						1988年７月11日～７月31日	150㎡	住宅建築
⑦－A	野々市町（のいちまち）扇が丘（おうぎがおか）					1995年10月９日～11月４日	300㎡	住宅建築
⑦－B						1989年４月４日～４月26日	600㎡	住宅建築
⑦－C						1991年２月21日～３月７日	90㎡	住宅建築
⑧						1991年10月22日～10月30日	200㎡	住宅建築
山川館跡⑨（やまかわかんせき）	野々市町（のいちまち）高橋町（たかはしまち）	17344		36度31分45秒	136度37分30秒	1993年10月19日～11月９日	200㎡	住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富樫館跡	館跡	縄文時代	土坑	縄文土器 打製石斧 土偶	
		中世	堀 土坑	土器・陶磁器 鏡 錫杖	室町期加賀国守護所の一部を調査 城下町の一端も確認。
山川館跡	館跡	縄文時代	土坑	縄文土器	館に関連する遺構・遺物を確認
		中世	溝		

富樫館跡Ⅲ

発行日　平成15年３月31日

発行者　野々市町教育委員会
〒921-8815
石川県石川郡野々市町本町５－４－１

印　刷　㈲アサヒヤ印刷